「講談社 青い鳥文庫」刊行のことば

太陽と水と土のめぐみをうけて、葉をしげらせ、花をさかせ、実をむすんでいる森。小鳥や、けものや、こん虫たちが、春・夏・秋・冬の生活のリズムに合わせてくらしている森。森には、かぎりない自然の力と、いのちのかがやきがあります。

本の世界も森と同じです。そこには、人間の理想や知恵、夢や楽しさがいっぱいつまっています。

本の森をおとずれると、チルチルとミチルが「青い鳥」を追い求めた旅で、さまざまな体験を得たように、みなさんも思いがけないすばらしい世界にめぐりあえて、心をゆたかにするにちがいありません。

「講談社 青い鳥文庫」は、七十年の歴史を持つ講談社が、一人でも多くの人のために、すぐれた作品をよりすぐり、安い定価でおおくりする本の森です。その一さつ一さつが、みなさんにとって、青い鳥であることをいのって出版していきます。この森が美しいみどりの葉をしげらせ、あざやかな花を開き、明日をになうみなさんの心のふるさととして、大きく育つよう、応援を願っています。

昭和五十五年十一月

講談社

講談社 青い鳥文庫　21-1

たのしいムーミン一家（いっか）

トーベ=ヤンソン

山室（やまむろ） 静（しずか） 訳

1980年11月10日　第1刷発行
1998年8月7日　第48刷発行

（定価はカバーに表示してあります。）

発行者　野間佐和子

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2－12－21　郵便番号112-8001

電話　出版部　(03)5395－3536
　　　販売部　(03)5395－3625
　　　製作部　(03)5395－3615

N.D.C. 993　262p　18cm

装　丁　久住和代

印　刷　図書印刷株式会社

製　本　図書印刷株式会社

ISBN4-06-147044-2　（児二）

（落丁本・乱丁本は，講談社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。）

■この本についてのお問い合わせは，講談社児童局「青い鳥文庫」係にご連絡ください。

＊著者紹介

トーベ=ヤンソン

1914年，フィンランドの首都，ヘルシンキに生まれる。ストックホルムとパリで絵を学ぶ。1948年に出版した「たのしいムーミン一家」が世界じゅうで大評判となり，以降「ムーミンパパの思い出」「ムーミン谷の冬」「ムーミン谷の夏まつり」など，一連の傑作を書いている。

＊訳者紹介

山室（やまむろ）　静（しずか）

1906年，鳥取市に生まれる。東北大学文学部卒業。元日本女子大学教授。おもな著書に「北欧文学の世界」「アンデルセンの生涯」（毎日出版文化賞受賞）「山室静著作集」（平林（ひらばやし）たい子（こ）文学賞受賞）などがあるほか，児童文学，世界の昔話などに関する著訳書も多い。

ひろく、またあたたかで、寓話のせまさ、冷たさはもちません。

ヤンソンさんがヘルシンキにもっている家には、大きなアトリエがあって、かの女はそこで絵をかくだけでなく、しょっちゅう友人をあつめてパーティーを開いたり、ときには劇をやったりしているそうです。

かの女はほかにフィンランド湾に小さい島を一つもっていて、夏にはそこに一人でとじこもってすごし、このときにはもっぱら童話を書くのだそうです。かの女は友だちがおおく、またムーミンなんかの空想の動物もしょっちゅうたずねてくるため、ひとりぐらしをしていても——かの女は独身なのです——ちっともさびしくないそうです。

先年、ヤンソンさんが日本へ遊びにきたとき、わたしははじめてかの女に会いました。西洋の中年のおばさんとなると、どっちがたてだか横だかわからないほど太った、こわいような人がおおいのに、かの女はほっそりして小がらな、そしてたいそう内気な人に見えたので、わたしもすっかり親しみを感じました。

これは、ツワイグベルイ流にいえば、フィンランドが戦後のくるしい時代をもりっぱにきりぬけて、経済的にも立ちなおり、人々が自信をもって生きることができるようになったことの反映といえましょう。もちろん、ヤンソンさんも、その間には成長して、地位も安定してきたからでしょう。

はたして「たのしいムーミン一家」は、大成功で、まもなく英訳され、それがまたヤンソンさんの名をたちまち世界じゅうに知らせました。それからは、「ムーミンパパの思い出」「ムーミン谷の冬」「ムーミン谷の夏まつり」「ムーミン谷の仲間たち」「ムーミンパパ海へいく」などをつぎつぎにだし、また「さびしがりやのクニット」などの美しい絵本もつくって、世界の人気作者になります。一九六六（昭和四十一）年には、児童文学の世界でいちばん名誉な、国際アンデルセン賞の大賞をうけました。

ヤンソン童話の特色は、みんな架空の動物を主人公にして、いかにもむじゃきに、たのしく、かれらの生活をえがきだしながら、それがそのまま人間のすがたを、うつしだしていることでしょう。だから、お話の種類からいえば、寓話とか、アレゴリーのなかまにはいる作だと見る人もあります。しかし、ふるい寓話やアレゴリーが、イソップ物語やインドのジャータカなどのように、せまいモラルを説教するのにたいして、ヤンソンさんの童話は、なにか特定のモラルを説くのではありません。かの女の、人生をながめる目はずっと

の童話には、そういう生命の不安にたいするおびえがあったといえそうです。
　しかし、そういう作風では、童話が成功するのはむずかしいことですし、もともとそれは童話にふさわしい題材とはいえないでしょう。未来のにない手である少年少女にたいしては、たとえ人生がどれだけ悲惨や不安にみちたものであっても、それをユーモアや希望でつつみ、たのしく明るい面にも光をあてて、全体としては世界を肯定的にえがくことがひつようだからです。
　そういう点で、「小さいトロールと大洪水」と「ムーミン谷の彗星」は、童話としてはまだふくらみがたりず、そのために成功しなかったのだと思います。それが、そのつぎにだした「まもののぼうし」（一九四八年）――これがいまみなさんの手にしている「たのしいムーミン一家」の原名です――になると、作者の気持ちが大きく変化しているのです。
　そこにももちろん、人生の不安や不条理――飛行おにやモランやニョロニョロの存在などが不気味なかげをなげているのですが、全体はいかにもあたたかい目でながめられて、そういう不気味な存在をも、またトフスランとビフスランや、じゃこうねずみのような、じぶんかってな存在をも、愛情とユーモアでつつみこむ、人生肯定的な見方が確立していると思います。

ヤンソン童話の特色

ところが、そういう画家が、童話を書きだすのです。一九四五（昭和二十）年にでた「小さいトロールと大洪水」という作品が、ヤンソンさんの童話の処女作だといいます。ただ、この本は少部数をすっただけで、その後は絶版になっているため、わたしはまだ見ていません。処女作には、その作家の一生の歩みが暗示されていることがおおいのですから、この作品を読んだら、きっとトーベ＝ヤンソンという作家の秘密が、いろいろとわかると思うのですが。

ツワイグベルイという人の書いた「スウェーデン児童文学史」によると、それは五十ページたらずのうすい本で、お話はいろいろの小さい動物や虫たちが、大洪水にくるしめられることをあつかったものだといいます。そしてツワイグベルイは、作者がこういうお話を書いたのは、第二次世界大戦で、小国フィンランドがなめなければならなかった悲惨な体験のせいではないか、と考えています。たしかに、そういう事情があったのかもしれません。

ヤンソンさんがそのつぎに書いた「ムーミン谷の彗星」（一九四六年）も、とつぜん地球をおそってきた彗星に、みながおびえてにげまどう話です。たしかにヤンソンさんの初期

だから、トーベ＝ヤンソンさんはフィンランド生まれといっても、スウェーデン語をつかって育ち、少女時代をすぎると、スウェーデンにいって教育をうけました。両親の血をうけて、はやくから絵に才能をあらわし、やがて本格的に絵の修業をするため、パリにでかけました。

かの女がいちばんねっしんに勉強したのは、ふるくから壁画などにもちいられたフレスコ画の方面でした。これをあたらしい感覚で生かして、近代建築にマッチさせたいというのが、かの女のねがいだったようです。それとともに、もちろん、いろいろと装飾美術の研究もしました。

帰国すると、新進の画家としてみとめられて、ヘルシンキのあちこちの建物に壁画をかくまでになり、ある出版社やレストランのかべを、いまそれがかざっているそうです。

ただ残念なことに、このまえフィンランドにいったときは、わたしはまだヤンソンさんのことを知らなかったので、それらの絵は見ていません。かの女がじぶんの童話集につけているさし絵や、かの女がじぶんでこしらえた絵本からみて、きっとそれらのフレスコ画も、ファンタジーを生かしたおもしろいものでしょう。こんどヘルシンキをたずねる機会があったら、ぜひ見てきたいものと思っています。

ヤンソンさんは、一九一四（大正三）年にフィンランドの首都ヘルシンキに生まれました。おとうさんは有名な彫刻家で、おかあさんのほうも、画家として、また商業デザイナーとして、かつやくしたといいます。

ですからむすめのトーベ——トーベは北欧の女の人によくある名ですが、意味は不明で、たぶん女神の話からきたものだろうとされています——は両親のあたたかい愛情と芸術一家としての自由な空気の中で、すくすくと、もって生まれた才能をのばすことができたようです。

かの女のおいたちを書いた短編集「彫刻家の娘」によると、ヤンソンさんはなかなか空想ずきの、ちゃめっけもある少女だったようで、いろいろおもしろい思い出話がでてきます。

ただ、ヤンソンさんは、フィンランド生まれといっても、民族的にいえば、スウェーデン人の系統です。フィンランド人はアジア系の民族ですが、となりのスウェーデンがはやくから開けて強大だったため、その支配を三百年あまりもうけ、国内にもスウェーデン人がおおく住みついて、ことに政治や文化の方面では、大きな勢力をしめてきました。

フィンランドが独立した今日でも、スウェーデン系の人たちは、あいかわらずスウェーデン語をもちい、学校や教会や新聞・雑誌なども、フィンランド語によるものとならんで、スウェーデン語によるものが、ひろく普及しているのです。

フィンランドでもスウェーデンでも、わたしは町を歩いていて大きな本屋を見かけると、児童書の売り場にはいっていって、たずねたものでした。「このごろ評判になっている童話作家は、だれだれでしょうか。その人の書いた本があったら、見せてください。」と。それなのに、どこの本屋でも、トーベ＝ヤンソンという名まえをおしえてくれる人はなく、その本も、すくなくとも、目につくような場所には、ならんでいなかったものです。

そんなわけで、北欧の諸国でいろんな童話作家の本をかなりたくさん買ってきたのに、その中にはヤンソンさんの本は一さつもなかったしまつでした。「長くつ下のピッピ」などで知られるリンドグレーンの本は、どこの店でもすすめられましたが。

ところが、その後のたった十年あまりの間に、ヤンソンさんの人気は、大先輩のリンドグレーンをおいぬくほどになったのでした。それはおそらく、かの女が童話の主人公として創造したムーミンというユーモラスで愛情のふかい動物のせいであり、また作者自身がじぶんの童話に、いかにもぴったりのさし絵をつけているからでしょう。

この独特のお話と絵とのむすびつきで、ヤンソンさんは、さいしょのうちこそ、みとめられるのにすこしてまどったけれど――なにしろフィンランドというかたすみの国の生まれでしたから――一度それが英訳されて国外に知られると、たちまちに世界の人気をさらったのでした。

解説…ヤンソンさんとムーミン童話

山室　静

芸術一家に生まれて

ムーミン童話と、その作者トーベ＝ヤンソンさんは、いまや日本でも世界のどこでも、たいへんな人気です。しかもその人気の中心は、子どもたちはもちろんですが、むしろ大学生やわかいママさんたちにあるかと思われるほどで、訳者のわたしは、そういう人たちから、よく手紙をもらいました。さらには、ちょっと思いがけないような人たち――大学のえらい先生や、大会社の重役や、有名な小説家や詩人や評論家など――からまで、「きみのこんど訳した童話はおもしろいね。」といわれたものです。

ところが、おもしろいことに、いまではそれほど評判なヤンソンさんとムーミン童話なのに、ほんの十五年ほどまえ、わたしがフィンランドとスウェーデンをたずねたときは、まだかの女もその童話も、ほとんど知られていなかったのでした。

ばかなねがいをしたものには、やりなおしをする機会さえもあたえられました。それほど飛行おには、きげんがよかったのです。

もういちどダンスがはじまり、木々の下には、あらためてパンケーキをのせたおさらがはこばれてきました。ヘムレンさんは、いよいよ花火をうちあげますし、ムーミンパパは、例のりっぱな表紙をつけた自伝をもってきて、わかいころの思い出を、声高く朗読しました。

これほどさかんなおいわいは、ムーミン谷でも、ほんとうにはじめてだったのです。

おお、なにもかもたべつくし、のみつくして、なにもかも話しあい、足がちぎれるほどダンスをして、それから夜あけまえのひっそりした林の中を、家にねむりにかえっていくことは、なんてすばらしい気持ちだったでしょう。

それから飛行おには、世界のはてへとんでいきました。かあさんねずみは、じぶんの巣の中にもぐりこみました。だれもかれも、ほかの人にまけずに幸福でした。

それにしても、ほかのだれよりも幸福だったのは、たぶんママといっしょに庭をぬけていくときの、ムーミントロールだったでしょうよ。おりしもお月さまは、夜あけの光の中で青ざめ、木々は、海からふいてくる朝のそよ風に、サラサラと音をたてていました。

ムーミン谷に、もう秋がきたのでしょうか。でも、それでなくては、春はまためぐってきませんものね。

は、うれしがっていたことでしょう。あの人のぼうしから長ぐつまで、それこそよろこびがあふれていたのです。

ひとこともいわずに、飛行おにはさっとマントを草の上でふりました。するとたちまち、もういちどそこらはピンク色の光でみたされて、「ルビーの王さま」と、ついの宝石「ルビーの女王」が、みんなの目のまえの草の上にころがっていたのです。

「もうあなたも、ななしくはかいでしょ?」

こう、ビフスランがいいました。

「かなしいとはいえんわい。」

こう飛行おにはいって、きらきらかがやいている宝石を、しずかにマントの上にのせると、またいいました。

「さあ、だれでもほしいものがあったら、いっておくれ。朝になるまでは、どんなのぞみでもかなえてやるからな。お日さまがのぼるまでに、わしは家にかえらなくちゃならないが。」

いまや、ほかのものたちの番がきたのです。

飛行おにのまえには、ぺちゃくちゃしゃべったり、わらったり、口ぶえをふいたりしている森の動物たちの、大きな輪ができました。——みんながみんな、のぞみをかなえてもらおうとしていたのです。

すごい顔をしているのは、見ちゃいられなかったんだ。――それだけのことさ。」
「あはは。さあ、ムーミン家のなかまでのこっているのは、トフスランとビフスランだけだよ。きみたちは共同でのぞみをいってもいいよ。わしには、ふたりの区別はつかないものな。」
こう、飛行おにはいいました。
「あなたは、じぶんでじぶんののぞみをかなえることはできないの？」
と、ビフスランがききました。
「それはできんのじゃ。わしはただ、ほかのものののぞみをかなえてやるのと、じぶんのすがたをかえるのができるだけなんだ。」
と、飛行おにはかなしそうにいいました。
トフスランとビフスランは、じっとあいてを見つめていましたが、それから頭をよせあって、長いことささやきあっていました。
それからビフスランが、おごそかにいいました。
「わたしたち、あなたのかわりにのぞみをいうことにしたのよ。――あなたはいいかたですもの。さあ、わたしたちのとおなじだけ、ルれいなきビーをだしてよ。」
飛行おにがわらうことができるなんて、だれだって思いはしなかったのです。ところが、そのときみんなの目には、飛行おにのにっこりしたのが、はっきりと見えました。どんなに飛行おに

と、飛行おにはいいました。
「いとしい、いとしいにいさん。」
と、かがみをつかんで、スノークのおじょうさんはさけびました。
「どうかわたしの、むかしのかわいい目をとりもどしてちょうだい。わたし、ものすごい顔になってるわ。」
「ああ、いいよ。」
と、とうとうスノークはいいました。
「家族のためを思って、そうしてやろう。だけど、これからはもうすこし、きどらないようにしてもらいたいね。」
スノークのおじょうさんは、もういちどかがみを見ると、よろこびのさけびをあげました。でも、まつげはじっさいのところ、いくらか長くなっていたのです。
おじょうさんは、顔じゅうをほころばせながら、兄をだきしめていいました。
「あなたはほんとにはちみつのつぼよ、おいしいパイよ！　タイプライターは、クリスマスのプレゼントに買ってあげるわよ。」
スノークはすっかりへいこうしていいました。
「よせやい。みんなの見ているまえで、キスなんかするなよ。ぼくは、ただおまえがあんなもの

だね。」
と、飛行おにはいいました。
「そりゃそうだけど、ぼくはまるっきり、べつのものを考えていたんだからね。妹のやつが、ばかなことをのぞんだとしても、そりゃぼくのせいじゃないものな。」
　こういってスノークは、ことわりました。
「じゃあ、きみはいったい、なにをのぞんでいるの。」
と、飛行おにはききました。
「機械です。——ただしいものかまちがったものか、よいものかわるいものかを、すぐに見わける機械なんです。」
と、スノークはいいました。
「そいつはむずかしすぎるよ。わしにゃ、どうにもならんわい。」
　頭をふりながら、あいてはいいました。
「そんなら、タイプライターでいいや。妹は、いまの目でだって、おなじくらいきれいに見えるはずだもの。」
と、スノークは、ふくれっつらでいいました。
「だけど、まえほどかわいくは見えないな。」

「ふむ、――よろしい、そんなら、そらいけ。」

こう飛行おにがさけんだとたんに、おどろきのさけびが、みんなの口からほとばしりました。スノークのおじょうさんが、まるっきりかわってしまったからです。

「きみはいったい、なにをしたんです?」

と、ムーミントロールはあつくなっていいました。

「わたし、あの木の女王さまのような目をもちたかったのよ。あなたは、あの人がきれいだといったでしょ、そうじゃなくて?」

と、スノークのおじょうさんはいいました。

「そりゃそうだけど、――し、しかし……。」

と、ムーミントロールは、いかにもかなしそうにいいました。

「わたしのあたらしい目は、きれいだと思わない?」

こういってスノークのおじょうさんは、なきだしてしまいました。

「いいから、いいから。もしそれがぐあいわるかったら、きみのにいさんに、もとの目をとりもどしてもらえばいいさ。どう



「ふむ。——しょうじきにいって、わしはスノークから移植ごてをかりていたのを、こわしてしまった。だから、わしはだ、あれのかわりがほしいんです。」

　こういってヘムレンさんは、飛行おににあたらしいスコップをだしてもらうと、いかにもそだちがいい人らしく、上品にえしゃくしました。（きものをきている人がおじぎをすると、いかにもやぼに見えるので、ヘムレンさんはいつでもちょっとひざをまげて、えしゃくするのです。）

「まほうをつかうのに、もうおつかれにならなくって？」

と、スノークのおじょうさんがききました。

「こんなやさしいことでは、つかれやしませんさ。で、あなたはなにをおのぞみなんですか、きれいなおじょうさん。」

と、飛行おには答えました。

「わたしのはほんとにむずかしいのよ。ちょいと、お耳をかしていただけます？」

と、おじょうさんはいいました。

　そうやっておじょうさんがささやいたとき、飛行おにはすこしおどろいたらしく、こういってききました。

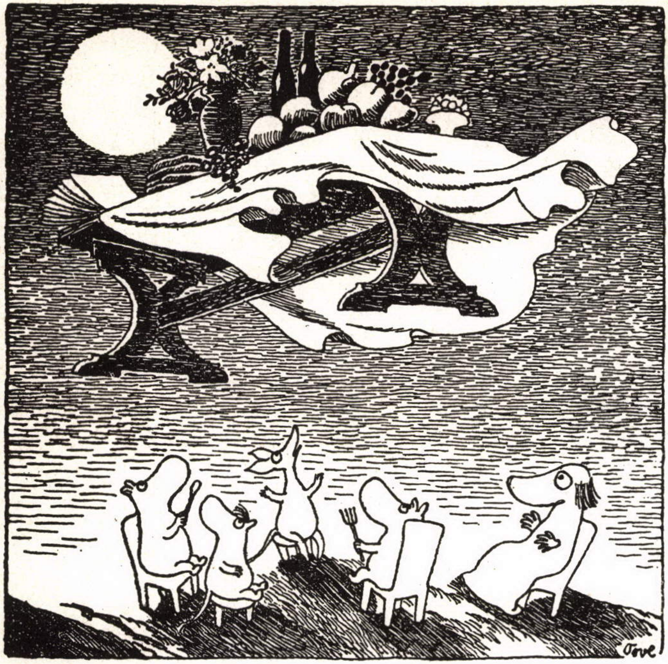
「ほんとにあなたは、それをおのぞみなのですか。」

「ええ、たしかに。」

のです。
「こんどはぼくだい……。」
と、スニフがきいきい声でさけびました。
「おねがい。――ぼくにはボートをね。まっかな帆と、ジャカランダ（のうぜんかずらの一種）のマストと、エメラルドのかいうけのある、貝がらみたいなボートですよ。」
「そりゃあ、すてきなねがいだね。」
こう飛行おにはやさしくいって、マントをひとふりしました。
みんなはいきをころして、まちうけました。ところが、ボートはでてきません。スニフは、がっかりしてききました。
「マントがいうことをきかないの？」
「なに、きくともさ。ただ、ボートは浜べにおいてあるんだよ。あすの朝、いってごらん。」
と、飛行おにはいいました。
「エメラルドのかいうけがついてるんでしょうね。」
と、スニフはねんをおしました。
「もちろんだ。かいうけが四つと、予備のが一つあるんだぜ。さあ、おつぎ。」
と、飛行おにはいいました。

「さあ、こんどはわしの番だ。」
と、ムーミンパパはいいました。
「だけど、えらぶのがひどくむずかしいわい。思いつくものはどっさりあるが、ぜったいにこれでなくちゃならんというものがない。温室（おんしつ）はじぶんでつくったほうがおもしろいし、こやしの山だってそうだ。それに、わしはたいていのものはもってるんでなあ。」
「きっとあなたには、なにものぞむことがないんです。そんなら、ぼくにかわらせてくれない？」
こう、スニフがいいました。
「そうだな——。しかし、そうかといって……。」
と、ムーミンパパはまよいました。
「おいそぎにならなくちゃ、あなた。」
と、ムーミンママがせっついていいました。
「そんならどう、——あなたの自伝（じでん）をとじる、すてきなつづりこみにしたら。」
「おお、そいつはうまい思いつきだ。」
と、幸福（こうふく）そうにパパはさけびました。
そして飛行（ひこう）おにが、赤いモロッコ皮（がわ）の表紙（ひょうし）にしんじゅをはめこんだ、金色のとめ金のついたつづりこみを二さつ、ムーミンパパにわたしたとき、みんなはいっせいに、はくしゅかっさいした

持ちのよいものでした。
「ぼく、いいことを思いついたぞ。」
と、ムーミントロールはさけびました。
「ねえ、飛行おにさん、このテーブルを、なにもかも上にのっけたまま、スナフキンのとこまでとばしてやってよ。どこにいるんだか知らないけれど、あの人のいまいるところへさ。」
とたんにテーブルは、パンケーキやジャムや、くだものや花や、ポンスやおかしをのせたま
ま、空にまいあがって、南のほうへとんでいきました。すみにのっかっていた、じゃこうねずみの本までいっしょに。
「へーイ、わしの本をおくりかえしてもらいたいな。」
と、じゃこうねずみはいいました。
「よろしい。――はい、ここにあります。」
こう飛行おにはいって、さっそくとんできた本を、じゃこうねずみにさしだしました。
『すべてが役にたつことについて』だって? こりゃ、どうしたことだ。わしのもっていた本は、『すべてがむだであることについて』だったのに。」
と、本の表紙を読んで、じゃこうねずみはいいました。
しかし、飛行おにには、ただわらっているだけでした。



がもうかなしまないようにって。」と、こうムーミンママはたのみました。
「あれっ。」
と、ムーミントロールは、赤くなっていいました。
「そんなに人目につくとは、ぼく、思わなかったがなあ。」
　そのとき飛行おにが、さっとマントをひとふりしました。と、たちまちかなしみは、ムーミントロールの心から、とびさっていきました。スナフキンにたいするあこがれは、またあえる日をまちうける心にかわってしまったのです。そしてこのほうが、ずっと気

「それじゃあ、きみたちは、どうしてもわしにそれをわたすのはいやなんだね。」
「そうとも……。」
と、ふたりはくりかえしました。
飛行おにはためいきをつきました。そして、しばらく、とてもかなしそうにすわって考えこんでいましたが、さいごにいいました。
「よろしい。じゃあ、きみたちのパーティーをつづけたまえ。わしはきみたちのために、ちょっとしたまほうをつかって、じぶんをなぐさめることにしよう。そうだ、きみたちのひとりひとりに、一つずつまほうをかけてあげよう。さあ、みなさん、なにかのぞみがあったらいいなさい。——そら、ムーミン家の人たちからさ。」
ムーミンママは、ちょっとしあんしてから、こういってきいてみました。
「それはなにか、目に見えるものですか。それとも、目に見えないものでもいいんですか。わたしのいう意味がわかって？　飛行おにさん。」
「ああ、わかるよ。目に見えるものなら、もちろんやさしい。しかし、目に見えないものだってかまいませんよ。」
と、飛行おには答えました。
「そんならわたし、おねがいしますわ。——スナフキンのいなくなったのを、ムーミントロール

すぐさまムーミンママが、パンケーキとジャムをもってきて、大ざらいっぱい、飛行おににやりました。

飛行おにがそれをたべているあいだに、みんなは、すこしばかり近くへよっていきました。パンケーキとジャムをたべているような人なら、そんなにこわくはありませんからね。話しかけたってだいじょうぶでしょう。

「おいしいでしょ。」

と、トフスランがききました。

「うん、ありがとう。パンケーキをたべるのは、なにしろ八十五年ぶりだものなあ。」

と、飛行おにはいいました。

すぐにみんなは、すっかり飛行おにに同情して、もっと近くまでよっていきました。

パンケーキをたべおえると、飛行おには口ひげをふいて、それからいいました。

「わしはきみたちのルビーを、とりあげるわけにゃいかない。そんなことをするのは、どろぼうだからな。しかし、なにかととりかえるわけにはいかんかね。——たとえば、ダイヤモンドの鉱山二つと、いろいろとりまぜた谷いっぱいの宝石じゃどうだね。——宝石だぜ。」

「だめだい。」

と、トフスランとビフスランはいいました。

「おまえはこのルビーの王さまを、どこで見つけたのだ。」
と、飛行おにがききました。

「おけいな、よせっかいよ。」
と、ビフスランがいいました。

トフスランとビフスランの、こんなにいさましいすがたを見たのは、みんなにとって、はじめてでした。

「わしはそいつを、三百年もさがしていた。ほかのものはなにもかも、どうでもいいんじゃ。」
こう飛行おにはいいました。

「おくらだって、ぼんなじだい。」
と、トフスランもやりかえしました。

「あれをこの子たちからとっちゃだめだよ。あれはほんとに、モランのおばさんから正式にゆずってもらったんだもの。」
こう、ムーミントロールが口をだしました。でも、飛行おにの古いぼうしととりかえたことは、いいませんでしたがね。とにかく飛行おには、あたらしいぼうしをもっているように見えました。

「なにかたべるものをくれ。これじゃあ、神経がたまらない。」
と、飛行おにがいいました。

こんどは森のねずみが、
「いとこさん、こんばんは。」
と、声をかけましたが、白ねずみはかなしそうな目で、じっとこちらを見かえしただけでした。
そこでムーミンママが、ちゃわんを二つもってきて、あたらしくきたお客に、たるのポンスをごちそうしようとしました。しかし、白ねずみも黒ねこも、目もくれないのです。
谷間の上には、なにかおもくるしいかげがしのびよりました。みんなはあやしく思って、ささやきあいました。トフスランとビフスランは心配そうに、ルビーをスーツケースにしまってふたをしました。
ところが、ふたりがスーツケースをひっぱっていこうとすると、白ねずみがあと足でたちあがって、ぐんぐん大きくなりだしました。まるでムーミンやしきほどの大きさにふくれあがったのです。
と思うまに、白ねずみは、白い手ぶくろをした、まっかな目の飛行おににかわりました。そうやって、じゅうぶんな大きさになると、草の上にすわりこんで、トフスランとビフスランをにらみつけたのです。
「あっちへいけ、みいぼれのおにくいやつ。」
と、トフスランがさけびました。

のほのおの中には、じぶんたちがそれまでにした、あらゆるすばらしいことが、うつっているような気がしました。それで、それを思いだしたり、もういちどそういうことをしたいものだと、そんなことを考えたりしていたのです。

ムーミントロールは、スナフキンとした、ま夜中のさんぽを思いだしましたし、スノークのおじょうさんは、あのすばらしい木の女王を手にいれたときのことを考えました。それからムーミンママは、もういちどあの、ひなたのあたたかいすなの中にねころがって、風にゆれているはまかんざしの花のあいだから、青い空をながめているような気がしていたのです。

だれもかれもが、すばらしい思い出にわれをわすれて、心は遠くにとんでいっていました。

そのときとつぜん、赤い目をした一ぴきの小さい白ねずみが、林の中からでてきて、こそこそとルビーの王さまに近づいていくのを見て、みんなはびっくりしました。おまけに、そのねずみのうしろには、まっ黒いねこが、草の中で、長々とせのびをしているではありませんか。

みんなの知っているかぎりでは、ムーミン谷には白ねずみがいたことはありませんし、黒ねこなんかも、いるはずはないのです。

「ニャゴちゃん、おいで。」

こういって、へムレンさんはよんでみました。でも、ねこは目をほそめただけで、へんじもしません。

です。黒ひょうは、すこしはなれたところでねむっていました。
ところが、そのとき飛行おには、地球の上に赤い点が光っているのを見つけたのでした。それは世界でいちばん大きいルビー、じぶんがもう何百年もまえからさがしていたルビーの王さまにちがいありません。
飛行おには目をぎらぎら光らせて、いそいで手ぶくろをはめると、マントをふわりとかたにかけて、とびたちました。
ほかの宝石は、みんな地になげすてました。飛行おにがほしいのは、たった一つの宝石でした。その宝石が、半時間とたたないうちに、きっと手にはいるのです。
黒ひょうは、主人をせなかにのせて、空にまいあがりました。こうしてふたりは、光よりもはやく、はてしない空をとびはじめたのです。
流れ星が、シューッとかれらのとおり道を横ぎりました。星くずが、ふきまくられる雪のように、飛行おにのマントにくっつきました。ずっと下のほうの赤い光は、いよいよあざやかに目にうつりました。
飛行おには、ムーミン谷をめがけて、かじをとりました。さいごのひとはねで、黒ひょうは、「おさびし山」のてっぺんに、ふわりと音もなく着陸しました。
ムーミン谷の人たちは、まだルビーの王さまをまえに、声もなくすわっていました。そのルビー



スニフは、ほっとためいきをついていいました。

「トフスランとビフスランは、しあわせだなあ。」

ところが、こうやってルビーの王さまが、くらい大地の赤い目のようにかがやいているあいだに、遠い月にいた飛行おにが、それを見つけたのです。

飛行おには、もうさがすのをあきらめて、つかれきったかなしそうな顔で、噴火口のふちにこしをおろして、ひと休みしていたの

「ぼくはただ考えてたんだ。みんなは、とてもぼくたちにやさしくしてくれるだろ。だからぼくたちも、なにかおいえしをしなくちゃ、かけないいんじゃないかってさ。」

こういってふたりは、しばらくなにか、こそこそとささやいたり、うなずいたりしていました。それからふたりは、じぶんたちのひみつのかくれがにいきましたが、またもどってきたときには、例のスーツケースをはこんできたのでした。

もう十二時をすぎていました。そのときききゅうに、谷じゅうがぱっとピンク色の光でてらされました。

あたらしい花火があがったのかと思って、だれもかれも、ダンスをやめてたちどまりました。でもそれは、トフスランとビフスランが、スーツケースをあけただけのことだったのです。ルビーの王さまは、草の中におかれて、いよいようつくしくもえあがりました。木につるされたちょうちんも、いいえ、お月さまでさえ、それにくらべれば、青ざめて見えました。みんなは、うやうやしい気持ちにうたれて、ことばもなく、きらきら光っている宝石のまわりにあつまりました。

「こんなきれいなものがあるでしょうか。」

と、ムーミンママはさけびました。

八月のお月さまでした。

それはこいオレンジ色をして、とても信じられないほど大きく、しかも、へりのほうは、かんづめのあんずみたいに、すこしぼやけていました。たちまちムーミン谷は、神秘な光とかげでみたされました。

「ごらんなさい。今夜なら、きっとお月さまの噴火口だって見えるわよ。」

と、スノークのおじょうさんがいいました。

「あそこはおそろしくあれはてているんだって。かわいそうに、飛行おにのやつ、あんなとこをさがしまわってるんだよ。」

と、ムーミントロールはいいました。すると、スノークのおじょうさんがいいました。

「いい望遠鏡があったら、あの人が見えるんじゃない？」

ムーミントロールもそう思いましたが、そんな話はうちきって、ダンスのことをおじょうさんに思いださせました。

こうしてパーティーは、いよいよもりあがった気分の中につづけられていきました。

「あなた、つかれたんじゃない？」

と、そっとビフスランがききました。

「いいや。」と、トフスランはいってから、こんなことをいいだしました。

みんなは、このことばに答えて、めいめいのコップを高くさしあげたのでした。
ムーミントロールがすわると、スノークのおじょうさんがささやきました。
「あなたの演説は、とってもよかったわ。」
「おお、いや……。だってぼく、まえからよく考えておいたんだもの。」
こういってムーミントロールは、さもはずかしそうにしました。
それからムーミンパパが、ラジオを庭へもちだして、アメリカから放送されてくるダンス音楽に、ダイヤルをあわせました。
たちまちムーミン谷は、おどったり、はねたり、足ぶみしたり、ツイストしたり、くるっと回転したりするもので、いっぱいになりました。木々のこずえも、おどりはねている妖精でうずまりました。そしておどり場には、足のこわばった子ねずみまでが、のこのことでてくるありさまでした。
ムーミントロールは、スノークのおじょうさんのまえへいって、ていねいにおじぎをしていいました。
「おねがいします。」
ところが、頭をあげたときに、木々のこずえの上に、きらきら光ってのぼってくるものが目につきました。

そこへ、庭の小道をぬけて、ムーミンパパが、赤いポンスをいれた大だるをころがしてきました。

だれもかれもが、コップをもってかけつけました。するとムーミンパパは、だれかれかまわず、ポンスをみたしてやりました。――ちゃわんやボール、しらかばの皮でこしらえたまるコップ、貝がら、なかには葉っぱをまいただけの三角コップまでありました。

「トフスランとビフスラン夫婦の健康のために！」

こう、ムーミン谷の全員がさけびました。

「ばんざあい。」

「ばんざあい。」

トフスランとビフスランは、

「うれしい日ね。」

といって、おたがいの健康をいわってかんぱいしました。

そのときムーミントロールが、いすの上にたちあがっていいました。

「こんどはぼくは、けさ南のほうへ、ただひとりで旅だっていったスナフキンのために、かんぱいしたいと思います。――スナフキンも、ここにいるぼくたちとおなじように、たぶん幸福にしていると思うのですが、どうかあの人がうまくテントをはって、あかるい気持ちでいますように。」


Tove

がひらかれたか、そのわけを話して、トフスランとビフスランにお礼をいいました。つぎには、八月の夜がみじかいことをいって、どうかみなさん、できるだけたのしくやってくださいといい、それから、こんどは、じぶんのわかいころのことを話しだしました。

これをあいずにして、ムーミンママが、ぞくぞくとパンケーキをだしてきました。さかんなはくしゅかっさいがおこりました。

パーティーはたちまち活気づいて、まもなくたけなわになりました。庭じゅうが、というよりもムーミン谷ぜんたいが、ほたるや地ぼたるが小さいともしびをともしたテーブルで、うずまりました。木につるしたちょうちんは、夜風にゆれて、あちらへこちらへとうごきました。――まるで大きな、きらきら光ってるくだものみたいに。

うちあげ花火が、いせいよく、八月の夜空にとびあがって、高い高いところで、「パン、パーン。」とはじけては、白い星の雨をまきちらしました。その星が、しずかに谷の上にふってきます。あらゆる小さい動物が、その星の雨のほうに鼻をもちあげて、

「ばんざあい。」

とさけびました。まあ、なんというすばらしさでしたろう。

つぎには「青い星の雨」がふりはじめ、木のこずえではしかけ花火の「ベンガルの火」が、うずをまいてまわりました。

それからママは、地下室からきいちごのジュースを、大びんで十一本もはこんできました。十二本めのは、ざんねんなことに、ヘムレンさんがねずみ花火をやったときに、びっくりしておとして、わってしまったのです。でも、それほどもったいなくはありませんでした。――トフスランとビフスランが、あらかたなめてくれましたから。

くらくなって、もうちょうちんをつけていいときになると、ヘムレンさんがどらをたたきました。いよいよパーティーがはじまるあいずです。

トフスランとビフスランが、いちばん大きいテーブルの正面につきました。

「ねえ、これだけのごわぎとさちそうが、みんなぼくたちのためなんだぜ。どうしてだろ。」

はじめのうちは、だれも、とっときの晴れ着をきて、かたくなっていましたから、なんだかへんで、くつろげませんでした。

みんなは、たがいにあいさつして、おじぎをしては、

「雨がふらなくて、またハンドバッグが見つかりましたそうで、ほんとにけっこうでございました。」

なんて、いいあいました。でも、きもののことが心配で、だれひとり、こしをおろすものはなかったのです。

そのとき、ムーミンパパが、開会のあいさつをのべました。パパは、どういうわけでパーティー

「なに、ラジオをつかえばいい。そら、これでなにもかもそろったじゃないか。それで、二ばんめのかんぱいは、スナフキンのためにあげるとしよう。」

こう、ムーミンパパがいうと、

「さいしょのかんぱいは、じゃあ、だれのためにするの。」

と、スニフがききました。たぶんじぶんのためにじゃないかと、あてにしていたのです。

「そりゃ、トフスランとビフスランのために、きまってるじゃないか。」

こう、ムーミンパパはいいました。

準備は、いよいよ気ちがいめいてきました。ムーミン谷の人たちぜんぶと、森や、丘や、川岸に住むいきものまでが、たべものやのみものをもってきて、庭にすえたテーブルの上にならべました。

大テーブルの上には、つやつやしたくだものの山と、サンドイッチを山もりにした大ざらがありました。あちこちのしげみの下におかれた小さいテーブルには、とうもろこしのふさだの、いちごやこけももの実をくきにさしたのや、葉っぱごととってきたくるみや、はしばみの実がおかれていました。

ムーミンママは、パンケーキをやくために、金だらいにあぶらをひきました。フライパンだけではたりなかったからです。

スノークは、妹の役たたずをののしってから、庭へでていって、木にちょうちんをぶらさげはじめました。

そのあいだにヘムレンさんは、よさそうな場所に、しかけ花火をしかけて歩きました。「ベンガルの火」「青い星の雨」「銀のいずみ」といったようなゆうめいな花火や、パーンとはれつすると星がとびだすロケット花火などです。

「こりゃあ、まちどおしいな。一つだけためしてみちゃいけないかねえ。」

こう、ヘムレンさんがいうと、ムーミンパパはいいました。

「花火をあげても、ひるまだから見えないね。しかし、どうしてもやってみたきゃ、ねずみ花火をじゃがいものあなぐらにもっていって、やってごらん。」

パパはベランダで、せっせとたるにポンス（くだものいりの酒）をこしらえていたのです。アーモンド・ほしぶどう、はすのジュース、ジンジャー・さとう、にくずくの花などに、レモン二つ三つをくわえ、それからあじをとびきりよくするために、いちご酒をちょっぴりまぜました。

ムーミンパパは、それをこしらえながら、ちょいちょいあじみをしてみました。――とてもすばらしいあじでした。

「ただ一つ、ざんねんなのは、音楽がないことさ。――スナフキンがもういないものね。」

と、スニフがいいました。

じっとすわっている気にはなれんからな。こんなときには、いつもより、みんなまちきれない思いをするもんだ、と思うね。だから、あんたがたはいちばんいいものを、さいしょにださなくちゃいけない。あとになれば、お客はみんな、じぶんでゆかいになってくるだろうから、なにをだそうとおなじことなんだ。

それから、歌やなんかをだして、みんなのじゃまをしないこと。――プログラムはみんなにかってにつくらせることさ。」

じゃこうねずみが、こんなに世間というものをよく知っているとは、おどろくべきことでした。けれども、じゃこうねずみは、そんなちえをちらとのぞかせただけで、じぶんのハンモックにのりこむと、またもや、「すべてがむだであることについて」という本に、読みふけるのでした。

「わたしは、どっちをつけたらいいのよ。」

スノークのおじょうさんが、いらいらした声で、ムーミントロールにききました。

「青いはねの髪かざりがいいかしら、しんじゅのかんむりがいいかしら。」

「はねのほうがいいさ。はねを身のまわりと、くるぶしにつけるんです。それから、できたらしっぽのふさ毛の中にも、二つ三つさしこむといいよ。」

おじょうさんは、ムーミントロールにお礼をいってはしっていったとたんに、戸口のところで、ちょうど手にちょうちんをもってやってきたスノークと、ドスンとぶつかりました。

「ほんとかしら。」
と、ムーミンママはさけびました。
「まあ、すばらしい。あなたたち、どこでそれを見つけたの。」
「しらのばげみにあったんだよ。この中でねると、ほんとに気持ちが……。」
トフスランがこういいかけたときに、バタバタとみんながかけつけてきて、おいわいをのべはじめました。そんなわけでムーミンママは、とうとうじぶんのハンドバッグが、トフスランとビフスランの寝室につかわれていたことを、永久にききそこねました。(たぶん、どっちでもおなじことだったでしょうがね。)
それからあとは、だれもかれも、その晩にひらかれる八月の大パーティーのことのほかは、考えることができませんでした。なにもかも、月がでるまでに、用意しなければならなかったからです。
たのしいパーティーのじゅんびをすることは、なんとうれしいことでしょう。その夜会には、谷間のちゃんとした人たちが、のこらずやってくるのです。
気むずかしやのじゃこうねずみでさえ、かなり興味をみせて、こんなふうにいいました。
「テーブルはどっさり用意しなくちゃいけないぜ。——大きいのや、小さいのをな。それを、思いがけない場所にだしておくんだ。こういう大きいパーティーでは、だれしもおなじ場所に、

と、トフスランは答えました。

「どうやら、いえしてあげなくちゃ、かけないと思うわ。なあ、あさけない。あのポいさいちケットの中でねるの、ほんとにいい気持ちなのに。」

　こういってビフスランは、ためいきをつきました。

　それからトフスランとビフスランは、例のひみつのかくれが（それは、まだだれにも見つかっていませんでした）にいって、ムーミンママのハンドバッグを、ばらのしげみからひっぱりだしました。

　ふたりが、そのハンドバッグをひっぱって庭をつっきっていったのは、かっきりおひるの十二時でした。空高くとんでいたたかが、この小さい行列を見つけて、さっそくムーミン谷の上に、ニュースをひろめました。

　じきに、号外のニュースがでました。

ムーミンママのハンドバッグ、トフスランとビフスランによって発見さる

ムーミンやしきにおける、なみだぐましき光景……

こう、ムーミンママはいいましたが、しょうじきのところ、心の中では気をよくしていたのです。
「あんで、なんなにわいわいいってるの。」
と、トフスランがききました。
「もちろん、わたしのハンドバッグのためよ。」
と、ムーミンママはいいました。
「あの黒いもの？　あんたがよくのぞきこんで、ポいさいちケットが四つあるのでしょ。」
「なんですって。」
と、あんまりのぼせてて、よくきいていなかったママは、ききなおしました。
「ポいさいちケットが四つある、黒いものでしょ。」
と、トフスランはくりかえしました。
「そうよ、そうよ。いい子だから、わたしのじゃまをしないで、むこうへいってあそんでなさい。」
と、ムーミンママはいいました。
庭へでると、ビフスランがいいました。
「あんたは、どう思う。」
「あんなにみママがしょげてちゃ、マてられないな。」

スナフキン、ムーミン谷をさる
夜あけがたのふしぎな出発

つぎには、もうすこし大きい活字で、こうでていました。

ムーミンママのハンドバッグなくなる
まったく手がかりなし、もっか捜索中
発見者のためには、これまでにない大がかりな八月パーティーをお礼としてひらくよし

このニュースがつたわると、みんなはぞくぞくと、ハンドバッグさがしにでていきました。——森の中にも、丘の上にも、浜べにも、ほんのちびさんの森のねずみまでが、捜索隊にくわわったのです。家にのこっていたのは、年よりと赤ちゃんだけでした。

そんなわけで、ムーミン谷じゅうに、わいわいさわぐ声と、はしりまわる音がこだましました。

「あれまあ、なんてさわぎでしょう。」

ましょう。お茶とおいしいおかしずくめでね。そして、だれもおさらをあらったり、はやくねどこについたりしなくてもいいとするわ。」

それをきいたあとでは、ハンドバッグさがしは、二倍もねっしんにつづけられました。

みんなは、すみからすみまで家じゅうをさがしました。じゅうたんをうらがえしにしてみたり、ベッドの下をのぞいたりしました。ストーブの中や、地下室ものぞきこみました。屋根うらから、屋根の上までさがしました。

つぎには、庭をすみからすみまでさがし、川の近くにある、たきぎ小屋にもいってみました。しかし、ハンドバッグは、どこにも見つかりません。

「きっとあなたは、木にのぼったときとか、水あびにいったときに、わすれてきたんじゃない？」

と、スニフがいいました。

しかし、ムーミンママは頭をふって、

「ああ、きょうは、なんてかなしい日でしょう。」

となげくばかりでした。

そのときスノークが、新聞に広告をだしてみたらと、思いつきました。それで、そうすることにきまりました。

まもなく、第一面に二つの大きなニュースをのせた新聞が発行されました。

はいうのでした。
「あらゆる役にたたないもののうちでも、きみのおかあさんのハンドバッグときたら、いちばん役にたたんものだ。あの人がハンドバッグをもとうともつまいと、けっきょく時間は一分のくるいもなくたっていき、月日はおなじに流れていくんだからな。」
　すると、ムーミンパパが、不平そうに口をだしました。
「かんじんな点は、そんなことじゃない。わしははくじょうしなければならないが、ママがハンドバッグをもっていないと、とてもへんな気持ちになるんじゃ。なにしろ、あれをもっていないママは、見たこともないからね。」
「中にはだいじなものがはいっていたのですか。」
と、スノークがききました。
「いいえ、ほんの急場にいるものだけよ。かわいたくつしたとか、あまいものとか、糸きれとか、ぽんぽにつけるおしろいとかね。」
　こう、ムーミンママはいいました。
「ぼくたちが見つけてあげたら、なにかごほうびをくれる？」
と、スニフがききました。
「どんなことだってしてあげるわよ。そうね、あんたたちのために、大きなパーティーをひらき

「おこってるのかしら、かなしがってるのかしら。」
ムーミントロールは、おどろいてたずねました。
「きっと、かなしいんだろうよ。」
と、スノークは答えました。
「そんなら、ぼく、すぐにいってこなくちゃ。」
こう、ムーミントロールはいいました。

いってみると、ママは世にも不幸な顔つきをして、応接間のソファーにすわっていました。
「どうしたのよ、ママ。」
と、ムーミントロールはききました。
「ねえ、ぼうや、とてもおそろしいことがおこったのよ。わたしのハンドバッグがなくなっちゃったの。あれがなくちゃ、わたし、なにもできないわ。ところが、どこからどこまでさがしても、見えないんだよ。」
と、ママはいいました。
そこでムーミントロールは、捜索隊をつくりました。
じゃこうねずみのほかは、ひとりのこらず、なかまになりました。ところが、じゃこうねずみ

と、スノークのおじょうさんはいいました。
「いや、ほんとなんだ。ぼくにさよならをいったもの。ほかの人たちは、おこしたくないってさ。」
ふたりは、そこの草の上に、しばらくじっとすわっていました。お日さまが、だんだんぽかぽかとせなかをあたためてくれました。そこへ、スニフとスノークが、ベランダの階段をおりてきました。
「ハロー、あなたたち、スナフキンが南へたったこと知ってる？」
と、スノークのおじょうさんが、声をかけました。
「なんだって。ぼくもつれないでか。」
と、スニフは、ふんがいしていいました。
「ぼくたち、ときどきは、ただひとりになりたくなるんだ。きみはまだわかいから、そういう気持ちはわからないだろうけどさ。それで、ほかの人たちは？」
こう、ムーミントロールはいいました。
「ヘムレンさんはきのこをとりにいったし、じゃこうねずみはハンモックをはずして、家の中にいれたよ。夜がもうさむくなってきたといってさ。それから、きみのママは、きょうはとても気分がわるいんだって。」
と、スノークがいいました。

ちょうどそのとき、スノークのおじょうさんが庭へでてきて、ムーミントロールのそばに近よりました。ところが、ムーミントロールは、じぶんの考えにふけっていたものですから、そのことに気がつきませんでした。

しばらくして、おじょうさんは、そっと、ムーミントロールのしっぽのふさ毛にさわりました。

「あれ、——きみだったの。」

といって、ムーミントロールは、とびあがりました。

スノークのおじょうさんは、内気ににっこりすると、じぶんの頭をなでながら、こういってきました。

「わたしの髪の毛に気がついた?」

「うんうん、さわらないほうがいいよ。」

と、ムーミントロールは、気がないようにいいました。

「どうしたのよ、あなた。」

と、おじょうさんはききました。

「ぼくのかわいい花ばらさん。きみにだって、うまく話せないんだけど、ぼくは気持ちがふさいでるんだ。知ってるかい、スナフキンがいっちまったんだ。」

「まあ、まさか。」

の上に流れました。ついでまた、まっかなほのおが、その中心からほとばしったかと思うと、ルビーはまるで、火のしべをもった大きな黒いチューリップみたいになりました。

「ああ、スナフキンに見せてやりたかったなあ。」

こういってムーミントロールは、ふかいためいきをつくと、時間のたつのもわすれて、長い長いあいだ、そこにたちつくしていました。ムーミントロールの思いは、どこまでも遠くとんでいくのでした。それからさいごに、こういいました。

「まったく、すばらしいルビーだ。またいつか、見にきてもいい？」

ところが、トフスランとビフスランは、へんじをしません。そこでムーミントロールは、もういちどかきねの下をくぐって、外にでました。

お日さまの光の中にでると、すこしばかり目がまわって、ふらふらしました。そんなわけで、しばらく草の上にすわって、めまいがなおるのを、またなくてはなりませんでした。

「すごいもんだ。」

と、もういちどムーミントロールは、心の中でくりかえしました。

「あれは、飛行おにが、いまでも月の火口の中でさがしてる『ルビーの王さま』にちがいない。まちがっていたら、ぼくはぼくのしっぽをたべちゃってみせる。それをあのへんなちびさんふたりが、ずうっとスーツケースの中にかくしていたんだからなあ。」



と、ムーミントロールは、きこえるかきこえないくらいの声でいいました。
「なんならもう、そかないでしょ。」
と、ビフスランがききました。
ムーミントロールは、だまってこっくりしました。
トフスランとビフスランは、まんぞくしたようにほっと息をつきました。それからじっとすわって、すばらしい宝石を見つめました。だまって、うっとりと見とれているのです。
ルビーの色は、しょっちゅうかわりました。はじめはとても青白い色でしたが、それからきゅうに、ピンク色のかがやきが、まるで雪をいただいた山の上にさした朝日のように、さっとそ

まだ知らないわ。」
「ふうん。」
と、ムーミントロールはうなりました。
「ところで、そろそろ、きみたちのスーツケースの中のものを、見せてもらおうか。」
ふたりはたのしそうにうなずくと、スーツケースの両はしにたって、おごそかに、こんなおまじないをとなえました。
「エトスロー、ツボースロー、トレスロー（ワン、ツー、スリーとおなじ）。」
とたんに、パチンとばかり、ふたがあきました。
「こりゃ、すげえや。」
ムーミントロールは、思わずさけびました。
やわらかい赤い光が、あたりをさっとてらしたと思うと、目のまえに、ひょうの頭ほどもあるルビーが、横たわっていました。——しずんでいくお日さまそっくりに、いきた火のようにかがやいて。
「きても、とにいった？」
と、トフスランがききました。
「気にいったさあ。」

と、ムーミントロールは、びっくりしてききました。
トフスランとビフスランは、いきおいこんでうなずくと、
「さあ、ついていらっしゃい。」
といって、かきねの下をくぐりぬけました。
ムーミントロールも、そのあとから、かきねをくぐりぬけました。するとおどろいたことに、ふたりは、きいちごのやぶのいちばんこみあった下に、ひみつのかくれ場所をこしらえていたではありませんか。
そこには、はくちょうのわた毛をつめて、貝がらや、小さい白い石がかざってありました。中はいくらかくらかったけれど、かきねのそばをとおる人だって、むこうに、こんなひみつのかくれ場所があろうとは、だれひとり思いもしなかったのです。
トフスランとビフスランのスーツケースは、きれいなわらのマットの上にのせられていました。
「あれはスノークのおじょうさんのマットだぞ。」
と、ムーミントロールは気がつきました。
「ついきのうも、あの人は、あのマットをさがしていたよ。」
ムーミントロールがこういうと、ビフスランがうれしそうに、あいづちをうちました。
「そうなのよ、マの人のあッとなの。わたしたち、見つけたの。——でも、もちろんあの人は、

「おはよう、ビフスランとトフスラン。」
と、ムーミントロールはあいさつをかえしました。いまではすっかり、トフスランとビフスランのきみょうなことばを、おぼえてしまっていたからです。
「なんた、あいてるのね。」
と、ビフスランがききました。
「ないてなんか、いるもんか。ただ、スナフキンがいっちまっただけなんだい。」
と、ムーミントロールは答えました。
「かやまあ、——おわいそうに。」
こういって、トフスランは、同情したようにいいました。
「そんなら、ビフスランのキおにかスしたら、気分がはれるんじゃないかしら。」
そこでムーミントロールは、ビフスランのほおにキスしてみたけれど、ちっともうれしい気持ちにはなれませんでした。
するとふたりは、頭をくっつけて、長いことささやきあっていましたが、さいごにビフスランが、もったいぶっていいました。
「わたしたち、あんたにスーツケースの中のものを見せることにしたのよ。」
「あのスーツケースの中のもの？」

だんだん小さくなって、とうとう銀ポプラとプラムの木のあいだにきえるまで、ムーミントロールは、じっと見おくりました。

しかし、しばらくすると、遠くから、

　みんなちっちゃな動物は
　しっぽに弓をもっている……

とうたっている横ぶえのひびきが、きこえてきました。それをきくと、ムーミントロールには、どんなにじぶんの友だちが、うきうきした気持ちでいるか、よくわかりました。

ムーミントロールは、その音楽がだんだんかすかになって、とうとうすっかりきえてしまうまで、そこにたちつくしていました。それから、つゆにぬれた庭をぬけて、家にはしりもどったのです。

ベランダでは、トフスランとビフスランが、せなかをまるめて、ひなたぼっこをしていました。

「ムはよ、おーミントロール。」

と、トフスランがあいさつしました。

くんくん朝の空気をかぎました。
旅にでるには、もってこいの日でした。山のいただきは、お日さまの光をあびながら、まるで手まねきしているみたいでした。一すじの道が、そこをのぼっていって、むこうがわにきえています。そこにはあたらしい谷間があり、また、あたらしい山が見えることでしょう……。
ムーミントロールは、スナフキンがテントをたたむあいだ、そばにたって見ていましたが、こういってききました。
「それで、長いことかえってこないの？」
「いや。」
と、スナフキンは答えました。
「春のいちばんはじめの日には、ここへかえってきて、またきみのまどの下で、口ぶえをふくよ。——一年なんか、たちまちすぎるさ。」
「そうだね。じゃあ、ごきげんよう。」
ムーミントロールがいうと、
「じゃあ、また。」
スナフキンもいいました。
こうしてムーミントロールは、橋の上に、ひとりでのこされたのです。スナフキンのすがたが

「にっけいや、さめの歯や、エメラルドをつんでいくんだね。」
　ムーミントロールはいいましたが、きゅうに思いだして、きいてみました。
「きみはなにか計画しているっていったけど、なにを考えてるの。」
「うん、計画はもってるさ。だけど、それはひとりだけでやる、さびしいことなんだよ。わかるだろ。」
と、スナフキンはいいました。
　ムーミントロールは、長いことあいてを見つめていましたが、やがていいました。
「きみは、ここをでていくつもりなんだろ。」
　スナフキンは、こっくりしました。それからふたりは、またしばらく、ものもいわずに、足を水の上でぶらんぶらんさせていました。そのあいだにも、川はふたりの足の下を、流れに流れていくのでした。――スナフキンがあこがれて、ただひとりでいきたがっている、ふしぎな国々のほうへ。
「それで、いつたつの。」
と、ムーミントロールはききました。
「いま、――すぐさ。」
　スナフキンはこういって、手にしていたささ舟をそっくり川になげこむと、橋からとびおりて、

小さな声ででしたけれど、それから、いそいでなわばしごをおりていきました。ふたりは、
「おはよう。」
をいいあうと、川のほうへぶらぶらおりていきました。やがて、橋の上にこしかけると、ぶらんぶらんと、水の上で足をゆすぶりました。

そのときまでには、お日さまはもう木のこずえにのぼって、まぶしくふたりの目をてらしました。

「ぼくたち、この春にもこんなふうにして、ここにこしかけたねえ。きみ、おぼえてる？ ――長い冬のねむりからさめた、いちばんさいしょの日じゃなかった？ ほかのものたちは、まだみんなねむってたっけ。」

こう、ムーミントロールがいうと、スナフキンもうなずきました。――せっせと、あしの葉でささ舟をこしらえては、川に流してやりながら。

「あの舟たちは、どこへいくんだろうね。」
と、ムーミントロールはききました。
「ぼくのまだいったことのない国さ。」
と、スナフキンは答えました。そのあいだにも、小さな舟は、一そう、また一そうと、川のまがりかどをくるっとまわって、見えなくなっていきました。

風も、海も、ひびきをかえていました。空気には、あたらしいはだざわりがありましたし、木々は、なにかをまちうけるようにたっています。なんだかムーミントロールには、なにかふしぎなことがおこりそうに思われるのでした。

ムーミントロールは、ねどこの中で目をさましたまま、天じょうを見ながら、お日さまの光のことを考えていました。そう、それは、たしか、ある日の朝はやくのことでした。

それから、くるっと頭をねじって、スナフキンのねどこを見ました。と、ねどこがからっぽではありませんか。

それと同時に、まどのほうから、ひみつのあいずがきこえてきました。——長い口ぶえが一どと、みじかいのが二ど。それは、

「きみはきょうは、なにをするつもり？」

という意味でした。

ムーミントロールはベッドからはねおきて、まどから外をのぞきました。

お日さまの光は、まだ庭までとどいていません。そこらはいかにもすずしそうで、しきりに、外へでたくなりました。スナフキンは、まどの下でまっていました。

「ピーホー。」

と、ムーミントロールはいいました。もっとも、ほかのものたちの目をさまさないように、ごく

第7章



スナフキンの旅だちと、ふしぎなスーツケースがひらかれること。なくなったムーミンママのハンドバッグが見つかって、おいわいのパーティーがひらかれたこと。さいごに飛行おにが、ムーミン谷にやってきたこと。

もう八月の末でした。――夜になると、ふくろうがホーホーと鳴き、こうもりが音もなく庭の上を、はたはたととびめぐるときです。

ムーミン谷の森は、地ぼたるでうずまるし、海もきげんがわるくなりました。空には、なにかかなしいけはいがただよい、黄色い大きなとりいれ月のお月さまがのぼってきました。

ムーミントロールは、こうした夏のさいごの時期が、いつでもいちばんすきでした。――なんだか、そのわけはわかりませんでしたけれど。

び、夏のかおりとよろこびとでいっぱいになりました。
「やれやれ、これであのぼうしも、やっかいばらいできましたよ。なにかの役にたったのは、これがはじめてだわ。」
こう、ムーミンママはいいました。
「だけど、あの雲はおもしろかったがなあ。」
と、スニフはいいました。
「それから、ジャングルの中のターザンあそびだってさ。」
と、ムーミントロールが、かなしそうにつけたしました。
「がやないらくたで、もんだとうけものしたよ。」
こういって、トフスランがスーツケースのかたがわをもつと、ビフスランがもうかたがわをもちました。こうしてふたりは、ムーミンやしきのほうへ歩いていきました。みんなは、あっけにとられて、ふたりのあとを見おくりました。
「あの子たち、なんていったんだい。」
と、スニフがききました。
「さあ、『ごきげんよう!』ってとこかな。」
と、ヘムレンさんは答えました。

と、モランは、ばかにしたようにいいました。
すぐさまムーミンママは、さくらんぼを三つ四つ、ぼうしの中にいれました。みんなは息をころして、なにがでてくるかと、まちかまえました。
「へんなものにかわらなければいいがねえ。」
スナフキンがヘムレンさんに、こういってささやきました。
しかし、なんというさいわいでしたろう。モランがぼうしの中をのぞいてみると、そこにはまっかなルビーがひとつかみ、ころがっていたのです。
「そらごらんなさい。あなたがもしかぼちゃをいれたら、どんなことになって？」
と、ムーミンママは、うれしそうにいいました。
モランは、ぼうしを見つめました。それから、トフスランとビフスランを見つめました。それから、もういちどぼうしを見ました。
モランが、どんなにありったけのちえをしぼって考えているか、だれにもわかりました。
それから、いきなりぼうしをつかむと、ただのひとこともいわないで、まるでつめたい灰色のかげみたいに、モランは森の中へすべりこんでいったのです。ムーミン谷で、あのばあさんのすがたを見かけたのはこれがさいごでした。それからまた、飛行おにの黒いぼうしを見たのもね。
モランがすがたをけすと同時に、たちまちまた、あたりの空気はあたたかくなり、庭はふたた

「ぼくがニョロニョロの島で見つけた、あの金の山をやっても、まだたりないかね。」
と、スノークはききました。
「たりねだ。」
モランは、あいかわらず、こおりのような声で答えます。
ところが、ちょうどそのとき、ムーミンママが、ショールをとりにいくことにしたのです。――なにしろひどくさむくなってきたのに、気がつきましたから。
ママが庭をぬけてはしっていくと、モランがとおったあとには、まっ白にしもがおりていました。
こうやってベランダまできたとき、ママはうまいことを思いつきました。ママはあの黒いぼうしをとると、裁判のおこなわれている場所へもどっていって、草の上にぼうしをおいて、こういったのです。
「これはムーミン谷で、いちばんねうちのあるしなものですよ、モランさん。このシルクハットの中から、なにがでてきたと思って？　きいちごのジュースや、いろんなくだものの木や、とてもきれいな、ひとりでうごくかわいい雲なのよ。なにしろ、世界にたった一つしかない飛行おにのぼうしですからね。」
「証拠見せてくんろ。」

スナフキンがこういって、書いていたペンを、帳面の上からもちあげました。
「また、あの人がきたわ。」
スノークのおじょうさんが、声をひそめてささやきました。
こおった草の上にじっとすわって、モランが、みんなのほうを見つめていました。
モランは、じっとトフスランとビフスランに目をこらすと、ウウウ……とうなりながら、じりじりとこちらににじりよってきます。
「きゃあっ。神さま、お星さま、たすけて！　たすけて！　あれえっ。」
ふたりはこわさにとりみだして、きいきい声をあげました。
そのとき、スノークがいいました。
「まちたまえ、モラン。わたしは、あんたにいうことがある。」
モランはたちどまりました。
スノークはつづけました。
「わたしはよく考えてみたんだ。そこで相談だが、あんたはトフスランとビフスランに、あのスーツケースの中のものを売らないかね。それで、そのばあいは、いくらあげたらいいのかね。」
「たかいだよ。」
と、モランはこおりのような声でいいました。

と、ムーミン家の証人が、口をはさみました。
「そのまえに、スーツケースのなかみがなんであるか、知っておいたほうが、よいのではないでしょうか。」
トフスランは、またなにかささやきました。ヘムレンさんはうなずいて、それからいいました。
「これはひみつなのです。ただ、トフスランとビフスランは、なかみは世界一うつくしいものだと考えておりますが、モランのほうでは、世界一ねだんの高いものと、こう考えておるのでございます。」
裁判官はいくどもうなずいて、ひたいにしわをよせました。
「これは、むずかしい裁判だわい。トフスランとビフスランは、ただしい考えかたをしたかしれんが、まちがったおこないをした。しかし、正義はどこまでも正義だからな。ぼくは考えなくちゃならん。諸君、せいしゅくにしてくれたまえ。」
みつばちの羽音がきこえるほかは、ライラックのしげみは、すっかりひそまりました。庭じゅうが、夏の日ざしの中で、やけこげていました。
このとき、きゅうにつめたい風が、草の上をふきすぎました。太陽が雲のかげにかくれて、庭がにぶい色にかげりました。
「どうしたんだ。」

スノークは、つくえをコツコツとたたいていいました。

「モランには弁護はいらない。それに、きみのみかたはおセンチである。また、ヘムレンのみかたも、おなじことである。

では、証人、まえへ。きみの意見は。」

ムーミン家の証人は、スノークのおじょうさんです。おじょうさんはいいました。

「わたしたちは、みんなトフスランとビフスランを、たいそう愛しております。モランは、さいしょから、すきません。あの女に、なかみをかえすことになっては、ざんねんでございます。」

しかし、スノークはおごそかにいいました。

「正義は正義です。あなたは公平でなくてはいけない。とりわけ、トフスランとビフスランは、いいことと、わるいことの区別がつかないんだからな。あの子たちは、そのように生まれついていて、ほかにはどうにもしようがないのです。ところで、モランの代理さん、あなたのご意見は？」

ところで、じゃこうねずみは、ハンモックの上で、とっくにねむってしまっていました。

「よしよし、わかってる。こんな裁判には、あの人は、ちっとも興味がないのだ。では、これから判決をくだしますが、そのまえにいうべきことはありませんか。」

こういってスノークは、みんなを見まわしました。

「失礼ですが——。」

と、ヘムレンさんが、いきおいよくいいました。
「問題は、だれがなかみの持ち主かってことではなく、だれがそのなかみにたいして、いちばん権利をもっているか、ということだ。それぞれを、ただしい場所にじゃ。

あんたたちは、モランをごらんになったね。みなさん、そこで、わたしはおたずねするが、いったいあのばあさんは、なかみにたいして、正当な権利をもってるように見えましたかね。」
「まったくだ。」
と、スニフはびっくりしていいました。
「ヘムレンさん、あんたはかしこいのねえ。しかし、またいっぽうから考えると、どんなにモランはさびしいことでしょう。だれにも愛されないんだものねえ。だから、あの人は、みんなをにくむんです。あのスーツケースにはいってるものは、おそらくあの人のもってる、ただ一つのたからものでしょう。それをもあなたがたは、あの人からとりあげてしまうというんですか。――あのさびしい、夜の中になげだされているおばあさんから。」
スニフは、こういいながら、いよいよのぼせてきて、声をふるわせました。
「あの人は、ただ一つのそのたからを、トフスランとビフスランに、きっとだましとられたのですよ。」
鼻水がでてきて、スニフはそれからさきは、しゃべることができませんでした。

「ぼくたちのです。」
と、トフスランが答えました。
するとヘムレンさんが、あきれたようにいいました。
「あれ、あの子たちのものだって？　けさははんたいのへんじをしたのになあ。」
「うん、そんならスーツケースは、モランにわたさなくてよろしいわけだ。」
と、スノークは、ほっとしたようにいいましたが、また、つぶやきました。
「しかし、この裁判は、どうにもこまったことになりそうだぞ。」
トフスランは身をのりだして、ヘムレンさんの耳に、なにかささやきました。
ヘムレンさんは、大きな声でいいました。
「この子たちは、いっております。――モランのものというのは、スーツケースのなかみだけですって。」
「ははあん。」
と、スニフがいいました。
「なるほど、そうかもしれない。これで、なにもかもはっきりしたわけだ。モランが、なかみをとりもどす。そこのにしんこぞうたちにゃ、あの古スーツケースをやればいいんだ。」
「それじゃ、ちっともかたづかんぞ。」

と、トフスランがききました。

「わんまり、あかんないな。」

こういってビフスランは、ぷっと、裁判官にさくらんぼのたねをふきかけました。

「きみたちは、ぼくが質問するまで、口をきいてはいけない。」

と、スノークが注意していいました。

「イエスかノーか、それを答えるだけで、ほかのことをいってはいけません。そこできくが、問題のスーツケースは、きみたちのものですか。それともモランのものかね。」

「イエース。」

と、トフスラン。

「ノー。」

と、ビフスランが答えました。

「ふたりのいうことは、くいちがっている。それを書いときたまえ。」

と、スニフがきいきい声をはりあげました。スノークは、つくえの上をたたいて、

「しずかにせい。」

とどなってから、もういちどたずねました。

「さて、これをさいごにもういちどきくが、スーツケースはだれのものかね。」



と、ヘムレンさんがいいました。
「わたしはどうするの。」
と、スノークのおじょうさんがききました。
「おまえは、ムーミン家の証人になればいい。」
と、にいさんはいいました。
「スナフキンは、裁判の記録をとってくれたまえ。ちゃんとやらなくちゃだめだよ、スナフキン。」
「どうして、モランには弁護する人がないの。」
と、スニフがききました。
「いらないんだよ。だってモランは原告だもの。」
こうスノークは答えて、それからいいました。
「さあ、みなさん、用意はできましたね。よろしい。では、はじめます。」
こういってスノークは、コツ、コツ、コツと、つちでつくえの上を三どたたきました。
「おまえ、わんのことだか、なかるかい。」

でもあの子は、どんなことでもじょうずにさばいてくれますからね。」
　スノークは話をきくと、とても興味をみせて、こういいました。
「そりゃ、めずらしい事件だ。会議をひらかなくちゃ。この問題を討論するんだから、みなさん、三時にあのライラックのしげみのところに、あつまってください。」
　それは、花のにおいとみつばちのブンブンいう音でいっぱいな、あの気持ちのいい、あたたかい午後のひとときでした。庭は、おそ夏のこいみどりにつつまれて、まぶしくかがやいていました。
　ライラックのしげみのあいだには、じゃこうねずみのハンモックがつってあって、それには、モランの代理と書かれていました。
　スノーク自身は、かつらをつけて、つくえをまえにしてすわっていました。だれが見ても、この人が裁判官だと、一目でわかりました。
　スノークのむかいには、トフスランとビフスランの夫婦が被告席にすわって、さくらんぼをたべていました。
「ぼくが、あのふたりをうったえる人になろう。」
　こう、スニフがいいました。スニフはふたりに、「ばかなおいぼれねずみ」とよばれたことを、まだ、はらにもっていたのです。
「それなら、わしがふたりを弁護する役になるよ。」

こう、ムーミントロールがいいました。

それからみんなは、応接間にすわって、朝までトランプをやったのです。でも、その晩は、それっきりモランはでてきませんでした。

あくる朝、ヘムレンさんは、心配そうな顔をして、台所にでてきていいました。

「わしゃいま、トフスランとビフスランと話をしてきたんですがね。」

「それで、どうだったの。」

と、ためいきまじりに、ムーミンママはききました。

「モランがほしがってるのは、あのふたりのもってるスーツケースなんですって。」

と、ヘムレンさんは説明しました。

「なんておそろしいばけものでしょう。あの子たちのただ一つの財産を、うばいとろうなんて。」

と、ムーミンママはさけびました。

「そうですよね。だけど、事情はとてもこんがらかっているんだ。どうもあれは、モランのスーツケースらしいですよ。」

こう、ヘムレンさんがいうと、ムーミンママは、「ううむ。」と考えこみました。

「だとすると、たしかに事情は、やっかいだわね。ひとつ、スノークに話してみましょう。いつ

スノークは戸口をしめて、ぶるっとからだをふるわせながらいいました。
「かわいそうなトフスランとビフスラン。ヘムレンさん、あのふたりが目をさましているかどうか、見てきてくださいよ。」
ふたりは、目をさましていました。
「あいつ、いっちゃった？」
と、トフスランがききました。
「いっちゃったよ。きみたち、もう、ねんしんして、あむれるよ。」
と、ヘムレンさんはいいました。
トフスランは、ちょっとためいきをついて、それからいいました。
「あんがと。」
それから、ひきだしのありったけおくまでスーツケースをひっぱっていって、もういちどねむりはじめました。
「わたしたちも、もうベッドへもどってもいいわね。」
まさかりをおきながら、ムーミンママがききました。
「いいよ、ママ。スナフキンとぼくで、お日さまがでるまで、見はりをしているから。だけど、ママのハンドバッグは、しっかりとまくらの下にいれときなさいよ。」

そのときです。——みんなの目に、モランがうつったのは。

ひとりのこらず、そのばけものを見ました。モランは、身うごきもせずに階段の下のじゃり道にすわって、まんまるい、死んだような目で、じいっとこちらを見つめていたのです。

とくべつに大きいというのではないし、そうきけんとも見えませんでした。しかし、モランがおそろしくわるいやつで、しかもいつまでだって、そこでまちぶせしているだろうことは、一目見ただけでわかりました。それがおそろしい点でした。

だれひとり、そのばけものにくってかかっていく勇気はありませんでした。モランはそこにしばらくすわっていてから、ゆっくりとくらやみの中へ、ずっていきました。ところが、その女がすわっていたあとは、まっ白にこおりついていたのです。



ファーがふさいでいるのを見て、たちどまると、
「なんてばかなことを考えたんだ。」
とつぶやいて、ソファーをわきによせようとしました。そのとたん、ムーミンパパがしかけておいた目ざましが、けたたましくなりだしました。
　たちまち家の中は、かん高いさけびや、鉄砲の音や、ドタバタいう足音でうずまりました。だれもかれもが、手に手にまさかり・シャベル・レーキ・石・ナイフ・はさみなんかをもって、応接間へかけつけたのです。みんなは、じゃこうねずみを見ると、あっけにとられてたちどまりました。
「モランはどこにいるのよ。」
と、ムーミントロールが、つっけんどんにききました。
「いや、じつはわしなんじゃ。」
と、じゃこうねずみは、きまりわるそうにいいました。
「わしは、ちょいと星がながめたくなってのう。おまえさんがたのばかなモランのことは、すっかりわすれてたわい。」
「じゃあ、すぐに外へでたまえ。だけど、二どとこんなことをしたらゆるさないよ。」
　こういってムーミントロールは、げんかんの戸をさっとあけました。

だぞ。それから、スナフキンも今夜は家の中でねなくちゃいけない。」

これをきいたみんなは、おそろしくこうふんしました。

それからムーミンパパは、つくえのひきだしをコツコツたたいて、こういったのです。

「われわれは、あくまできみたちをまもってやるからな。」

しかし、へんじはありませんでした。

そこでパパは、もうトフスランとビフスランが、さらわれてしまったのではないかと心配して、ひきだしをあけてみました。でも、ふたりは例のスーツケースをかたわらに、すやすやとねむっていました。

「とにかく、われわれもねるとしよう。だが、みんな武装してるんだぞ。」

こう、ムーミンパパはいいました。

がやがやさわぎながら、みんなはそれぞれ、じぶんのへやにひきあげました。まもなく、ムーミンやしきはひっそりとして、応接間のテーブルの上では、石油ランプだけがさびしくもえていました。

やがて、ま夜中になりました。それから、一時がうちました。

二時すこしすぎに、じゃこうねずみが目をさまして、外へでたいと思いました。そこで、ベッドからはいおりると、ねぼけまなこで、ふらふらと階段をおりていきました。ところが、戸口をソ

「それじゃあ、われわれも武器をとらなくちゃならん。それから、家具をひっぱっていって、戸口をしっかりとふさぐのだ。そんな大きいモランなら、たしかにきけんかもしれん。わしは目ざましどけいを、応接間にしかけよう。トフスランとビフスランは、わしの寝台の下でねむったらいい。」

ところが、トフスランとビフスランは、もうつくえのひきだしにはいりこんでいて、でてくるのはいやだといいました。

ムーミンパパは頭をふると、たきぎ小屋へいって、古い鉄砲をとってきました。

もはや夕ぐれがしのびよってきました。ほたるが、小さいちょうちんをぶらさげて、出歩きはじめましたし、庭は黒ビロードのようなかげで、うずまってきました。風は木々のあいだで、かなしそうなためいきをついています。庭の小道をたどってくると、さすがのムーミンパパも、なんだかぞくぞくするほど、きみわるさがしのびよってくるのを、感じずにはいられませんでした。

もしモランが、そこらのやぶのかげにかくれていたら、どうしましょう。いったいモランは、どんなすがたをしていて、また、どのくらい大きいのでしょうか。

家にもどってくると、ムーミンパパは、ソファーをとびらのうしろにおしつけて、こういいました。

「今夜は一晩じゅう、ランプはけさずにおけよ。みんな、いつでもたたかえるようにしておくん

「しうか、どたの。」
こうヘムレンさんがきいてみると、ビフスランが小さい声でいいました。
「モランがくるの。」
「モラン？　そりゃ、だれだね。」
すこしばかりおどろいて、ヘムレンさんはききました。
「わっきい、こわあい、おるいやつなの。戸を、しっかりしめてね。」
と、ビフスランは答えました。
ヘムレンさんは、ムーミンママのところへとんでいって、このおそろしいニュースをつたえました。
「モランっていう、大きい、こわい、わるいやつがくるらしいんです。今夜は、戸という戸を、しっかりしめなくちゃだめですよ。」
しかし、ムーミンママは、こまったような声でいいました。
「だけど、この家じゃ、地下室のほか、どこの戸にもかぎがないんですよ。まあ、こまった。外国人がくると、いつもこうなんですものねえ。」
それからママは、ムーミンパパのところへ相談（そうだん）にいきました。するとパパは、きっぱりといいました。

なくされにしんみたいなへんなつらは、見たことがないって。ぼくはもうでていく。」
「おニフくんは、スこってるんだ。気にしなさんな。」
と、ヘムレンさんは、トフスランたちにいいました。
「とにかく、こっちへきて、コーヒーをあがりなさい。」
こうムーミンママはいって、トフスランとビフスランを、ベランダにあんないしました。ヘムレンさんは、通訳というあたらしい役を、とてもほこらしく思って、そのあとからついていきました。

こんなふうにして、トフスランとビフスランは、ムーミンやしきにやってきて、住みつくことになったのです。
ふたりは、ほとんど足音もたてません。しかも、たいていのときは、なかよくふたりで手をつないでいるのでした。それからまた、ぜったいにあのスーツケースから目をはなすことはなかったのです。
ところが、ここへきたさいしょの日から、夕がたになると、ふたりはひどくおびえたようすになるのでした。いくどもいくども、気でもくるったように、階段をあがったりおりたりします。ときには、応接間のじゅうたんの下にもぐったりしました。

「ミここにコルクがあるよ。」
と、ヘムレンさんはつづけました。
するとふたりは、すばやく階段をかけあがって、応接間にはいってきたではありませんか。
スニフが見ると、ふたりはじぶんよりもずっと小さいのです。じきにスニフは、やさしい気持ちになって、いたわるようにいいました。
「ハロー、きみたちにあえて、ほんとにうれしいよ。」
「あんがと。おっちも、こんなし。」
と、トフスランはいいました。
「なべるもの、たいかしら。」
と、ビフスランがききました。
「この子たち、なんていってるの。」
と、ムーミンママがききました。
「おなかがすいてるんですよ。だけど、あの子たち、まだスニフは気にいらないらしいですね。」
と、ヘムレンさんはいいました。
スニフはこれをきくと、かっとなっていいました。
「じゃあ、あいつらに、ぼくのあいさつをつたえてくださいよ。ぼくは生まれてからまだ、そん

「『ねかなおいぼればずみだ。』なんて、ぼくのことをいったんだよ！」
と、スニフがいいました。

ムーミンママは、ためいきをついていいました。

「そうだとすると、とんだやっかいがおきるかもしれないよ。あの子たちが、たんじょう日にプディングをほしいかどうか、どうやってききだしたものかねえ。それに、ふとんはいったい、いくまいいるんだろう。」

「なあに、じきにそんなことばはわかるようにならあ。わかりやすい発音だもの。」

こう、ムーミントロールがいいました。

そのとき、ヘムレンさんが、考えぶかそうにいいました。

「わたしにはどうやら、わかったような気がするよ。あいつらはスニフのことを『ばかなおいぼれねずみ』といったんじゃないかしら。」

スニフは赤くなって、首をふっていいました。

「あんたがそんなにりこうなら、じぶんでいって話してごらんよ。」

そこでヘムレンさんは、のそのそとあなぐらの階段口へいって、やさしい声でよんでみました。

「ムうこそ、よーミンやしきへ！」

トフスランとビフスランは、じゃがいもの山から顔をだして、ヘムレンさんを見つめました。

と、ビフスランがささやきました。

「きみたちは、ぼくを半日ここにたたせておくつもりか。」

スニフが、おこったようにいいました。

「きみたちは、考えちがいしているんだよ。ぼくのいうことをききなさい。げんかんからはいってこないなんて、まったくきみたちは、ばかなおいぼれねずみだぜ。」

「おまえこそ、ねかなおいぼればずみだい。」

こう、トフスランとビフスランは、やりかえしました。ばかなおいぼれねずみといわれて、かっとなってしまったのです。

「おや、あいつらは外国人なのかな。そんなら、ママをつれてきたほうがいいかもしれない。」

こう思ったスニフは、あなぐらの戸をしめると、台所へとんでいきました。

「え？　あの子たち、ミルクがすきのようだった？」

と、ムーミンママはききました。

「あいつら、外国語をぺちゃくちゃしゃべるんです。だれにだって、わかりっこないや。」

と、スニフはいいました。

「外国語って、どんなふうなことばさ。」

と、ヘムレンさんと、まめのからをむいていたムーミントロールが、いっしょにききました。

いるだけでした。
そうやってふたりは、びくびくふるえながら、なにがつぎにおこるかと、まちうけていたのです。
「とにかく、ここはにべものの、たおいがするよ。」
と、トフスランはつぶやきました。
「じれかきたわ。だっとして。」
と、ビフスランがささやきました。
あなぐらの戸がきしんで、階段のてっぺんに、スニフのすがたがあらわれました。かた手にはちょうちんをもち、もういっぽうの手には、ミルクをいれたおさらをもっていました。
「へーイ！　どこにいるの。」
と、スニフはどなりました。
トフスランとビフスランは、いよいよおくへひっこんで、ぴったりとおたがいにだきあいました。
「きみたち、ミルクをのまないか。」
と、スニフがききました。
「だにも、いっちゃや、なめよ。」

「ノアをドックしたもんかねえ。だけど、どわい人がでてきて、こなったらどうしよう。」
こう、トフスランがいいました。
そのとたんに、ムーミンママがまどから首をだして、みんなをよびました。
「コーヒーですよ。」
トフスランとビフスランは、死ぬほどびっくりぎょうてんして、じゃがいもをしまっておくあなぐらに、とびこみました。
「おや。」
と、ムーミンママはおどろきの声をあげました。
「なんだか、ねずみがあなぐらにもぐったようよ。スニフ、おっかけていって、ミルクをすこしおやり。」
そのとき、階段のところにおいてあったスーツケースが、ママの目にとまりました。
「まあ、スーツケースまでもってきたよ。じゃあ、とまるつもりできたんだわ。」
そこでママは、二階にあがっていって、ムーミンパパにたのみました。――ベッドをもう二つこしらえてください。ただ、とってもとっても小さいのをね、と。
そのあいだに、トフスランとビフスランは、いっしょうけんめいに、じゃがいもの中にもぐりこみました。ですから、いくらそっちを見ても、ただ四つの目がじゃがいものあいだにのぞいて

のこずえをぬって、青いけむりがたちのぼっていました。
「けむりだぞ。」
と、トフスランがいいました。
「けむりのあるとこにゃ、あべものが、たるものよ。」
　こういってビフスランは、こっくりしました。
　そこでふたりは、トフスランとビフスランどくとくの、へんなしゃべりかたをしながら、ムーミン谷へおりていったのです。そのしゃべりかたは、だれにもよくわかりませんでした。でも、かんじんなことは、ふたりのあいだでは、それがよくつうじたということです。（訳者注――ふたりのことばをとくひみつは、ある文字をいれかえることです。それだけいっておくから、あとはじぶんで考えてみてください。）
　ふたりはとても用心ぶかく、つまさきだちで、ムーミントロールの家に近づいてきました。それから、げんかんの階段のまえで、こわごわとたちどまりました。
「だいっていって、はいじょうぶかしら。」
と、トフスランがききました。
「そりゃ、あんたにまかせるわ。だけど、もしおかられても、しじけちゃだめよ。」
と、ビフスランはいいました。

第6章



トフスランとビフスランが、ふしぎなスーツケースをもってあらわれる。モランが、それをおいかけてくる。スノークが裁判をする。

八月のはじめの、ある朝はやくでした。

トフスランとビフスランの夫婦が、山ごえをしてやってきて、いつかスニフがまもののぼうしを見つけた場所で、たちどまりました。

トフスランは赤いぼうしをかぶり、ビフスランは大きなスーツケースをもっていました。

ふたりは、とても遠くから歩いてきたので、かなりくたびれていました。それで、しばらくそこでやすんで、ムーミン谷のほうを見おろしました。

ムーミンやしきからは、銀ポプラやプラムの木

て、この谷間ではだれもまだ見たことのないような、大きな大きなたき火をしたのです。
あの大マメルクは、そのたき火の中で、頭からしっぽまで、すっかりやかれました。
ところが、このマメルクの長さのことで、のちのちまでもあらそいがおこったのです。
「あいつは、ベランダの階段の下から、たきぎ小屋まであったぜ。」
というものがあるかと思うと、
「いや、せいぜいライラックのしげみまでだった。」
というものもあったからです。

はじめました。
それから、にこにこして火のそばにすわって、きものをかわかしました。
そのうちに、またあたらしいことを思いつきました。それというのは、とてもヘムレンさんとは思えないほどの力をだして、マメルクのしっぽをもってひきずってくると、それを火の中へなげいれたのです。なにしろ、やいたさかなときたら、ヘムレンさんのいちばんすきなものでしたからね。
そういうわけで、ムーミン一家のものとその友だちとが、ベランダのしげみをおしわけて、げんかんの戸を力いっぱいにおしあけたときには、ヘムレンさんは、とても幸福そうにしていたのです。もうあの大マメルクの七分の一ほどは、たいらげてしまっていました。
「ひでえおっさんだ。もう、おれのさかなのめかたがはかれないじゃないか。」
こういって、スノークはぼやきました。
「そいつのめかたをはかっておいて、それにわしのめかたをたしたらいいんだ。」
と、ヘムレンさんはいいました。
この日は、ヘムレンさんにとって、いちばん幸福な日の一つだったでしょうよ。
「さあ、このジャングルをもしてしまおう。」
こう、ムーミンパパがいったので、みんなは、家の中からあらゆるがらくたをもちだしてき

ことがおこりました。えだやつるがどんどんのびてきたときとおなじに、こんどは、それがどしどししおれはじめたのです。
　実はしなびて、地におちました。花はぐったりとしおれ、葉はかれてちぢかみました。そうして、もういちど家は、ザワザワ、ミシミシいう音でいっぱいになりました。
　ヘムレンさんは、じっとそれを見つめていましたが、それからつかつかとあゆみよって、一本のえだを、そっとひっぱってみました。
　えだはすぐにおれて、とれました。まるで火口みたいに、かれきっていました。
　そのときヘムレンさんは、うまいことを思いつきました。かれえだやつるを山のようにあつめると、たきぎ小屋へいって、マッチをもってきたのです。そうやって、庭のまん中で、いせいよく、たき火を



さみだな。」
こういってじゃこうねずみは、うめき声をあげると、ふろ場をうずめたしだの森の中にもぐりこんで、ハンカチで頭をつつみました。耳の中になにもはいりこまないようにね。
しかし、ムーミンママは、そんなさわぎもすこしも気にしないでいいました。
「いいわ、お客さんたちも、とてもよろこんでるらしいもの。」
「そうだといいが。」
と、ムーミンパパはいいました。
「ねえ、おまえ、そこのバナナをこっちへまわしてくれないか。」
こんなふうで、夕がたまでつづきました。だれひとり、地下室の戸口がつる草でふさがれてしまったことも、外でまっているかわいそうなヘムレンさんのことも、気にとめませんでした。そのあいだヘムレンさんは、ぬれたきものを足にまつわらせながら、外にすわって、マメルクの番をしていたのです。
ときにはヘムレンさんは、そこになっているりんごをたべてみたり、ジャングルの花のおしべをかぞえたりしました。でも、おおかたは、ためいきばかりついていましたっけ。
そのうちに雨はやみ、夜が近づいてきました。
ちょうど太陽がしずむのと同時に、ムーミンやしきをおおっていたみどりの小山に、ふしぎな



みんなはジャングルあそびをして、ムーミントロールはターザンになり、スノークのおじょうさんはジェーンになりました。スニフはターザンのむすこで、スナフキンはチンパンジーのチータでした。いっぽうスノークは、オレンジの皮でこしらえた巨大な歯をした――どうやってそんな歯をこしらえるのか、それはきみのおかあさんにきいてください――怪物になって、しげみのあいだをはいまわりました。

「そら、おれはジェーンをさらっていくぞ。」

こういってスノークは、妹のしっぽをつかまえて、食堂のテーブルの下にあいていたあなへ、ひっぱりこみました。

シャンデリアの上につくった家にかえってきて、はじめてそのことに気がついたムーミントロールは、つる草をつたわってゆかにおりると、スノークのおじょうさんをすくいに突進しました。そうやって戸だなの上によじのぼって、

「うおう!」

と、ターザンのさけびをあげると、ジェーンもほかのものたちも、

「うおう!」

とさけびかえすのでした。

「いやはや、これいじょうものごとはわるくはならんて。――そう思えば、これも一つのおなぐ

と、ムーミントロールはききました。
「あの人は、きみのパパを、へやからすくいだそうとしてるよ。」
と、じゃこうねずみは、おこったようにいいました。
「こんなことになったのも、植物を採集したからだ。おれはヘムレンなんか、心の底から信用したことはないんだ。そうよ、おれはじゃこうねずみの天国が平和なことをのぞんでるよ。どうせ、おれはこの地上に長くはいられれんのだからな。」
みんなはしばらくのあいだ、二階から大きなおのでたたく音がしてくるのをきいていました。それから、バリバリという音と、よろこびのさけびがきこえました。ムーミンパパがすくいだされたのです。
ムーミントロールは、ジャングルをかきわけて階段の下までいくと、さけびました。
「ママ、パパ。ぼくがるすのあいだに、いったいなにをしてたのよ。」
「まあ、ぼうやかい。」
と、ムーミンママは答えました。
「わたしたち、またあのぼうしのことで、へまをしたにちがいないよ。でも、まあいいから、あがっておいで。洋服だんすの中に、グーズベリー（西洋すぐり）のやぶを見つけましたよ。」
それはすばらしい午後でした。

「みんな、ここからはいれ。だけど、大いそぎ。ここもじきにふさがっちまうぞ。」
そこでみんなは、じゅずつなぎになって、まっくらなあなの中へはいりこみました。
「ひゃあ。わしにゃはいれんよ。」
と、びりにいたヘムレンさんがさけびました。
「そんなら、あんたは外にいて、マメルクの番をしていてください。そうすりゃ、家のまわりで、植物を採集することもできるだろ。わかったね。」
こうスノークがいいました。
こうして、ヘムレンさんが外の雨の中でめそめそやっているあいだに、ほかのものたちは、手さぐりで地下室の階段をあがっていったのです。
階段のてっぺんにたどりつくと、ムーミントロールがいいました。
「運よく戸があいてるぞ。だらしがないことも、ときには役にたつんだねえ。」
「ぼくが犯人なんだ。だからぼくにお礼をいいなさい。」
スニフがきいきい声をだしました。
戸口をぬけて進んでいくとちゅうで、めずらしいながめにぶつかりました。——じゃこうねずみさんが木のまたにこしかけて、なしみたいな実をたべていたのです。
「ママはどこ。」

ができないな。」
　こう、ムーミントロールは、なさけなさそうにいいました。
　スナフキンは、このみどりのやぶを、さっそく探検にかかりました。
　戸口もないし、まどもありません。どこもかしこも、むちゃくちゃにしげりあった葉っぱと、花のやぶです。つるをひっぱってみましたが、それはゴムのようにつよくて、まるっきりちぎれないのです。
　ところが、スナフキンがそばをとおりかかると、その草はまるでなげなわみたいに、スナフキンのぼうしをめがけて、一本のつるをなげてよこして、頭の上からぼうしをさらったではありませんか。
「こりゃ、いよいよばけものじみてるぞ。やつら、たいくつしてるんだな。」
と、スナフキンはつぶやきました。
　そのあいだにスニフは、葉っぱやつるでおおわれたベランダをつきぬけていきましたが、うれしそうな声でさけびました。
「地下室の戸口は、まだあいてるよ。」
　ムーミントロールは、いそいではしっていって、まっくらなあなの中をのぞきながら、どなりました。

「だれか、戸をあけてくれ。わしはでられないんだよ。」
しかし、ムーミンママにも、パパのへやへいく戸はあけられませんでした。なにしろ、つる草がすっかりおおってしまっていたからです。
そこでママは、戸のガラスを一まいこわして、やっとのことでそのあなをすりぬけて、おどり場へでました。
階段のところは、まるで小さい森でしたし、応接間はまるっきりジャングルでした。
「あれまあ！　これはまた、あのぼうしのせいにきまってるわ。」
ムーミンママはこうつぶやいて、階段にこしをおろすと、しゅろの葉で顔をあおぎました。つるはえんとつをぬけて屋根の上までのびて、ムーミンやしきぜんたいを、あついみどりのじゅうたんでおおっていました。
外の雨の中には、ムーミントロールがつったって、この大きなみどり色のやぶを、ふしぎそうに見つめていました。——そこでは、花がつぎからつぎへとひらき、実がみどりから黄色へ、黄色から赤へと、たえまなしにじゅくしていました。
「とにかく、ここにちがいないよ。」
と、スニフがいいました。
「たしかに、この中なんだ。だけど、ぼくたちははいることができないし、ママたちはでること

実が、雨のように頭の上におちかかりました。
よく見ると、ふといえだがゆっくりまどのほうへのびていって、そこから四方八方に、みどりのつるをのばしているのでした。ムーミンパパはどなりました。
「おうい、みんなおきて、ここへきてごらん。」
ムーミンママは、びっくりして目をさましました。と、おどろいたことに、じぶんのへやが、小さい白い花でうずまっているではありませんか。天じょうから、それが花づなになって、たれさがっているのです。
「まあ、なんてきれいなんでしょ。ムーミントロールが、わたしをびっくりさせようと思って、こんなことをしたにちがいないわ。」
こういってママは、注意ぶかくうすい花のカーテンをかきわけて、ゆかの上におりました。
「おうい。」
ムーミンパパが、まだかべのむこうがわでよんでいます。



に、ペンをすすめました。すると、つぎからつぎへといろいろな思い出がわきだしてきて、思わずなみだがこぼれそうになりました。
ムーミンパパは、ふつうの子どもとはすこしちがっていて、だれにも愛してもらえなかったのでした。大きくなってからも、おなじことでした。あらゆる意味で、おそろしい日々をおくってきたのです。
パパは、書きに書きました。――ぼくの話を読んだら、だれだってなみだをこぼすだろう、と
そんなことを思いながら。そのことがまた、パパを元気づけました。そこでムーミンパパは、じぶんでじぶんにいいました。
「きっと、みんながよろこんでくれるぞ。」
ちょうどそのとき、じゅくした実が一つ、原稿用紙の上におちて、べっとりと、大きなしみをこしらえました。
「なんてことだ。こりゃあ、ムーミントロールとスニフのやつが、かえってきたにちがいないぞ。」
こうさけんで、ムーミンパパは、しかりつけてやろうと思って、うしろをふりむきました。
ところが、うしろにはだれもいませんでした。かわりに目にとまったのは、黄色い実のぎっしりなった、ふさふさしたしげみではありませんか。
ムーミンパパは、おどろいてとびあがりました。とたんに、その足音で、青いプラムのような

ママが、もっとちゃんとかたづけさえすれば、よかったのにねえ。というのは、家じゅうが食後のひと休みでぐっすりねこんでいるあいだに、そのピンク色のつる草が、ふしぎなはやさで、どんどん大きくなっていったのでした。

それはそろそろとぼうしの中からでてくると、まず、ゆかの上につるをのばしました。それから、まきひげや、あたらしいえだをだして、かべにはいあがり、カーテンやよろい戸にからみつきました。さらにまどのすきまや、換気装置や、かぎあなをぬけて、そこらじゅうにつるをのばしていったのです。

へやの中はむしあつかったので、みるみる花がさき、実がなりはじめました。大きな葉をつけた長いつるは、たちまち階段をかくしてしまったばかりか、まだどんどんのびて、いすやベッドの足にからみつき、花づなになってシャンデリアからたれさがりました。

家じゅうが、サラサラいうやわらかい音であふれてきました。ときたま、つぼみがひらく、ポンという音や、じゅくした実がじゅうたんの上に、ストンとおちる音さえがきこえました。

それでもムーミンママは、それを、ただの雨の音だと思って、ねがえりをうつと、またねむりにおちていったのです。

となりのへやでは、ムーミンパパが、せっせと思い出を書いていました。あの桟橋をつくってからは、べつにおもしろいこともおこりませんでした。そこでパパは、子どものころの思い出

ところが、きゅうにスノークがたちどまってさけびました。

「道をまちがえたんじゃないか。」

「ばかなことをいうなよ。あそこに、たきぎ小屋があるじゃないか。それから、むこうに見えるのは橋だろ。」

と、ムーミントロールはいいました。

「うん。だけど、家はいったいどこにあるんだ。」

と、スノークはいいました。

それこそ、まったくふしぎでした。ムーミンやしきがきえてしまっていたのです。どうもこうもありません。

みんなはマメルクを、階段の下におきました。いや、階段ではなくて、階段があったはずの場所というべきでしょう。階段はなくて、かわりに……。

しかし、わたしはまず、説明しなくてはなりますまい。――いくら見ても見えなかったのです。

――みんながマメルクつりにいっていたあいだに、ムーミン谷ではなにがおこったかを。

ムーミンママは、子どもたちがるすでしたから、ゆっくりひるねをしようと、二階へいきました。ところで、そのまえにママは、どくのあるピンク色のつる草をまるめて、うっかりと、あのまもののぼうしの中へすてたのです。……そのことはまえにいいましたね。

と、ヘムレンさんもいいました。

「ふしぎな冒険や、雨にぬれたことや、みんなですきかってにくらすことや、それから、こんなさかなつりも、みんなわるくないけれど、長い目で見れば、あんまりゆかいなものじゃないさ。」

そこでみんなは、マメルクの下に板をさしこむと、それをみんなでかついで、林をぬけていきました。マメルクがあんぐり大きく口をあけていたものだから、ちょいちょい木のえだが、その歯にひっかかりました。おまけに、何百ポンドもあるほどおもたいのです。ですから、みんなは二、三分ごとに、やすまなくてはなりませんでした。

そのあいだにも、雨はだんだんひどくなりました。それでも、とうとうムーミン谷につきましたが、雨のために家も見えません。

「マメルクは、ちょっとここへのこしておいたら？」

と、スニフはいいました。

しかし、ムーミントロールは、

「ぜったいだめだよ。」

と、おこったようにいいました。

そこでみんなは、よたよたとよろけながら、庭をぬけていきました。

それから、スノークがいいました。
「そら見ろ、とうとうつかまえてやったぞ。どんなもんだい。」
妹のスノークのおじょうさんが、ほこらしそうにうなずきました。
マメルクをひっぱって陸にむかうとちゅうから、また雨になりました。そんなわけで、じきにヘムレンさんの服は、ずぶぬれになってしまうし、形のくずれかけていたスナフキンのぼうしは、目もあてられないかっこうになりました。
そんなことはたいしたことじゃありませんがね。
「ほらあなの中も、たぶんすっかりぬれてるだろうな。」
こごえながらオールをにぎっていたムーミントロールが、ぽつりといいました。それからまたしばらくして、つけたしました。
「ママが、さぞ心配してることだろう。」
「それじゃあ、まっすぐに家へかえろうっていうの？」
と、あんまりうれしそうな声にひびかないように気をつけながら、スニフがいいました。
「そうしよう。家へかえって、このさかなを見せなくちゃ。」
と、スノークがいいました。
「家にかえるとしよう。」

だしました。
へさきにひざをついていたムーミントロールが、さけびました。
「もう、すこしのろくなったよ。あいつ、まいってきたんだ。」
マメルクはたしかにつかれていました。しかし、同時に、はらをたてはじめていました。ぐいぐいとからだをよじって、つなをきろうとします。そのたびに冒険号は、びっくりするほどゆれました。
ときには、みんなをだまそうとするように、マメルクは、じいっと身うごきもしないでいます。かと思うと、みんなが頭からしぶきをかぶってしまうほどもうれつなスピードで、はしりだすのでした。
スナフキンはとうとう横ぶえをとりだして、漁の歌をふきはじめました。ほかのものたちも、それにあわせて、甲板がふるえるほどに、力いっぱい、ひょうしをとりました。
それにしても、みんなはもうほとんど、あきらめかけていたのです。
そのとききゅうにマメルクは、とほうもなく大きい青白いはらを上にして、波のおもてにうかびあがりました。
これほど大きいさかなは、だれも見たことがありませんでした。しばらくのあいだ、みんなはものもいわないで、そのすがたを見つめていました。

もやいづなは、まるで弓のつるのように、ぴいんとはって、そのさきはあわだつ波の下にきえています。
マメルクは、たしかにパンケーキがすきだったのです。
「しずかにしろ。みんな口をふさいで、それぞれ位置についてくれ。」
と、スノークがどなりました。
「あいつがもぐらんうちは、だめさ……。」
こう考えてスナフキンは、へさきまで、はっていってみました。
しかしマメルクは、まっしぐらに沖のほうへむかっていました。まもなく岸は、絵ふででひとなすりしたみたいに、遠くにぼやけていきました。
「いつまで、あいつはもちこたえるだろうかな？」
と、ヘムレンさんがききました。
「万一のばあいは、つなをきればいいねえ。」
と、スニフがいいました。
「ぜったいだめよ。」
カールした前髪をふりたてて、スノークのおじょうさんがにらみつけました。
やがてマメルクは、大きなしっぽをひとふりして、ぐるっとまわると、また岸のほうへむかい

「きみはダイアナ（ギリシア神話の狩りの女神）そっくりだよ。」
こういってムーミントロールは、ほれぼれとおじょうさんを見つめました。
「ダイアナってだれ。」
と、おじょうさんはききました。
「狩りの女神さ。あの木の女王さまみたいにきれいで、きみみたいにりこうなんだ。」
「ふうん。」
こう、スノークのおじょうさんがいった、ちょうどそのしゅんかんに、冒険号がぐうっと横にかたむきました。
「そうら、くいついたぞ。」
と、スノークがいいました。
もういちど、ぐいとひっぱりました。――こんどは、もっとつよくです。それから、もうれつなひとあばれ。おかげでみんなは、のこらず船の中でぶったおれました。
「たすけてえ。マメルクにたべられちまう。」
と、スニフがなき声をだしました。
冒険号のへさきは、きけんなほど水にもぐりました。でも、さいわい船は、またつりあいをとりもどしました。と思うまに、こんどはすさまじいはやさで、沖のほうへはしりだしました。

と、妹はいいました。

「刃をひらいてさ。それから、せんぬきと、ねじまわしと、あのうまのひづめから石をほじくりだすやつもひらいてつかえば、きっとなにかがつれると思うわ。」

スノークは、顔にあてていた両手をとりのけていいました。

「そうだな。だけど、えさがないよ。」

「パンケーキがあるわ。」

と、妹はいいました。

スノークは、しばらく考えこみました。みんなはそのあいだ、いきをころして、きんちょうしていました。

とうとう、スノークはいいました。

「もちろん、マメルクがパンケーキをたべるとしての話だが、ひとつ、やってみるか……。」

ここまでくれば、つりをつづけることが、だれにもわかりました。

みんなは、ヘムレンさんがポケットにもっていたはりがねで、しっかりとナイフをやいづなにむすびつけました。それからナイフにパンケーキをさして、それを船べりからなげこみました。

いままでは、スノークのおじょうさんのほっぺたにも、赤く血がさしていました。おじょうさんも、ほかのものたちにまけないほど、むちゅうになっていたのです。

われに、船べりからたれさがっているだけでした。
水の中の大きなうねりが、怪物のにげていった方向をしめしていました。
「かますだなんていったやつはだれだ。こいつは、一生とりかえしがつかないほどの大失敗だぞ。」
スノークはにがりきって、妹にいいました。
「ここできれたんだ。どうも、糸がほそすぎると思ったよ。」
ヘムレンさんが、糸を手にしていいました。
「だまれっ。」
とどなって、スノークは両手で顔をおおいました。
ヘムレンさんは、まだなにかいおうとしましたが、スナフキンが、そのむこうずねをけとばしました。
みんなは、がっかりしてしまって、おしだまってすわっていました。
そのときスノークのおじょうさんが、えんりょがちにいいました。
「もういちどやってみたらどう。つり糸には、もやいづながつかえると思うわ。」
スノークはなにかぶつぶついっていましたが、しばらくしてききました。
「つりばりはどうするんだい。」
「あんたのナイフをつかったら。」



　ぴいんとはりつめていた糸が、とつぜんぐらっとゆれたかと思うと、みどり色をした神秘な海のずっと底のほうで、きらりと白いものがひらめきました。

　マメルクの青白いはらでしょうか。

　なにかとてつもなく大きな、すさまじいものが、ふしぎな海の底から、すうっとあがってきたように見えました。ジャングルの大きな大きな植物のくきみたいに、みどり色にぶよぶよしたものです。それが、ぬらりと船の下でくねりました。

「たもあみ！　たもあみはどこだ。」

　スノークがどなりました。

　それと同時に、すさまじい音がして、さっと水しぶきが空にとびました。ものすごい波が冒険号をとらえて高くもちあげたかと思うと、つり糸が甲板の上にほうりあげられました。それからきゅうにまた、すべてがひっそりとしずまったかと思うと、きれたつり糸が、見るもあ

名だが、架空（かくう）のさかならしい）だね。見たまえ、十本もはりがからになってる。」
こう、スノークは答えました。
「あらまあ。」
と、妹のスノークのおじょうさんが、ひやかすようにいいました。
「おまえこそ、あらまあだい。」
兄（あに）はおこったようにいって、それからどなりました。
「しいっ。しずかにしないと、さかながびっくりしてにげちまうじゃないか。」
つぎからつぎへと、海草がからんでこんがらかったつりばりが、あがってきました。しかし、どれにもさかなはかかっていません。ただの一ぴきもかかっていないのです。
そのときとつぜんに、スノークがさけびました。
「やっ、ひいたぞ。たしかにひいたぞ。」
「マメルクだ。」
と、スニフがきいきい声をだしました。
「さあ、しずかにしてくれ。」
と、スノークがいいました。じぶんこそ、いちばんさわいでいるくせに、
「石みたいにだまるんだ。そうら、あがってきた。」

に。」

さいしょのつりばりがあがってきました。

なにもかかっていません。

第二のはりがあがってきました。

これもかかっていません。

「これはただ、さかながふかくもぐっていて、とてもでっかいやつばかりだという証拠になるだけのことさ。さあ、みんな、しずかにしていてくれ。」

こう、スノークはいって、それから、なおも糸をひっぱりつづけましたが、あがってきたはりは、四つとも、なにもかかっていませんでした。

「どうも、ずるがしこいやつだ。えさをみんなくっちまいやがった。ちくしょう。きっと、とんでもなくでかいやつだぞ。」

と、スノークはいいました。

だれもかれも、船べりに身をのりだして、黒々とした水底をのぞきこみました。

「なんのさかなだと思う？」

と、スニフがききました。

「すくなくみても、マメルク（もとはエジプトや回教国のどれい兵をさすことば。ここではさかなの

のくいつくのをまって。もう、二時間もまっていたので、スノークのおじょうさんなんかは、すっかりたいくつしてしまいました。

「まっているうちが、いちばんたのしいんですよ。どのはりに、なにがくいつくか、わからないんだものね。」

こうムーミントロールは、おじょうさんにいいました。このつり糸には、いくつもはりがついていたのです。

スノークのおじょうさんは、ほっとためいきをついていいました。

「とにかく、あんたが糸をなげこんだときには、えさがついてたわね。それをこんどあげるときには、さかながかかってくるってわけね。」

「でも、なんにもかかってないかもしれないよ。」

と、スナフキンがいいました。

「でなけりゃ、たこがかかってるかもしれんさ。」

と、ヘムレンさんがいいました。

「女の子にゃ、こういうつりのおもしろみがわからないんだ。」

と、スノークはいいました。

「さあ、ひっぱりあげていいらしいぞ。だけど、だれも音をたてちゃだめだぜ。みんな、しずか

「これで、なにもかもすくすくとそだつでしょうよ。」
こう、ムーミンママは、じぶんでじぶんにいいました。家族のものが、みんなほらあなにいっているということは、まあ、なんとすばらしいことだったでしょう。
ムーミンママは、すこしばかりそこらをかたづけることにして、くつしたや、みかんの皮や、ムーミントロールがあつめてきた、へんな石ころや、しらかばの皮や、いろんなみょうなものを、まとめはじめました。
ラジオのセットの中には、どくのあるピンク色のつる草が見つかりました。ヘムレンさんが、おし葉にするのをわすれた草です。
ムーミンママは、雨のしずかなつぶやきに耳をかしながら、それをくるくるとまるめました。
「さあ、これでなにもかもがそだつんだわ。」
ママはもういちどこういって、なにをするとも考えることなしに、そのまるめた草の玉を、あのぼうしのくずかごの中にすてたのです。
それから、じぶんのへやにあがっていって、ひるねをすることにしました。なにしろムーミンママは、雨が屋根をうつ音をききながらひるねをするのが、とてもすきでしたからね。
そのあいだに、海の底では、スノークの長いつり糸が、じっところがっていました。——さかな

こういってスノークは、おもしろくもなさそうにわらいました。
「船長はなにかおっしゃることがあるんですかって。いや、ありませんとも。さあ、このままつり糸をなげなさい。――古ぐつくらいならつれるでしょうよ。」
こういってスノークは、船尾にひきさがると、防水マントを頭からかぶりました。
「やれやれ。きみはオールをとってくれよ、スナフキン。そのあいだにぼくらは、このこんぐらかった糸をほぐそう。スニフ、おまえはまったくとんちきだよ。」
こう、ムーミントロールはいいました。
「わかったよ。さあ、どっちのはしからはじめるんだい。」
と、スニフはやるしごとが見つかったので、よろこんでいいました。
「まん中からさ。だけど、こんどはきみのしっぽに、糸をからませないようにしてくれよ。」
そのあいだにスナフキンは、ゆっくりと冒険号を、沖のほうへこいでいきました。

こんなことがおこっているあいだじゅう、ムーミンママは、とてもいいごきげんで、そこらをのそのそ歩きまわっていました。
雨はしずかに庭におちています。どこもかしこも平和で、きちんとしていて、とてもひっそりとしています。

ことがないじゃないの。それに、小さいかますなんかがはりにかかったら、かわいそうじゃないの。」

と、スノークのおじょうさんがいいました。

「そりゃそうだけれど、きょうはきっとうまくいくよ。ちびさんは、へさきにすわっておいで。そこなら、いちばんじゃまにならないから。」

と、にいさんはいいました。

「ぼくにもてつだわせてよ。」

スニフはこういって、いきなりつり糸をつかむと、ボートのはしにとびうつりました。おかげで、ボートはぐらりとかしぐし、糸はいかりやオールかけにからまってしまいました。

「たいしたもんだ。じつにりっぱなものですよ。たいそう海になれていらっしゃる。船の中の礼儀もごぞんじだ。とりわけ、ほかのもののしごとも、じゅうぶんそんちょうしていらっしゃる。ははは。」

と、スノークはひにくをいいました。

「きみは、あの子にはらをたてたんじゃないだろうね。」

ヘムレンさんが、こまったふうにいいました。

「はらをたてる？　ぼくが？」

こういってスノークは、ぬれたすなの上をぶらぶらと、ムーミンパパがこしらえた桟橋のほうへいきました。——海からくる風に、鼻をくんくんやりながら。

とてもしずかな朝でした。雨がおだやかにおちて、一つぶ一つぶ、にぶく光っている水の上に、輪をかいていました。

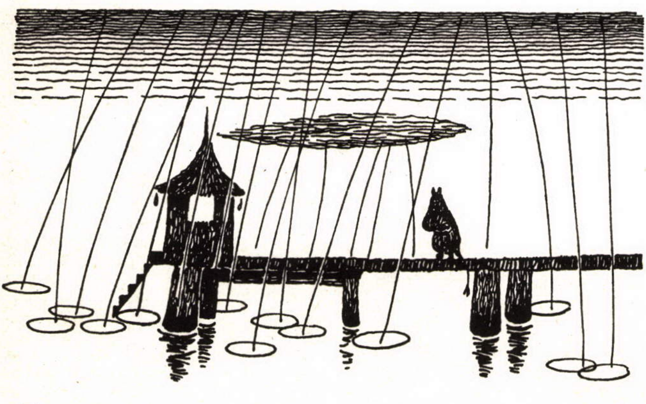
スノークはひとりでうなずくと、いちばん長いつり糸をとりだしました。それから、スナフキンの漁の歌をうたいながら、たもあみをほうりだしたり、つりばりにえさをつけたりしました。

用意がすっかりできたころ、ほかのものたちが、ほらあなからやってきました。

「おや、やっとそろいましたね。ヘムレンさん、マストをおろして、オールかけにのせてくださいよ。」

と、スノークはいいました。

「つりをしなくちゃならないの？　つりをしても、とれた



「じゃあ、わしはおまえのあなでねるよ。いびきをかかんでくれ。」
と、ヘムレンさんはいいました。
しかし、スノークはもごもごいっただけで、そのままねむりつづけました。
すると、ヘムレンさんのむねには、ふくしゅうしてやりたいような気持ちが、むらむらわきあがってきました。そこでヘムレンさんは、じぶんのあなとスノークのあなとを、みぞでつないだのです。
スノークは、ずぶぬれになった毛布の上にむっくりおきあがって、さけびました。
「おやおや、ヘムレンさんらしくもないじゃないか。だけど、あんたにこれだけのことが考えられたとは、おどろいたねえ。」
「ほい。じぶんでも少々おどろいているのさ。」
と、ヘムレンさんはいいました。
「ところで、きょうはなにをするんかね。」
スノークは、ほらあなの口から鼻をつきだして、空と海とをながめていましたが、もっともらしくいいました。
「さかなつりをしましょうよ。ぼくがむこうへいって、船の用意をしてくるあいだに、ほかのれんじゅうをおこしておいてください。」

どんどん水がはいってきて、あごのところまで水につかってしまったゆめを見ていたのです。とたんに、おどろいたことには、それが事実だったではありませんか。

夜のあいだに、屋根から雨がもってきて、ほらあなの中は、まるで川のようになっていました。かわいそうに、ヘムレンさんのねどこは、水びたしになっていたのです。

「こりゃ、ひどい。」

ヘムレンさんはなき声をだすと、きものをしぼって、それから天気を見るために、あなの口へでてみました。

どこもかしこも、おなじことでした。——灰色にぬれて、ひどいことになっています。

ヘムレンさんは、なあに、水をあびただけのことだと思おうとしましたが、それはだめでした。

「きのうはあつすぎたと思ったら、きょうはまた、ずぶぬれか。」

こんなことを思って、おとなりを見ると、スノークのあなは、まるっきりかわいているではありませんか。

「見てくれ、わしのねどこはずぶぬれだぜ。」

こうヘムレンさんがいっても、

「そりゃおきのどく。」

といったきり、スノークはねがえりをうって、むこうをむいてしまいました。

やしきのかがみの下のたんすのひきだしにしまってある、あの黒いぼうしのことを思っていたのです。
「もうすこし、ランプをあかるくしてよ。」
と、スニフがふるえ声をだしました。
そのとき、だしぬけにヘムレンさんがとびあがって、さけびました。
「きみたちには、きこえなかったか。外にだれかいるぞ。」
みんなは、ほらあなのまっくらな口のほうを見つめて、耳をすましました。
ピタピタというやわらかい音がします。黒いひょうの足音ではないでしょうか。
「なにさ、雨の音じゃないか。」
と、ムーミントロールがいいました。
「とうとう雨がきたんだ。これですこしはねむれるぞ。」
そこでみんなは、めいめいのすなのあなにもぐりこむと、毛布を頭の上までかぶりました。
ムーミントロールは、ランプをけしました。外では雨がしずかに音をたてています。みんなは、うとうととねむりにはこばれていきました。
ヘムレンさんは、びっくりして目をさましました。なんだか、小さいボートにのっていると、

と、そのときムーミントロールがさけびました。ほかのものたちも、こうふんしてさわぎました。
「どうしたんだ。きみたちはいったい、なんの話をしてたんだ。」
と、ヘムレンさんがききました。
「ぼうしの話ですよ。ぼくがこの春見つけた、あの黒いシルクハット。——あれが飛行おにのぼうしだったんですよ。」
と、スニフがいいました。
スナフキンは、いかにもといったふうに、しずかにうなずきました。
「飛行おにが、ぼうしをとりかえしにやってきたら、どうしましょう。わたし、とてもそんな赤い目を見つめる勇気はないわ。」
と、スノークのおじょうさんが、ふるえ声でいいました。
「ママに、この話をしてやらなくちゃ。いったい、月まではどのぐらい遠いの。」
と、ムーミントロールはききました。
「そりゃうんと遠いさ。それに、噴火口をのこらずさがすには、いくら飛行おにだって、ずいぶん時間がかかるからね。」
と、スナフキンは答えました。
しばらくのあいだ、不安な沈黙がつづきました。そのあいだ、みんなはそれぞれに、ムーミン

と、スナフキンはいって、なおも話しつづけました。
「あいつは、『ルビーの王さま』を見つけるまでは、幸福にゃなれんだろうよ。そのルビーは、黒ひょうの頭くらいあって、中をのぞいてみると、ほのおがきらきらしてるんだって。あの人は、海王星までふくめて、あらゆる遊星へ、さがしにいったんだぜ。――だけど、どうしても見つからないんだ。それで、いまは月へいってるのさ。――あそこの火山の噴火口の中をさがそうと思ってね。でも、それが見つかるとは、じぶんでも思っちゃいないらしいよ。心の中では、ルビーの王さまは、きっと太陽の中にあると思ってるのさ。ところが、なにしろ太陽はあんまりあつすぎて、あの人でもいくわけにいかないだろうね。」
「そんなこと、ほんとうかなあ。」
　こういってスノークが、うたがいをはさみました。
「そう思いたきゃ、思ってるがいいさ。」
と、スナフキンはバナナの皮をむきながら、そっけなくいいました。
「かささぎがどんなふうに思ってるか、おまえ、知ってるかね。あいつはいってるんだぜ。――飛行おには黒いシルクハットをかぶってる。ところが、二、三か月まえに月へいったとき、そのぼうしをなくしてしまったって。」
「そんなばかなことがあるもんか。」

「どうにもしやしないさ。あいつは、ただあつめるんだ。ヘムレンさんが植物をあつめるみたいにさ。」
と、スナフキン。
「なんだって。」
と、ヘムレンさんが、じぶんのあなの中からおきあがりました。
　スナフキンは話をつづけました。
「飛行おにが、家じゅうルビーでいっぱいにしていることを、話していたんだよ。その宝石は、家の中じゅう、そこにもここにも山につんであるし、かべにも、猛獣の目みたいに、はめこんであるんだ。
　飛行おにの家には屋根がないから、家の上をとぶ雲は、ルビーの反射で、血みたいに赤くそまってしまう。あいつの目も赤くて、やみの中でも、きらきら光るんだって。」
「なんだか、こわくなってきたな。これからさきは、気をつけておくれ。」
と、ヘムレンさんはいいました。
「飛行おにって、なんてしあわせなんだろう。」
と、スニフがさけぶと、
「とんでもない。」


Tove

ところが、その山のてっぺんには、飛行おにというまものの家がたっているんだぜ。その家は、こんなふうになってるのさ。」

こういってスナフキンは、すなの上に家のかたちをかいてみせました。

「じゃあ、まどは一つもないの？」

と、スニフがききました。

「そうさ。戸口ひとつないんだからね。」

と、スナフキンはいいました。

「なにしろ飛行おにってやつは、いつでも黒ひょうにのって、空をとびまわっているんだからね。まいばんでかけていって、ルビーをあつめては、ぼうしの中へいれてもどってくるんだって。」

「なんだって。ルビー！　どこで見つけてくるんだろ。」

と、目玉をとびでるほどむきだして、スニフがききました。

「その飛行おにってやつは、どんなすがたにでも身をかえることができるんだ。だから、たからものがうずまってるところなら、地の下でも、海の底へでも、もぐっていけるのさ。」

と、スナフキンは答えました。

「そんなに宝石をあつめて、どうするんだろう。」

スニフが、うらやましそうにいいました。

した。
そのときスナフキンが、ランプに火をつけながら、こんなことをいいだしました。
「ぼくがひとつ、こわい話をしてやろうか。」
「どれくらいこわい話だね。」
と、すぐにヘムレンさんがききました。
「これっくらいですよ。わかった？」
こういってスナフキンは、両手をありったけにひろげてみせました。
「いや、わからないなあ。だけど、お話しよ、スナフキン。がまんできないほどこわくなったら、いうからさ。」
と、ヘムレンさんは答えました。
「よろしい。」
こういってスナフキンは、話しだしました。
「ふしぎな話なんだ。ぼくは、かささぎのやつからきいたんだがね。いいかい、世界のはてに高い高い山があるんだ。その山のことを考えただけでも、目がまわるくらい高いんだぜ。
その山は、すすみたいにまっ黒で、きぬみたいにすべすべしていて、おそろしくきりたってるんだ。下のほうをのぞいてみても、谷底なんか見えやしない。見えるのは雲ばかりなんだって。

ほらあなでくらすなんて、たしかにスリル満点でした。みんなはほらあなにでかけると、すな地のまん中に石油ランプをおいて、めいめいかってにじぶんのあなをほりました。そこをねどこにするわけです。

もってきたたべものは、きっちりおなじ大きさの六つの山にわけました。その中には、ほしぶどういりのプディングもあるし、かぼちゃのジャムや、バナナや、さとうがしの子ぶたや、あじをつけたとうもろこしもありました。そう、あしたの朝ごはんにたべるパンケーキまで。

やがてお日さまが、赤い夕日の光でほらあなをみたしてしずんでいくと、しずかなそよ風が、かなしそうにつぶやきながら、ひっそりした浜べのほうからふいてきました。まもなく、神秘な夜がおとずれてくるのです。

スナフキンは、横ぶえをふきました。スノークのおじょうさんは、ムーミントロールのひざの上にカールをした頭をのせて、うっとりとしていました。ほしぶどういりのプディングをたべたあとなので、みんなはとてもみちたりた気分だったのです。

やがて、夕やみがほらあなの中へしのびよってくると、みんなはぞくぞくするような、たのしい気持ちになってきました。

スニフは、このほらあなをさいしょに見つけたのはぼくだよと、これで百回めのじまんをしました。でもめずらしいことに、きょうにかぎって、だれもそのことにはんたいもしませんで

くる日もくる日も、お日さまは、丘のあいだにひっそりとかくれたこの小さい谷間を、ようしゃなくてらしました。

小さなはい虫たちは、すずしい日かげをさがして、もぐりこみました。小鳥たちも歌をうたわなくなってしまいました。そこでムーミントロールも友だちも、みんなきげんがわるくなって、なかまどうしでけんかばかりしていました。

「ママ、なにかぼくたちのやることをさがしてよ。ぼくたち、けんかばかりしているんです。なにしろ、あつくてやりきれないもの。」

こう、ムーミントロールがいうと、ムーミンママはいいました。

「そうね、ぼうや、わたしもそのことは気にかかっていたのよ。だから、おまえたちがしばらくよそへいってくれると、ありがたいわ。どう、四、五日、あのほらあなにいってみたら？　あそこならすずしいし、だれにもじゃまされないで、およいだり、のらくらしていることだってできますよ。」

「じゃあ、あそこでとまってもいいの？」

と、ムーミントロールは、目をきらきらさせていいました。

「いいですとも。そして、すこしきげんをなおしてからかえってきてね。」

と、ムーミンママはいいました。

第5章



飛行おにのさがしている「ルビーの王さま」。マメルクをつった話。どうしてムーミンやしきがジャングルにかわったか。

六月のすえのことです。ムーミン谷は、とてもあつくなりました。

もう、はえやあぶでさえも、ブンブンいいませんでした。木はぐったりとしおれたようになり、川はもうきいちごのジュースをつくるにはふさわしくなくなって、ほこりっぽい谷間を、ほそぼそと、茶色になって流れているだけでした。

あのふしぎなぼうしは、またもやだいじにされるようになって、かがみの下にあるたんすのひきだしに、ちゃんとしまってありました。

「そうよ、そうでしょ。」
と、スノークのおじょうさんは、だんだんあかるい顔色をとりもどしながらいいました。
「あなたはおぼえてる？　——ほら、いつだったか、ぼくたち金色のちょうを見たじゃない。」
こう、ムーミントロールがいいました。スノークのおじょうさんは、幸福な思いでぐったりしながら、こっくりしました。
はなれ島は、もうずっと遠くに、夕日の光をあびて、もえるような色をしてうかんでいました。
「スノークの見つけた金を、あんたたちはなににつかうつもり？」
と、スナフキンがききました。
「わたし、花壇のふちかざりにつかったらいいと思うの。もちろん、大つぶのだけだけれどさ。」
と、ムーミンママはいいました。
「なにしろ、小さいのはまるでひんじゃくですものね。」
それからみんなは、太陽が海にしずんでいき、夕ばえの色が青とむらさきにかわっていくのを、ことばもなく見つめました。そのあいだにも冒険号は、しずかにゆれながら、家のほうへ進んでいくのでした。

に、あんな女は、ただ色がぬってあるだけじゃないの。」
こう、スノークのおじょうさんはいいました。
「だけど、その色がとてもきれいじゃないか。」
と、ムーミントロールは答えました。
これではあんまりというものです。スノークのおじょうさんはのどをつまらせて、じいっと海の中を見つめながら、まっさおな顔になりました。
それからとうとう、おじょうさんはさけびました。
「あの木の女王ときたら、まるでばかみたい。」
ムーミントロールは、びっくりして目をあげると、たずねました。
「おや、どうしてあんたはそんなに青い顔をしてるの。」
「いいえ、なんでもないの。」
と、おじょうさんは答えました。
するとムーミントロールは、いそいでへさきからおりてきて、スノークのおじょうさんのそばにすわりました。
それからしばらくして、ムーミントロールはいいました。
「まったくだ。あの木の女王は、ほんとにおそろしくばかに見えるね。」

くおもたいほど荷物をつんでいました。おまけに、船のうしろには、みんなであつめた流れ木をあんだ、大きないかだをひっぱっていたのです。

荷物は、金の山と、雪あらしのはいったガラス玉、すばらしく大きいブイ、長ぐつのかたっぽ、こわれたひしゃく、うきぶくろ、ラフィアのマットなどです。それからへさきでは、あの女の人の像が、海を見つめていました。

その像のそばには、ムーミントロールがじっとすわって、女の人のうつくしい青い髪をなでていました。ムーミントロールは、とてもしあわせでした。

スノークのおじょうさんは、そんなふたりから、目をはなすことができませんでした。

（ああ、あの木の女王さまにまけないほど、わたしがきれいだったらなあ。それなのに、わたしは前髪までなくしてしまったのだわ。）

こう思うと、スノークのおじょうさんは、もう、すこしもたのしくなくなってしまいました。

おじょうさんは、ムーミントロールにききました。

「あなたは、その木の女王さまがすき？」

「とてもすきだよ。」

ムーミントロールは、あいてのほうへ目もあげないで答えました。

「だけど、あなたはさっきいったじゃないの。――髪の毛のある女はすきじゃないって。おまけ

がってしまって、もじもじしているばかりでした。
「ちょっとごらんよ。おまえはまだぼくがなにを発見したか、見ていないんだろ。」
こういってスノークは、すなの上につみあげた、きらきらかがやく金の大きな山を、さもほこらしそうに、妹に指さしました。
スノークのおじょうさんの目の玉は、ほとんどとびだしそうになりました。
「ほんとうの金ね。」
こういっておじょうさんは、ふかいためいきをつきました。
「あそこにゃ、まだどっさりあるんだ。完全な金の山なんだぜ。」
と、スノークはじまんしました。
「スノークがこぼしたかけらは、みんなぼくがもらうんだよ。」
と、スニフはうれしそうにいいました。
おお、どんなにみんなは、この浜べで、おたがいが見つけたものに、おどろきあきれたことでしょう。ムーミン一家は、きゅうにお金持ちになったのでした。
それにしても、なかでもいちばんすばらしい見つけものは、やっぱりあの船首かざりの像と、ガラスの玉の中のかわいい雪あらしでした。
あらしがすっかりおさまって、いよいよはなれ島を、みんながはなれるときには、船はまった

「そりゃ、船のへさきにうちつけてあるからさ。それぐらいのことは、子どもにだってわかりますよ。」

　こう、スノークはいいました。

「こいつは、冒険号にくっつけるにはでかすぎるよ。ざんねんだなあ！」

と、スナフキンがいいました。

「まあ、なんてきれいな女の人でしょう。こんなきれいでいながら、ちっともしあわせになれなかったのねえ。」

　こういってムーミンママは、ためいきをつきました。

「あんたは、これをどうするつもり？」

と、スニフがききました。

　スノークのおじょうさんは、目をふせて、にっこりしましたが、それから、

「わたし、ムーミントロールにあげるの。」

といったのです。

　ムーミントロールは、ことばもでませんでした。顔をまっかにして、スノークのおじょうさんのまえに進みでると、おじぎをしました。

　おじょうさんもひざをまげて、はずかしそうに、えしゃくしました。ふたりともすっかりあ

中で思いました。そんなわけで、夕がた近く、女王さまのまん中にのって、ジャブジャブ水をかきながら、船つき場にかえってきたときには、おじょうさんは、とてもほこらしい気持ちでいました。

「ちびさん、おまえ、ボートを見つけたのか。」

と、兄のスノークがききました。

「あんたがそんなものを、ただのひとりで見つけたとはねえ。」

ムーミントロールは、感心したようにいいました。

「これは船首かざりなんだ。」

と、わかいころには七つの海をのりまわしていた、ムーミンパパがいいました。

「船のりは、じぶんたちの船のへさきを、きれいな女王の像でかざるのがすきだからねえ。」

「なぜなの。」

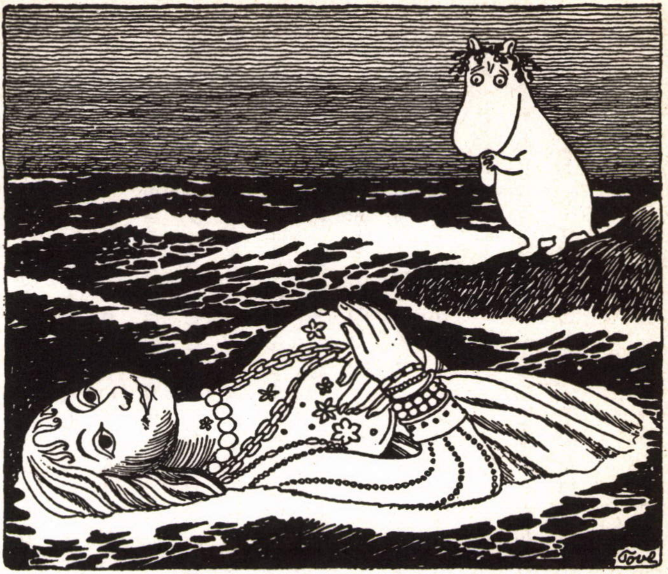
と、スニフがききました。

「うん、たぶん、きれいな女の人がすきだからだろうな。」

と、ムーミンパパ。

「だけど、なぜこの女にはせなかがないんだろうな。」

と、ヘムレンさんがいいました。



た。髪の毛も青くて、それが長くうつくしくうねって、かたまでたれていました。

「きっと、女王さまだわ。」

スノークのおじょうさんは、うやうやしくつぶやきました。

そのうつくしい女の人は、黄金の花かざりやくさりでかざられたむねの上で、両手をくんでいました。やわらかい、赤いぬの地の服をきています。ぜんたいがすっかり木でできていて、色をぬってあるのでした。ただ一つふしぎなのは、この女の人には、せなかがなかったのです。

（ムーミントロールにやるには、すこしもったいないわ。でも、とにかくあの人にやることにしましょう。）

こうスノークのおじょうさんは、心の

らしいことをして、ムーミントロールをびっくりさせてやりたいわ。）
スノークのおじょうさんは、かなしそうに、こんなことを考えていたのです。
それから、ほっとためいきをついて、人けのないなぎさを見わたしました。とたんにおじょうさんの心臓は、とまったようになりました。
みさきのはずれのあさいところに、なんだかふしぎなものが、ゆらゆらとただよっているではありませんか。とても大きい——スノークのおじょうさんの十倍ほどもあるものです。
（はしっていって、すぐにみんなをつれてこなくちゃ。）
こう考えましたが、すぐまた思いとまりました。
（とにかく、あれがなにものだか、こわがってばかりいないで、たしかめなくては。）
そこでおじょうさんは、ふるえる足をふみしめながら、そろそろと近づいていってみました。
それはなんだったでしょう。——女の巨人だったではありませんか。足のない女巨人です。
まあ、こわい。
それでもおじょうさんは、ぶるぶるふるえながらも、なおも二足三足、進んでみました。
すると、なおおどろいたことに、その女巨人は木でできていて、しかも、とてもうつくしかったのです。
ほおとくちびるは赤く、まるい青い目は、すんだ水をとおして、にっこりとほほえんでいまし

るほうが、スナフキンは気にいりました。

みさきのはずれのところでは、スノークのおじょうさんが、岩によじのぼっていました。やけこげた前髪のところには、うみゆりの花をかざっていました。おじょうさんは、ほかのものたちをびっくりさせるようなものを、なにか見つけようと考えていたのです。

（みんながそのしなものに感心したら、わたしはそれを、ムーミントロールにやるんだわ。）

こうおじょうさんは心の中で思っていました。もっとも、そのしなものが、じぶんをきれいに見せてくれるものだったとしたら、べつですがね。

岩をよじのぼるのは、なかなかやっかいでした。じまんの花かざりも、ふきとばされてしまいそうなのです。でも、さいわいに風は、もうそれほどつよくはありませんでした。海も、いかりくるったみどり色から、おだやかな青い色にかわっていました。波も、もうおそろしいほどではなくて、さもたのしそうに、白いしぶきをとばしているだけです。

スノークのおじょうさんは、やっとのことで、小石のちらばったすな浜におりました。しかし、そこらには海草や、流れ木がいくらかうちあげられているだけでした。すこしがっかりして、おじょうさんは、みさきの上を、もっとさきまでいってみました。

（ほかの人たちは、みんなたいしたことをしたのになあ。ふしぎなぼうしを見つけるとか、ありじごくをつかまえるとか、気圧計をさらってくるとかさ。わたしもじぶんひとりで、なにかすば

とびのく。そうして波がざんねんそうに、じぶんの長ぐつをなめるのを、わらってやるのです。こんなあそびが、おもしろくてたまりませんでした。

みさきをこえたところで、スナフキンは、ムーミンパパに出あいました。パパは流れよった材木を、ひっぱりあげていました。

「すごいだろ、え？　これだけありゃ、冒険号のために桟橋をつくってやれるよ。」

こう、ムーミンパパはいいました。

「材木をひっぱりあげるの、てつだいましょうか。」

と、スナフキンはいってみました。

「いらん、いらん。」

と、ムーミンパパは、あわてたようにいいました。

「わしひとりで、ひっぱりあげられるわい。おまえさんも、じぶんでなにかひっぱりあげたらどうだね。」

そこらにはまったく、ひっぱりあげるべきものがいくらもありました。しかし、スナフキンの心をうごかすようなものは、一つもありませんでした。小さなたる、いすのこわれたの、そこのぬけたバスケット、アイロン台——みんなやっかいな、おもたいしなものばかりです。

スナフキンはポケットに両手をつっこんで、口ぶえをふきました。波をからかってあそんでい

こういってムーミントロールは、もういちど雪をまいあがらせました。
「ぼくにゃ、わかんないな。このうきぶくろと、きみの雪あらしのおもちゃと、いったいどっちがいいかなあ。」
と、スニフはいいました。
「これは世界に、たった一つきりしかないものだぜ。」
と、ムーミントロールはいいます。
「だけどぼく、このうきぶくろは、手ばなすわけにいかないよ。ねえ、ムーミントロール、その雪あらしのおもちゃは、共同にしないか。」
「ふむ。」
と、ムーミントロールはいいました。
「ときどきぼくにも、ちょっとかしてくれないか。日曜日なんかにさ。」
と、スニフはなおもたのみました。
ムーミントロールは、しばらく考えていましたが、やがていいました。
「いいとも、日曜日と水曜日には、きみにかしてやるよ。」
そのあいだにスナフキンは、ただ波だけをあいてに、ひとりで、そこらをぶらついていました。いよいよ波がよせてくる、さいごのしゅんかんまでまっていて、波がやってきたら、さっと

と、スニフは答えました。
「ねえ、きみ、とりかえっこしないか。きみの古ぼけたブイと、ぼくのラフィアのマットと、このひしゃくと、長ぐつとでさ。」
「おまえが死んでからね。」
と、ムーミントロールはいいましたが、
「しかし、そのうきぶくろと、このめずらしいたからものとなら、とっかえてもいいかしれんぞ。こいつはきっと、遠い国から流れてきたものと思うんだ。」
こういってムーミントロールは、一つのガラスの玉を高くもちあげて、ゆすぶりました。するとたちまち、ガラス玉の中にしかけてある数かぎりない雪がまいあがって、それが銀紙でまどをはったおもちゃの家の上に、サラサラとふりつもるのでした。
「あれえ！」
と、スニフは思わずいきをのみました。
たいへんなあらそいが、スニフの心の中でもちあがりました。というのは、どんなものでも手ばなすのは、スニフにとって、とてもつらいことだったからです。――たとえ、とりかえっこをするばあいでもね。
「見てごらん。」

にか、とても大きなものとです。
（あいつをぼくが見つけなかったのは、ざんねんだなあ。いったい、なにを見つけたんだろう。）

こんなふうに、スニフは思いました。

いまやムーミントロールは、見つけたものを水からひっぱりあげて、すな浜のほうへころがしてきます。スニフは首をのばして、そっちを見ました。——スニフが見たものはなんだったでしょう。ブイ（浮標。海面にうかべて船などの目じるしにする道具）——とても大きな、すばらしいブイだったのです。

「ばんざあい！　どんなもんだい。」

と、ムーミントロールはさけびました。

「すげえな。」

こうスニフはいいましたが、もんくがありそうに、首をかしげました。それから、じぶんが発見したものをすなの上にならべて、いいました。

「こいつはどうだね。」

「うきぶくろはいいがね。だけど、ひしゃくのこわれたのなんか、なんになるんだい。」

と、ムーミントロールはいいました。

「いそいで水あかをくみだすときにゃ、役にたつさ。」

は、なにもかもわすれてしまいました。

スノークはもう、浜べをただうろついているやどなしではありません。——りっぱな砂金ほりでした。

そのあいだにスニフは、ごくかんたんなものを見つけました。でも、それでとても幸福でした。スニフが見つけたのは、うきぶくろなんです。

海の水につかっていたせいで、いくらか金具がさびてはいましたが、しめてみると、ぴったりでした。

（これがあれば、ふかい水の中へだって、はいっていけるぞ。こうなりゃ、じきにぼくだって、ほかのれんじゅうにまけないくらい、うまくおよげるようになるさ。ムーミントロールのやつ、びっくりするだろうな。）

こう、スニフは考えました。

すこし岸からはなれたところにうかんでいた、しらかばの皮や、海草や、流れついたいろんなものにまじって、スニフはまた、ラフィアのマット（しゅろのせんいであんだマット）と、おれたひしゃくと、かかとのとれた長ぐつのかたっぽを見つけました。海からひきあげるときには、こんなものでもすばらしいたからものに見えるものです。

遠くではムーミントロールが、水の中にたって、なにかともみあっているのが見えました。な

そのあいだにスノークは、いちばん高い山のてっぺんにかけのぼって、あたりを見まわしました。そこからながめると、東の岸から西の岸まで見わたせて、島ぜんたいが、あれた海の上にうかんでいる、大きな大きな一つのすいれんの花のように見えたのです。

なにか流れついたものがないかとさがしているスニフが、まるで点のように見えました。スナフキンのぼうしも見えました。またむこうに見えるのは、たしかにめずらしいかいがらんをほっている、ヘムレンさんでした。

ところで、あれはなんでしょう。あそこには、かみなりがおちたのではないかしら。ムーミンやしきの十倍もある大きながけが、りんごみたいにまっぷたつにさけて、そのあいだにふかいわれめが見えています。

スノークは、ふるえる足をふみしめながら、そのわれめにのぼっていき、かみなりでさけた、黒々とした岩のかべを見あげました。岩はこくたんのようにまっ黒でした。しかし、その中にきらきら光るしまがはしっています。金――金にちがいありません。

スノークはナイフをとりだして、そこらをつつきました。小さい金のつぶが、手の中におちてきました。一つぶ、また一つぶととりだしているうちに、スノークはすっかりのぼせてしまいました。金のつぶは、いよいよ大つぶのがとれてきました。

しばらくのちには、かみなりのおかげでこの世にでてきた、このすばらしい金の鉱脈のほかに

ごとでした。とてもおかしなものが見つかるからです。でも、それを海からひきあげるのは、ときとすると、ひどくむずかしい、きけんなことでした。

　ムーミンママは、けわしい岩のかげにかくれた小さいすな浜におりていきました。そこには、青いはまかんざしのむれがはえていましたし、風がふきこんでくるたびに、はまむぎがほそいくきをふるわせて、サラサラ鳴っていました。

　ムーミンママは、このかくれがのようになった場所にねころがりました。そうやっていると、目に見えるのは、青い青い空と、頭の上でゆれている、はまかんざしの花だけでした。

（ちょいとひと休みしましょ。）

　ママは、こう考えたのです。ところが、まもなくママは、ぐっすりとねむりこんでしまいました。





「心配するなよ。」
と、パパはいいました。
「あらしがかわりになにかもってきてくれたんじゃないかな。コーヒーをのんだら、浜べをひとまわりして、波にうちあげられたものを、しらべてみようよ。」
　そこでみんなは、コーヒーをのみおわると、見まわりにでかけたのです。
　島のはんたいがわには、すべすべした光りかがやく岩が海につきでて、そびえたっていました。そのあたりには、人魚たちのひみつなおどり場につかわれる、貝がらのちらばったすな浜や、いそ波がくだけるたびに鉄のとびらをたたくようなすごい音をたてる、まっくらなさけめがありました。岩あなや、ゴボゴボ音をたてる水たまりも、いくつもあって、いろんなめずらしいものが見つかったのです。
　みんなは、どんなものが流れついているかと、てんでにさがしにかかりました。これは、このうえもなくおもしろいし

「さあ、水あびにいこう!」
と、ムーミントロールがさけびました。
みんなは海水着をつけて、なぎさにはしっていきました。もっとも、まだ水がつめたすぎると考えたヘムレンさんと、ムーミンママと、ムーミンパパはべつでしたけれど。
みどりと白の波が、すな浜にたわむれていました。おお、ムーミンとして生まれて、お日さまがでているあいだ、波の中でおどりはねることは、なんと幸福なことでしょう。
夜のあいだのことは、なにもかもわすれられてしまいました。そしてみんなのまえには、六月の長い一日がありました。
みんなはかめのように波のあいだにもぐったり、波がしらにのっかって、岸まで波のりをしました。スニフはあさいところで、バチャバチャやっていました。スナフキンはあおむけに水の上にうかんで、青と金にかがやく空を見あげながら、ずっと沖のほうまででていきました。
そのあいだに、ムーミンママはコーヒーをわかして、それからバターいれをさがしました。お日さまの熱でバターがとけてしまわないように、ぬれたすなの中にうずめておいたのです。ところが、いくらさがしても見つかりません。あらしで、おし流されてしまったのです。
「ああ、こまった。サンドイッチになにをつけてやったらいいでしょう。」
こういって、ムーミンママはなげきました。

と、スナフキンがいいました。
島は雨にあらわれて、いまや朝日をあびてきらきらかがやいていました。
「そうだ。ぼくは朝の歌をうたおう。」
こういってスナフキンは、横ぶえをとりにいきました。
こうしてみんなは、スナフキンのあとについて、ようきに歌をうたったのです。

お日さまのぼって
夜はにげていった
ニョロニョロどもも
いっちゃった
きのうはきのう
くよくよするない
スノークのじょうちゃんにゃ
ふさふさした毛がはえるさ
ピーホー!

みんなはおじょうさんをかこんで、なんとかして元気づけようとしました。でも、みんなむだでした。

ヘムレンさんはいいました。

「ねえ、おきき。わしは生まれたときからはげ頭だったけど、しょうじきにいって、それで、とてもぐあいよくいったよ。」

「頭にあぶらをすりこんであげよう。そうすりゃ、またはえてくるよ。」

と、ムーミンパパはいいました。

「そうしたら、とってもきれいにカールしてくるわ。」

と、ムーミンママも口をそえました。

「ほんとでしょうか。」

と、スノークのおじょうさんは、しゃくりあげながらいいました。

「もちろんですとも。」

こういってから、ムーミンママは、なぐさめるようにつけくわえました。

「あんたの毛がカールしたら、どんなにかわいく見えるでしょうね。」

これをきいてスノークのおじょうさんは、なくのをやめて、すわりなおしました。

「なんてきれいなながめだろう。」

スノークのおじょうさんは、そのとき目をさまして、にっこりしました。
ムーミントロールは、せきこんでいいました。
「ねえ、とってもへんなことだけれど、ぼく、だんだん髪の毛のないむすめさんのほうが、すきになってきちゃったんだよ。」
「ほんと？　どうしてでしょ。」
と、おじょうさんはおどろいてききました。
「髪の毛なんて、みっともないもの。」
スノークのおじょうさんは、すぐさま前足をあげて、髪にさわってみました。――ところが、なんということでしょう。手にくっついてきたのは、わずかなもえのこりのふさ毛だけだったのです。びっくりぎょうてんして、おじょうさんは大きく目を見ひらきました。
「やあい、おまえは、はげちゃったじゃないか。」
と、スニフがいいました。
「あんたに、とてもにあうよ。――ほんとだよ。ないちゃだめ。」
と、ムーミントロールは、いっしょうけんめいなぐさめました。
しかし、スノークのおじょうさんは、すなの上に身をなげて、はげしくなきじゃくりました。――だいじなだいじな、頭のてっぺんのかざりをなくしたことを。

ムーミントロールのひざに頭をのせて、すやすやとねむっていました。

あらしがわすれていった、二つ三つの小さいわた雲が、貝がらみたいなきれいなピンク色にそまりました。つづいて太陽が、きらきら光る顔を、海の上にだしました。

ムーミントロールは、かがみこんで、スノークのおじょうさんをおこそうとしました。ところが、そのとたんに、おそろしいことに気がついたのです。

おじょうさんのふさふさしたきれいな前髪が、すっかりもえてしまっているではありませんか。ニョロニョロたちが、おじょうさんのそばをとおったときに、おこったことにちがいありません。

おじょうさんは、なんというでしょうか。どういってこの人をなぐさめたらよいでしょうか。こうなっては、なかよしのふたりのあいだもおしまいです。



そこでみんなはぴったりくっつきあって、浜べに一列になってすわりました。スニフは、ここならいちばんあんしんだとばかり、まん中になりました。

夜はもうほとんどあけかかってきて、あらしも遠ざかりました。それでもまだ浜べには、波がものすごい音をたててくだけていました。

東の空がしらみそめました。ぞくぞくするほどひえてきました。

やがて、夜あけのさいしょの光の中に、みんなは見ました。——ニョロニョロたちが島をはなれていくのを。

ぎっしりとあのばけものたちをのせた船は、かげのようにみさきのうしろからすべりでて、沖のほうへむかっていきました。

ヘムレンさんは、ほっといきをついていいました。

「二どとわしは、ニョロニョロ一ぴき見たいとは思わんよ。」

「あいつらは、きっとあたらしい島をさがしにいくんだよ。そこはきっと、だれにもけっして見つからないひみつの島なんだ。」

こういってスナフキンは、あこがれにみちた目で、うらやましそうに、その小さなボートのあとをおっていました。

東の水平線に、さいしょの金色の光のしまがあらわれたころ、スノークのおじょうさんは、

にすがたをけしていたのです。それでも、あとをおいかけようというものは、ただのひとりもありませんでした。

ヘムレンさんは、みじめにうめいて、鼻をすなの中につっこんでいました。

「これじゃあ、あんまりだ。どうして家もないまずしい植物学者が、しずかに平和な一生をおくることができないんだろ。」

こういって、ヘムレンさんはなげきました。

「いきるってことは、平和なものじゃないんですよ。」

と、スナフキンは、まんぞくそうにいいました。

「そら、子どもたち、晴れてきたよ。じきにあかるくなるだろうね。」

と、ムーミンパパはいいました。

ムーミンママはふるえながら、しっかりとハンドバッグをつかんで、あれくるっている海の上を見わたしていましたが、ぽつりといいました。

「あたらしい小屋をたてなおして、もういちどねたものでしょうかね。」

「そんなことしたって、しようがないや。毛布にくるまって、お日さまがのぼるのをまちましょうよ。」

こう、ムーミントロールはいいました。

と、ムーミントロールは、心配そうにいいました。
「きっと、気圧計をさがしてるんだと思うな。あれをとりあげちゃいけないっていっておいたのになあ。いま、やつらはあれを見つけだしたんだよ。」
と、スナフキンはいいました。
ニョロニョロたちは、どうかして気圧計をとりかえそうと、ヘムレンさんの上によじのぼってみんなで気圧計にしがみついていました。もののこげるようなにおいは、いまでは、とてもひどくなっていました。
スニフは目をさまして、しくしくやりはじめました。そのとたんに、つんざくようなさけび声があがりました。一ぴきのニョロニョロが、ヘムレンさんの鼻をふみつけたのです。
たちまちみんなが目をさまして、とびおきました。大さわぎになりました。ニョロニョロはふみつぶされるし、スニフは感電しました。ヘムレンさんは恐怖のさけびをあげてとびだしましたが、たちまち帆づなに足をひっかけてしまったので、テントがドスンとみんなの上にたおれました。いやはや、まったくおそろしいさわぎでした。
あとでスニフのいったところによると、みんなが帆布の下からはいだすには、すくなくとも一時間はかかったそうです。たぶん、いくらかおおげさすぎるかもしれませんけれど。
しかし、みんながどうやら顔をそろえるまえに、ニョロニョロたちは気圧計をとって、林の中

「どうしたの。」
とききました。
毛布の下から、ぼやけた声がきこえてきました。
「なんだか、きけんなものがいるらしいのよ。わたし、感じでわかるの。」
ムーミントロールは、やみの中をにらみました。はたして、なにものかがいます。ちらちらと小さな光をはなって、青白いぶきみなものが、ねている人たちのあいだを、ひっそりと歩きまわっているではありませんか。
ムーミントロールもこわくなって、スナフキンをよびおこしました。
「ねえ、ごらんよ。あれ、ゆうれいじゃない？」
しかし、スナフキンはいいました。
「なんでもないよ。ニョロニョロじゃないか。かみなりのおかげで、あいつらには電気がおきたんだ。それであんなに光るのさ。じっとしておいで。でないと、感電するよ。」
ニョロニョロたちは、なにかをさがしているらしく、バスケットやかごの中を、しきりにかきまわしています。もののこげるようなにおいは、いよいよつよくなりました。
そのうちにニョロニョロは、きゅうにヘムレンさんがねているすみっこにあつまりました。
「あいつらは、ヘムレンさんをおっかけてきたんだろうか。」

第 4 章



ニョロニョロが夜おそってくる。おかげでスノークのおじょうさんが、髪の毛をなくす。はなれ島でのいちばんめざましい発見。

ま夜中に、スノークのおじょうさんは、ぎょっとして目をさましました。なにかが顔にさわったのです。

おじょうさんは、目をあけてみる勇気はありませんでしたが、ふんふんやって、しきりに身のまわりをかいでみました。なんだか、もののこげるようなにおいがします。そこで、あわてて毛布をかぶって、ふるえ声でムーミントロールをよびました。

ムーミントロールはすぐにはねおきて、

「朝にしなさい。」
と、ムーミンママはいいました。
「朝になったら、なにもかも探検して、それから水をあびましょう。島はいま、ずぶぬれになっていて、なにもかも灰色で、おもしろくありませんよ。」
ムーミンママはみんなを毛布の中におしこんで、それからじぶんでもねむりにかかりました。――まくらの下にハンドバッグをおしこんで。
外ではあらしが、またもやいかりくるいだしました。いまでは波の音に、ふしぎなざわめきがまじっていました。からからとわらうような声、だれかのはしりまわる足音。そして、海のずっと遠くでは、大きな鐘が、いくつもいくつも鳴っていました。
スナフキンは、じっと横になったまま、世界をまわり歩いたときのことを思いだしながら、ゆめうつつに、その音に耳をかたむけました。
「もうじき、ぼくはまた旅にでるんだ。」
と、心の中で思いました。でも、すぐというわけではありませんが。

「やっかいなことがおきるんだ。いつでも、やっかいなことがおきるんだ。」

ようやくあらしは、南のほうへうつりはじめました。かみなりの音も、だんだん遠くなり、いなびかりもしだいによわくなって、とうとう、雨の音と、岸にくだける波の音がきこえるだけになりました。

「さあ、はいだしてもいいぜ、スニフ。もうおわっちゃったもの。」

と、スナフキンがいいました。

スニフは毛布の中からはいだしてくると、大きくのびをして、耳をかきました。あんまり大さわぎをしたので、すこしばかりきまりがわるかったのです。

「いま、何時？」

こういってスニフがきくと、

「八時近くだろ。」

と、スノークが答えました。

「そんなら、そろそろねなくちゃ。夕立に、とんだじゃまをされたわね。」

と、ムーミンママはいいました。

「だけど、どこにかみなりがおちたか、さがしてみない？　きっと、おもしろいよ。」

と、ムーミントロールはいいました。

た海で、このうえもなく大きな波を、このはなれ島にぶっつけました。

「海の上にいなかったのは、ほんとにさいわいだったこと。まあ、なんてお天気でしょう。」

と、ムーミンママはいいました。

スノークのおじょうさんは、ぶるぶるふるえている前足を、ムーミントロールの手の中にさしこみました。ムーミントロールは、とても男らしい気持ちになって、

（ぼくは、どんなことがあっても、この人をまもるぞ。）

と、心の中でちかいました。

スニフは毛布をかぶって、ないています。

「いよいよ頭の上にきたぞ。」

と、ムーミンパパがいいました。

そのとき、さっとすさまじいいなびかりが島をてらしたかと思うと、すぐつづけて、なにかをひきさくような、ものすごい音がしました。

「どこかにおちたぞ。」

と、スノークがいいました。

まったく、すこしひどすぎました。ヘムレンさんは、頭をかかえてすわりこんで、もそもそいいました。

こう思ってスナフキンは、こうふんとよろこびで身をふるわせました。

ぼうしのつばの下で、目をぐりぐりやりながら、じぶんが空高く雲の上をはしっていくところを想像しました。おそらく、さっとひらめくいなずまにのって、海の上へとんでいくつもりなのでしょう。

もう太陽はかくれてしまい、海の上は灰色のまくがかかったみたいになって、横なぐりの雨がたたきつけています。日がくれるまでには、まだ何時間かありましたけれど、あたりはいちめん、やみにつつまれてきました。

スナフキンは身をひるがえすと、岩づたいに、ぴょんぴょんとびはねてかえりました。

テントにかえりついたのは、ちょうどいいときでした。というのは、もうおもたい雨のつぶが、しきりに風にむちうたれて、帆布をうちはじめていたからです。

スニフは、かみなりをこわがって、すっかり毛布にくるまっていました。ほかのものたちは、みんなくっつきあって、せなかをまるめてすわっていました。テントの中には、ヘムレンさんの植物の標本のにおいが、ぷんぷんただよっていました。

とたんに、みんなの頭のま上ですさまじいかみなりの音がして、小さい避難小屋は、いくどもいくども、目のくらむようないなびかりで、てらしだされました。

かみなりは、まるで大きな汽車みたいに、空じゅうをゴロゴロころがりまわりました。海はま

屋をつくりました。
すきまには、ムーミンママが、こけをあつめてつめました。スノークは、雨水がよくはけるように、小屋のまわりにみぞをほりました。
みんなは、あっちへはしり、こっちへはしりして、荷物を安全な場所にうつしました。そのあいだにも、かみなりはどんどん近づいてきました。木々のあいだを、小さな風が、ためいきをつきながら、不安そうにかけぬけます。
「ぼくがみさきへいって、天気がどんなだか、見てこよう。」
こういって、スナフキンはぼうしをしっかりと耳の上までさげると、でていきました。それから、たったひとりで、岩山のいちばんはずれまではしっていくと、いかにもたのしそうに、大きな玉石にせなかをもたせかけました。
海のすがたは、すっかりかわっていました。いままでは黒っぽいみどり色をして、白い波がしらをしきりにおったてています。岩という岩は、まるでりんみたいに黄色く光っています。おごそかに鳴りとどろきながら、かみなりは南のほうから近づいてきます。
それは、海の上にまっ黒い帆をひろげ、空の半分をおおっています。いなずまは、ぶきみな矢を、しきりにきらめかしました。
「あらしのやつ、まっすぐに島をめがけてくるぞ。」

「島にのころう。」
と、ムーミンパパが決定をくだしました。
「一晩じゅう?」
と、スニフがあわれっぽい声をだしました。
「たぶんね。じきに夕立がやってくるだろうから、いそいで小屋をつくらなくちゃ。」
と、ムーミンパパは答えました。
　冒険号は、浜の高いところまでひきあげました。それから林のはずれに、船の帆と毛布とで、いそいで小



「もうちょっとまって、ようすをみたら、どうなの。島を発見したとたんに、すぐさまひっかえすのは、ざんねんだもの。」

と、ムーミントロールはいいました。

「しかし、あらしになったら、どうにもうごけなくなるぜ。」

と、スノークは、ゆかいそうにいいました。

「そんなら、なおすばらしいや。いつまでもここにいられるんだもの。」

と、スニフはさけびました。

「おとなしくせい、子どもたち。わしは考えなくちゃならん。」

こういってムーミンパパは、浜べまでおりていって、くんくん風をかぎまわりました。それから、東に西に、北に南に、頭をむけて、ひたいにしわをよせて考えこみました。

遠くで、ゴロゴロゴロやりだしました。

「かみなりだ！　おお、どうしましょう。」

スニフがなき声をだしました。

水平線上に、こわいような雲のみねがあらわれました。それはどす黒い青い色をしていて、小さいあかるいわた毛のような雲をまえのほうにとばしています。ときおり、ものすごいいなびかりが、海の上をてらしだしました。

こういって、ムーミンパパは気圧計を見ていました。が、きゅうに、ひどくまじめな顔になっていいました。
「こりゃ、あらしになるぞ。」
「大きなあらし？」
と、心配そうにスニフがききました。
「じぶんで見てごらん。気圧計はゼロゼロをさしている。これより下にはさがれんとこまでいってるんだ。——こいつが、われわれをからかってるのでなければね。」
と、ムーミンパパは答えました。
しかし、気圧計がからかってるのだとは、どうも思えませんでした。金色のもやは、いよいよこくなって、黄と灰色のまじったきりになり、水平線のほうの海の色は、ぶきみな黒みをおびてきていました。
「いそいで家にひきあげなくては。」
と、スノークがいいました。
「まだはやいわ。わたしたち、むこうがわのがけを、よくしらべる時間がなかったもの。それに、まだ水もあびていないじゃないの。」
と、スノークのおじょうさんがいいました。

ふたりが浜べにかえりついたとき、ほかのものたちは、パンケーキとムーミンパパがつったまぐろをたべていました。
「ヘーイ！」と、ムーミントロールがさけびました。
「ぼくたちは、もう島をひとまわりしたんだぜ。むこうがわには、すごいがけがあって、まっすぐに海へおちこんでいたよ。」
「それから、いっぱいニョロニョロを見たよ。すくなくとも、百ぴきはいたぜ。」
と、スニフは話しました。
「あいつらのことは、二どといわんでくれ。」
と、ふかい思いいれで、ヘムレンさんはいいました。
「わしは、あいつらには、がまんができんのじゃ。ところで、まあここへきて、わしのぶんどってきたものを見てくれ。」
こういってヘムレンさんは、ほこらしげに、気圧計をテーブルかけの中央におきました。
「まあ、なんてきれいに光ってるんでしょう。とけいかしら。」
と、スノークのおじょうさんがききました。
「いや、気圧計だよ。これを見ると、お天気がよくなるか、あらしになるか、わかるんだ。ときによっては、とてもべんりなものさ。」

二、三秒のあいだに、林の中のあき地は、からっぽになりました。みんなが林の中ににげこんでいったことは、スナフキンには、足の感じでわかりました。ニョロニョロがそばをすりぬけていくときには、まるでいらくさがさわったみたいに、ちくちく足をさしたからです。

ヘムレンさんは、草の上にすべりおりましたが、すっかりへたばっていて、うめくようにいいました。

「やれやれ、ムーミン一家とくらすようになってからは、ろくなことがないよ。いざこざにまきこまれたり、きけんなめにあうばっかりじゃ。」

「おちつきなさいよ、ヘムレンさん。なんといってもあなたは、ずいぶんしあわせじゃないですか。」

こういってスナフキンは、なぐさめました。

「いまいましいニョロニョロどもめ。こらしめのために、気圧計はもらっていくよ。」

こうヘムレンさんは、ぼやきました。

「そっとしといたほうがいいな。」と、スナフキンが忠告しました。

しかしヘムレンさんは、ぴかぴか光る大きな気圧計を柱からはずして、意気ようようとわきの下にかかえていました。

「さあ、みんなのところへかえろう。わしゃ、とてもおなかがすいたよ。」

と、ヘムレンさんは、にがにがしくいいました。

　すると、スナフキンはいいました。

「とても関係があるんですよ。あなたにはわからないんですか。ニョロニョロたちは、しゃべることもきくこともできないし、目だってよく見えないんです。ところが、感じるのだけはすばらしく敏感なんです。ひとつ、柱をまえうしろにゆすぶってごらんなさい。やつらは地面のうごきでそれを感じて、きっとこわがりますよ。おなかにびんびんこたえてさ。あいつらは、無線装置そっくりですものね。」

　ヘムレンさんは、柱のてっぺんで、前後にからだをゆすぶりはじめましたが、あわててさけびました。

「わしゃ、おっこちてしまうよ。」

「もっとはやく、もっとはやく。もっと小きざみにゆすぶって。」

と、スナフキンはどなりました。

　ヘムレンさんは、やっとのことで、やけくそにからだをゆすぶりました。すると、ニョロニョロたちは、ようやく足のうらになんだかきみわるいものを感じたらしく、ザワザワと不安そうにうごきだしました。そしてつぎのしゅんかんには、あののねずみたちとおなじように、あわててにげていってしまったのです。

びかけました。

「へーイ！　どうしてあんたは、おとなしいニョロニョロを、こんなにおこらしたの。」

かわいそうなヘムレンさんは、うめくようにいいました。

「わしゃ、ただやつらの気圧計をたたいただけだよ。そしたら、気圧計がさがったんじゃ。どうか、そのきみわるいおばけどもをおっぱらってくれんか、スナフキン。」

「ちょっと考えさせてください。」

と、スナフキンはいいました。

（ニョロニョロたちは、耳がないので、こうした会話も、すこしもきこえないのです。）

しばらくすると、ヘムレンさんはさけびました。

「大いそぎで考えてくれよ、スナフキン。わしは、もうずるずるすべりおちていくじゃないか。」

「ねえ、あなたはのねずみが庭にでてきたときのことをおぼえていますか。ムーミンパパは地面にたくさんあなをほって、風車をそこにすえつけましたね。風車がまわりだすと、地面がひどくふるえたもので、のねずみたちは、おびえて、にげていったでしょ。」

こう、スナフキンはいいました。

「きみの話は、いつでもおもしろいよ。しかし、それがわしのいまのくるしい立場と、どういう関係があるんじゃや。それがちっともわからんよ。」

「いま柱からおっこちたら、どうなることだろう。」

こう考えると、ヘムレンさんはぞっとしました。思わずヘムレンさんは、ありったけの声でさけびました。

「たすけてくれ。たすけて、たすけて、たすけて！」

しかし、林はしいんとしています。

もうさいごです。ヘムレンさんは、二本の指を口にくわえて、高くふきならしました。三どはみじかく、三どは長く、そしてまた、三どみじかく。ＳＯＳです。

浜べをぶらついていたスナフキンが、ヘムレンさんのＳＯＳをききつけました。スナフキンは、頭をあげて、耳をすましました。やがて、声のした方角がわかると、たすけに突進しました。

声は、いよいよはっきりときこえてきます。

スナフキンは、もうすぐ近くだとわかると、用心ぶかく、はらばいになって進みました。

やがて、木のあいだがいくらかあかるくなったと思うと、林の中のあき地と、ニョロニョロのむれと、柱のてっぺんにしがみついているヘムレンさんとが見えました。

「これは、おそろしいことになっているわい。」

スナフキンは、心の中でつぶやきましたが、ふと思いついて、大きな声で、ヘムレンさんによ

ラサラと音をたてながら、手をふりふり、じりじりとこちらに近づいてきます。
　ヘムレンさんは、もう気が気ではありません。いっしょうけんめいに、にげるチャンスをねらいました。しかし、ニョロニョロたちは、かべのようにぎっしりとヘムレンさんをとりまいて、いよいよじりじりと近づいてきます。
　しかも、林のあいだからは、なおもたくさんのニョロニョロが、じっとこちらをにらみながら、足音もたてずに、こちらへ近づいてきます。
「あっちへいけ。しいっ、しいっ。」
と、ヘムレンさんは必死でどなりました。
　しかし、みんなはいよいよ近づいてくるばかりです。――おしだまったままで。
　とたんにヘムレンさんは、スカートをつまみあげて、いきなり青い柱によじのぼりだしました。柱はぬるぬるしていて、すべりました。でも、恐怖にかりたてられて、ふだんはいくじなしのヘムレンさんも、およそヘムレンさんらしくない、くそ力をだしました。とうとう柱のてっぺんまでのぼって、気圧計をつかんだのです。
　ニョロニョロたちは、いまや柱の下までつめよってきて、ヘムレンさんが柱からおりてくるのを、まちかまえていました。あき地ぜんたいが、一まいの白いじゅうたんになったように、ニョロニョロでうずまっていました。

と、青い柱にぶつかって、はじめて目をあげてみて、びっくりぎょうてんしました。
こんなにたくさんのニョロニョロを見たのは、生まれてはじめてでした。みんなは、あちこちにかたまって、その青白い小さい目で、ヘムレンさんをじいっと見つめています。
「あいつらは、おこっているんじゃないかな。ひとりひとりは小さいけれど、なにしろ、おそろしくたくさんいるぞ。」
こうヘムレンさんは、心の中で思いました。それから、ぴかぴか光っているマホガニー製の、大きい気圧計を見あげました。気圧計は、
「雨と風。」
とでていました。
「これはおかしいな。」
と、お日さまを見あげながら、ヘムレンさんはつぶやきました。そして、気圧計をトントンとたたいてやると、はりはちょっぴりさがりました。
とたんに、ニョロニョロたちは、ぶきみなざわめきをたてて、一足まえににじりでました。
ヘムレンさんは、びっくりしていいました。
「あんしんおし、あんしんおし。きみたちの気圧計をとりはしないよ。」
しかし、ニョロニョロたちは、ヘムレンさんのことばには耳をかしません。ザワザワ、サラサ

あります。
ニョロニョロたちは、おたがいに気どってあいさつしながら、草の上をひっそりとすべっていっては、気圧計のそばをとおるたびに、ふかくおじぎをするのでした。(それは、すこしばかりこっけいに見えましたっけ。)
ニョロニョロたちがこんなことをしているあいだに、ヘムレンさんは、めずらしい花がたくさんあるのにむちゅうになって、林の中をぶらついていました。どの花も、ムーミン谷にはえているのとは、にていません。――いや、大ちがいです。ガラスでできているみたいにおもたい、銀色の花ぶさや、王さまのかんむりみたいな暗紅色の大きい花や、空の色そっくりの青いばら。
でも、ヘムレンさんは、花のうつくしさには、あまり気をとめませんでした。――なにしろ、おしべや、葉っぱの数をかぞえるのにいそがしかったからです。そして、こんなことばかりつぶやいていました。
「これで、わしの標本は二百十九になったぞ。」
思いもかけずヘムレンさんは、ニョロニョロたちのあつまる場所にぶつかりました。しかも、めずらしい植物に見とれて歩いていたあまり、どんどん、その中へはいっていってしまったのです。そんなわけで、
「ドスン!」


Tove

「どういう島に上陸したのか、それを知ることが、かんじんよ。きけんがあるかもしれないもの。そうでしょ。」

「わかったよ。」

こういって、ムーミントロールは、スノークのきょうだいと、スニフをつれて、南の海岸へでかけました。いっぽう、ひとりで探検するのがすきなスナフキンは、北にむかっていきました。

ヘムレンさんは、小さいスコップと、みどり色のどうらんと、虫めがねをもって、林の中へはいっていきました。まだだれも発見したことのない、めずらしい植物が見つかるかもしれないと考えたのです。

そのあいだに、ムーミンパパは岩の上にこしかけて、さかなつりにかかりました。

お日さまはゆっくりとしずんでいき、金色のもやが、海の上をつつみました。

島のまん中には、花ざかりのやぶにかこまれて、青々した草におおわれた、たいらなあき地がありました。ここでニョロニョロたちは、年に一回、夏至の日にあつまって、ひみつの会合をするのです。

もう、およそ三百ぴきが、そこにあつまっていました。あとまだ、すくなくとも四百ぴきぐらいはくるはずでした。

みんなはあき地のまん中に、青くぬった、高い柱をたてました。その柱には、気圧計がかけて

「りっぱな船つき場もあるな。」

こういってムーミンパパは、そこらにちらばった岩のあいだをぬけて、たくみに陸のほうへかじをとりました。

まもなく冒険号は、すな地にふかくのりつけました。ムーミントロールは、もやいづな（船をつなぐつな）をにぎって、陸をめがけて水にとびこみました。

浜べは、たちまち活気であふれました。

ムーミンママは、いくつも石をひっぱってきて、パンケーキをあたためるかまどをきずきました。それから材木をならべて、その上にテーブルかけをひろげ、風にふきとばされないように、四すみに小石をのせました。

それから、みんなのおさらをとりだすやら、岩かげのしめったすなの中に、バターいれをうずめるやら、さいごには、テーブルのまん中に、はまかんざしの花たばをかざりました。

なにもかも用意ができたときに、ムーミントロールがききました。

「なにかおてつだいすることない？」

「あなたたちは、島を探検すればいいのよ。」

こう、ムーミンママはいいました。子どもたちがなにをしたがっているか、よく知っていたのです。

るまえに、この島にあつまるのです。ニョロニョロたちは世界のあらゆる方角から、その小さい白い、まじめくさった、のっぺらぼうの顔をして、だまりこくって、あつまってきます。

といって、どうしてニョロニョロたちが、まい年こんなあつまりをもつのか、それを説明するのはむずかしいのです。なにしろ、あの小さいおばけは、口をきくこともできないし、耳もきこえず、遠い遠い旅をしてこの島にやってくるよりほかに、なんの目的ももっていないからです。

たぶんニョロニョロたちは、ゆっくりとくつろいで、休んだり、友だちとあったりすることができるこの島が気にいっているのでしょう。

まい年の会合は、いつも六月におこなわれます。そんなわけで、ムーミン一家と、ニョロニョロたちとは、ちょうどおなじころに、このはなれ島についたのでした。

島は、白い波がしらにとりまかれ、青々した木をいただいて、まるでおまつりのために着かざっているみたいに、うつくしく、あらあらしく海からそそりたっていました。

「ゆくてに島が見えるぞ。」

こうムーミントロールがどなると、みんなは手すりから身をのりだして、そちらをながめました。

「すな浜も見えるわ。」

と、スノークのおじょうさんがさけびました。

スニフは一本のつなに、六つの小さいボートを、じゅずつなぎにつなぎました。
こうして全艦隊が、冒険号のあとについて進んでいきました。
かじをとるのは、ムーミンパパでした。ムーミンママは、じっとすわって、こっくりこっくりしていました。ママのまわりがこれほどしずかなのは、めったにないことでしたから。
「どこへいくの。」
と、スノークがききました。
「島へいってね。わたし、まだ一ども小さい島へいったことがないんですもの。」
スノークのおじょうさんが、こういってたのみました。
「いいとも。島が見つかりしだい、そこに上陸するとしよう。」
と、ムーミンパパが答えました。
ムーミントロールは、へさきのいちばんさきにすわって、波がしらを見つめていました。みどり色をした海の底をのぞいたり、船のへさきが白いあわをけたてて進んでいくのを見たりしているのは、まったくすばらしいことでした。思わずムーミントロールはさけびました。
「進め、進め！　ぼくたちは島へいくんだぞう。ピーホー！」
ずっと沖のほうに、ニョロニョロの島が、暗しょうや岩にかこまれて、ひっそりと横たわっていました。一年に一ど、ニョロニョロという小さいおばけたちが、世界じゅうをあらしにでかけ

ムーミンパパは、ゴクリとやってから、とてもうれしそうな顔をして、ききました。
「どこで手にいれたんだね、ぼうや。」
しかし、ムーミントロールは答えました。
「それはひみつですよ。」
それからみんなは、ジュースをびんにつめると、それを船のへさきにたたきつけてわりました。
それと同時に、ムーミンママが、おごそかにいいました。
「ここにわたしは、おまえを『冒険号』と命名します。」
あらしのようなはくしゅかっさい。それからみんなは、バスケットや、毛布や、こうもりがさや、つりざおや、ざぶとんや、フライパンや、海水パンツを、甲板につみこみました。こうしてムーミン一家のものと友だちとは、青々とうねるあら海にのりだしたのです。

すばらしい日でした。お日さまには金色のもやがかかっていましたから、完全な晴れとはいえなかったでしょうけれどね。
冒険号はまっ白い帆をはって、すばらしい速力で沖をめざしました。
波は船べりをたたき、風はうたいました。へさきのまわりでは、おひめさまの人魚や男の人魚がダンスをし、空では白い大きな海鳥が、輪をかいてとびちがいました。

の。――そこで、『冒険号』としたらいいと思うんだけど。」

「ばんざあい。さあ、命名式だ。ママ、シャンペンのかわりになるようなもの、なにかもってる？」

こう、ムーミントロールはさけびました。

ムーミンママは、バッグやバスケットをのこらずかきまわして、きいちごのジュースがないかとさがしましたが、さいごにさけびました。

「まあ、こまった。わたし、きいちごのジュースをわすれてきたようよ。」

「やれやれ、わしはおまえにきかなかったかね。――わすれものはないだろうなって。そうだろ。」

ムーミンパパは、もったいぶっていいました。みんなはかなしそうに、顔を見あわせました。命名式もしない船で航海したものなら、どんなわるい運命にみまわれるかもしれないからです。

そのとき、ムーミントロールが、すばらしい思いつきをしました。

「ぼくに、フライパンをかしてちょうだい。」

こういってムーミントロールは、それに海の水をみたすと、ほらあなの中のぼうしのところへはしっていきました。

もどってきたときには、きいちごのジュースをパパにわたして、こういいました。

「パパ、ちょっと、これをのんでみてよ。」

と、ムーミントロールが、ばかにしたようにいいました。
「しっ、子どもたち。」
と、そのときムーミンパパがいいました。
「しずかにしないか。名まえはママがえらぶのにきまってる。きょうはママのピクニックなんだからね。」
ムーミンママは、すこし赤くなって、はずかしそうにいいました。
「わたしにいい名がつけられるかしら。スナフキンは、とても思いつきがいいもの、きっとわたしより、ずっといい名をつけてくれますわ。」
スナフキンは、にこにこしていいました。
「さあ、どうだかねえ。だけど、しょうじきにいって、ぼくははじめから思ってたんだ。――『まちぶせするおおかみ』ってつけたらいいって。」
「よせやい、ママがつけるんだ。」
と、ムーミントロールがどなりました。
「わかりましたよ、ぼうや。わたしがばかな、むかしふうの女だとは考えないでちょうだい。」
こういってから、ムーミンママはつづけました。
「そうね、ボートはみんながこれからしようと思ってることに、縁のある名まえがいいと思う

「これ、だれの船？」
　ムーミントロールは、そこにはしりつくと、いきをはずませてたずねました。
「だれのでもないさ。」
と、ムーミンパパが勝ちほこったようにいいました。
「浜べで波にあらわれていたのさ。だから、わしらは、これを難破船とみていい権利があるんだ。」
「名まえをつけなくちゃ。」
と、スノークのおじょうさんがさけびました。
「『ちびさん』てつけたら、かわいくないこと？」
「ちびはおまえだい。ぼくは『海のたか』がいいな。」
と、スノークがらんぼうにいいました。
「いや、名まえはラテン語でなくちゃいけない。ムーミナテス＝マリティーマ（ムーミン号）じゃ。」
と、ヘムレンさんがさけびました。
「ぼくがはじめに見つけたんだい。だから名まえはぼくがきめるんだ。スニフ号としたら、とてもみじかくて、きれいじゃないか。」
　こうスニフがわめきました。
「おまえとおんなじじゃないか。――気にくわんねえ。」

「そんなら、だれの足あとだろう。とってもへんな足あとだねえ。」
と、スナフキンがいいました。
ふたりは、またそっと岩をおりて、きょろきょろとあたりを見まわしました。
でも、おどろくようなことは、なにも目につきません。
じゃこうねずみが、なぜあんなにおびえていたのか、ふたりはいくら考えても、わけがわかりませんでした。というのは、じゃこうねずみがおびえたのは、あのぼうしの中にいれておいたいれ歯のせいなんですが、いれ歯のことを話すのを、あの人はどこまでもさけたからです。
（作者の注――じゃこうねずみのいれ歯がどんなふうにかわったか、それが知りたかったら、あなたのおかあさんにきいてごらんなさい。おかあさんは、きっと知っていますよ。）

そのあいだに、ほかのものたちは、浜べにつきました。みんなは花たばみたいに水ぎわにたって、ぺちゃくちゃさわいだり、手をふりまわしたりしました。
「みんなはボートを見つけたらしいぞ。おい、はしっていってみよう。」
と、スナフキンがいいました。
それは、ほんとでした。オールも、さかなつりの道具もそろった、うつくしい大きな帆前船で、白とふじ色にぬってありました。

だ。そんなら、いっそ、ぼくたちでたべちまおうよ。」

と、スニフはいいました。

いくらか心をかきみだされたけれど、みんなはそのまま浜べのほうへ進んでいきました。しかし、ムーミントロールとスナフキンは、そっと列の中からぬけだすと、近道をとって、ほらあなへいそいだのです。

「戸口からはいっていく元気はないな。——きっとまだあいつ、あそこにがんばってるよ。」

こういってスナフキンは、提案しました。

「岩へよじのぼっていって、屋根のすきまからのぞいてみようよ。」

そこでふたりは、岩をよじのぼると、インディアンみたいにはらばいになって、屋根のさけめから、そっと中をのぞいたのです。

そこにまもののぼうしは、ちゃんとたっていました。でも、中はからっぽでした。しかし、毛布は一方のすみになげだされ、本ははんたいがわにすっとんでいます。

ほらあなの中には、だれもいませんでした。ところが、すなの上にはいちめん、まるでだれかがおどったりはねたりして歩いたような、あやしい足あとがついているではありませんか。

「あの足あとは、じゃこうねずみさんのじゃないぜ。」

こう、ムーミントロールがいうと、

けびをあげながら、なにかが、こっちをめがけてはしってきました。
「にげろ、怪物がきたぞ。」
と、ムーミンパパがどなりました。
　ところが、みんなが身うごきするまもないうちに、その怪物は、ぎらぎらと目を光らせ、口ひげをさかだてた、じゃこうねずみだとわかりました。じゃこうねずみは、しきりに前足をふってきみょうな音をたてていましたが、その意味はだれにもわかりませんでした。
　しかし、あの人がひどくおこっているか、おびえていることだけは、よくわかりました。あるいは、ひどくおびえたために、それでおこっていたのかもしれません。ところが、じゃこうねずみは、みんなを見たとたんに、くるりとまわってこちらにしっぽをむけて、いそいでにげていきました。
「いったい、じゃこうねずみさんはどうしたのでしょうね。いつもはおだやかで、おちついているのにさ。」
と、ムーミンママが心配そうにいいました。
「ハンモックのひもがきれたから、きっとあんなことになったんだ。」
と、ムーミンパパは、頭をふりふりいいました。
「きっと、ぼくたちがたべものをもっていくのをわすれてしまったもので、あんなにおこったたん

「さあ、できましたよ。浜べでひと休みするのは、さぞ、すばらしいでしょうね。」
ムーミンパパは、パイプとつりざおをつつむと、みんなにききました。
「さあ、用意はできたかね。それから、ママ、なにももうわすれものはないね。じゃ、オーライ、出発。」
こうしてみんなは、ぞろぞろと浜べのほうへむかいました。いちばんのんびりに歩いていくのはスニフで、六そうのおもちゃのボートをひっぱっていました。
「あんた、じゃこうねずみさんが、なんでおこってると思う？」
と、ムーミンママがスナフキンにききました。
「そんなことはないと思います。」
と、スナフキンは小さい声でいいましたが、それから、つけくわえました。
「だけど、ぼく、ちょっと心配なことがあるんです。」
とたんに、みんながきゅうにたちどまったので、あやうくヘムレンさんは、つりざおで目をつきそうになりました。
「だれがどなってるんでしょ。」
ムーミンママが、おびえたようにさけびました。
森じゅうが、あらあらしいさけびで、ふるえていたのです。それと同時に、恐怖といかりのさ

「子どもはおだまり。ママは水があびたいんだって。さあ、でかけよう。」

こう、ムーミンパパは、きっぱりといいました。

ムーミンママは、荷づくりに大いそがしです。毛布・フライパン、しらかばの皮——これは火をたきつけるのにいちばんいいから、ピクニックにはかかすことができないのです。——コーヒーわかし、たべもののひと山、サラダ油・マッチ、そのほか、たべたり、料理したりすることのできるあらゆる品が、かきあつめられました。

ママはそれをみんな、こうもりがさ、あったかい服、おなかのくすり、たまごのかくはん器、ざぶとん・かや・海水パンツ・テーブルかけなんかといっしょに、バッグの中につめこみました。

それからまだ、なにかわすれたものはないかと、頭をしぼりながら、あっちへはしり、こっちへはしりました。でもとうとう、さいごにさけびました。



なくちゃいけなかったんだ。」
といいました。
「ほらあなだって？」
と、ムーミントロールとスナフキンが、同時にさけびました。
「そうなんだ。ハンモックのひもがきれてね。それで、じゃこうねずみは、もう考えることができないといって、なにもかにもすててしまうことにしたんだ。おまえたち、ブラシをあの人のねどこにいれといいたろ。どんなブラシだか、わしゃ知らないがね。そこであの人は、ほらあなへいっちまったのだよ。」
と、ムーミンパパは話しました。
ムーミントロールとスナフキンは、おそろしくなって、顔を見あわせました。心の中ではしきりに、あのぼうしのことを考えていたのです。
「まあ。でも、たいしたことじゃありませんよ。海岸へピクニックにいくことにして、とちゅうであの人に、たべものをとどけてあげればいいもの。」
こう、ムーミンママはいいました。
「海岸なんてつまんないな。どこかべつのところへいかない？」
と、スニフはぐずりました。

「もう、あらゆる場所へいったからなあ。あたらしい場所なんかないよ。」
と、ヘムレンさんがいいました。
「いや、ないはずはない。もしなかったら、みんなでつくったらいいさ。おい、子どもたち、たべかたやめ。――たべものももっていこうじゃないか。」
こういったのは、ムーミンパパでした。
「もう口の中にはいってるのは、たべてもいい？」
と、スニフがききました。
「おばかさんねえ、あんたは。」
と、ムーミンママはいって、それからみんなにいいました。
「さあ、みなさん、もっていきたいものは、いそいでまとめること。パパは、すぐにもでかけたくていらっしゃるんだからね。だけど、よけいなものをもっちゃだめよ。じゃこうねずみさんには、わたしたちがどこへいったか、手紙を書いておけばいいわ。」
「わしのしっぽよ、おめでとう。」
こう、ムーミンパパはさけびました。「ばんざい」というかわりなんです。それから、ひたいに手をあてていたかと思うと、
「やあ、すっかりわすれてた。ほらあなにいるあの人のところへ、たべものと家具をもっていか

な。」
こう、じゃこうねずみは、心の中でつぶやきました。
それからまたしばらく思索にふけってから、すこしばかりねむることにしました。毛布にくるまってから、いれ歯をはずして、すながつかないように、それをぼうしの中にいれました。
こうしてじゃこうねずみは、幸福な気持ちでねむったのです。

ムーミン家では、おやつにパンケーキをつくりました。——きいちごのジャムをぬった、大きな黄色いパンケーキです。
それから、いつものように、のこりもののおかゆもだしました。でも、だれもたべようとしなかったので、それはあしたの朝までとっておくことにしました。
「わたし、きょうはなにか、とくべつのことをしたくなったわ。」
と、ムーミンママがいいだしました。
「だって、あのおそろしいぼうしを、やっかいばらいしたんですもの、おいわいをしなくてはね。それに、しょっちゅうおなじ場所にいるのは、あきあきしますもの。」
「まったくだ。ねえ、ママ、そんならどこかへ、ピクニックにでかけたらどうだろう。」
こう、ムーミンパパがいいました。

あくせくとそこらをはしりまわって、ぺちゃくちゃおしゃべりしたり、家をたてて食事の用意をしたり、家具や財産をかきあつめることは、なんとむだなことでしょう。

じゃこうねずみは、じぶんのあたらしいすまいを、まんぞくそうに見まわしました。

とたんに、例の黒いぼうしが目にとまったのです。ムーミントロールとスナフキンが、くらいかたすみにおいていった、あのまもののぼうしです。

「おや、紙くずかごが、こんなところにきてるぞ。よろしい。あいつはどこにあったって、役にたつから



「それから、なにか家具もおとどけしますか。」
するとじゃこうねずみは、いくらかやさしい声でいいました。
「うん、そうしてくれたまえ。といっても、ごくかんたんなものがいい。あんたの気持ちはわかっておるんじゃ。しかし、きみの家族となると、しょうじきにいって、しんぼうできんからな。」
こうしてじゃこうねずみは、じぶんの本と毛布をもって、ゆっくりと海岸のがけのほうへいきました。
ムーミンパパは、ほっといきをつきました。それからまた、たばこに水をやるしごとにかかりましたが、そうしていると、じきにすべてをわすれることができたのです。
ほらあなについたじゃこうねずみは、なにもかも気にいりました。やわらかいすなの上に毛布をひろげて、その上にすわると、すぐに冥想にふけりました。
こうしてじゃこうねずみは、ほぼ二時間ほど思索をつづけました。すべては、しずかで、平和でした。天じょうの岩のさけめから、やわらかいお日さまの光が、このかくれがにさしこんできます。日ざしがうつるにつれて、ときどきじゃこうねずみは、わずかにすわっている場所をずらしました。
「わしは、いつまでもここにいるとしよう。」

と、ムーミンパパは、しおれていいました。
「なにしろ、この家には平和というものがないんでね。……それに、古びてくると、糸というものは、あなたも知ってるように、とかく、きれるんですよ。」
「そんな、ばかなことがあるものか。」
と、じゃこうねずみはいいました。
「もちろん、わしが自殺してしまえば、そんなことは問題にならん。ところが、きみのところのわかいれんじゅうが、いまのわしのすがたを見たとしてみたまえ。いや、わしはだれもいない場所にひっこもり、なにもかもすててしまって、孤独と平和の生活をおくることにしよう。わしはこれをさいごに、きっぱりと、そう決心したわい。」
ムーミンパパは、たいそう感動して、たずねました。
「おお、そうですか。で、どちらへおいでになりますか。」
「あのほらあなへじゃ。あそこなら、くだらんわるふざけで、わしの思索のじゃまをするものは、ただのひとりもおらんからな。きみは、一日に二回、食事をもってきてくれたまえ。ただし、十時まえはいけませんぞ。」
「しょうちしました。」
こういって、ムーミンパパは、おじぎをしました。

とさけびました。

　じゃこうねずみは、けわしい顔をして、口ひげをかみながら答えました。

「そんなことはどうでもいい。わしの注意をひくには、大地がはれつして、天から火でもふってこなくちゃな。これしきのことが、なんでわしの心をみだすことができるものか。しかし、わしはこっけいなはめにおちいることは、すかんのじゃ。そういうことは、哲学者にはにあわんでな。」

「でも、見ていたのはわたしだけじゃないですか。」

と、ムーミンパパはいいました。

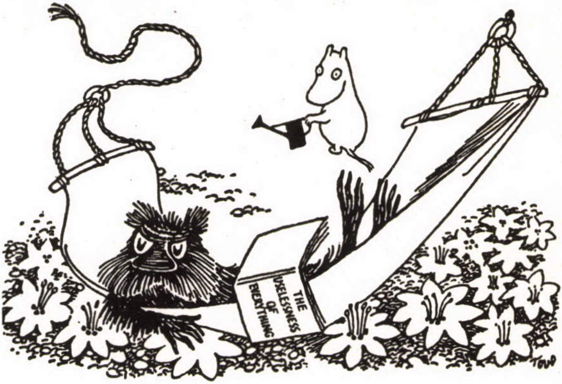
「それだけでもたくさんじゃ。」

と、じゃこうねずみはいいました。

「あんたは、あんたの家で、わしがどういうめにさらされたか、のこらずおぼえておるにちがいない。たとえば、去年、ほうき星がわれわれの上におちてきた。そのことはなんでもない。しかし、あんたもたぶんおぼえておるだろうが、わしは、あんたの家のべとべとしたケーキの上にしりもちをついた。これはわしの威厳にとって、がまんならんぶじょくじゃったですぞ。しかも、ときどきあんたのお客どもは、わしのねどこの中に髪ブラシをいれておく。――まったくぐれつなじょうだんじゃ。おまえさんのむすこの、ムーミントロールのことはいわんでおくがね……。」

「わかりました、わかりました。」

第3章



じゃこうねずみがおそろしい経験をする。どうやって、ムーミン一家がニョロニョロの島をみつけ、この島でヘムレンさんが、あやうくいのちをなくしそうになったか。大夕立にあうこと。

あくる朝、じゃこうねずみは、いつものように本をもって、ハンモックの上にねころがりました。ところが、ちょうどねごこちよくしておいて、本を読みだしたとたんに、ハンモックのひもがきれて、ドスンと土の上におちてしまいました。

「こんなことは、ゆるせんぞ。」

こうさけんで、じゃこうねずみは、足をくるんでいた毛布を、はねのけました。

たばこの苗に水をやっていたムーミンパパは、

「やあ、おけがはありませんでしたか。」

た。もう、ま夜中をすぎて、夜あけが近づいていたのです。
スナフキンとムーミントロールは、おばけのぼうしをほらあなまではこんでいって、いちばんくらいすみのところに、中へなにもおちこまないように、つばを下にしておきました。
「さあ、ぼくたちにできるだけのことは、これでしたよね。あとは、あの五つの小さい雲さえ、とりもどせたらなあ。」
こう、スナフキンはいいました。
「そうだねえ。あの雲たちだって、いまぼくが見ているのより、もっとすばらしいながめを見せてくれるかどうか、それはあやしいけれどさ。」
ほらあなの入り口にたって、うっとりと海のほうをながめながら、ムーミントロールは答えました。

もう一わも、もんくをいいました。
スナフキンは、頭をかいていいました。
「こいつはまいった。――ごらんよ、ぼうしのやつがなにをしたか。この小さいさかなたちは、たしかにこいつの中でおよいでいて、小鳥にかえられちゃったんだ。さあ、いそいでほらあなにいって、ぼうしをかくしてしまおう。」
森をぬけていくあいだ、ムーミントロールは、ぴったりと、スナフキンのうしろにくっついていました。道の両がわで、しきりにザワザワ、パタパタいっていて、どうにもきみがわるかったからです。
木のかげからは、きらきら光る小さい目が、じっとこちらを見つめていました。おまけに、土の上からも、えだのあいだからも、しきりにだれかが声をかけるのでした。
「いいお晩だねえ。」
ムーミントロールのすぐうしろで、またもや、なにかの声がしました。
「ほんとにね。」
ムーミントロールが、勇気をだしてへんじをすると、なにかの小さいかげが、こそこそとそばをかすめて、やみの中にきえていくのでした。
浜べにでると、そこはいくらかあかるくて、青白い光が、海の上にも空にもかかっていまし

くことにしました。でも、スニフには、そのひみつはあかさないことにしました。ほらあなは、ほんとうをいえばスニフのものでしたけれど。なにしろスニフは小さくて、こんな大きなひみつは、にないきれないからです。
「ねえ、スナフキン。ぼくらがパパにもママにも話せないひみつをもったのは、これがはじめてだねえ。」
と、ムーミントロールはしんけんな顔でいいました。
スナフキンはぼうしをもって、川ぞいにかえりかけましたが、橋のところまでくると、きゅうにたちどまりました。
「どうしたの。」
ムーミントロールは、おどろいてききました。
「ほら、カナリアが――。」
と、スナフキンがさけびました。
「三ばの黄色のカナリアが、橋の上にとまってるじゃないか。夜でてくるなんて、ふしぎだなあ。」
「わたし、カナリアじゃありません。うぐいですよ。」
と、いちばん近くにいたのが、口をききました。
「わたしたちは、ちゃんとしたおさかななのよ。三人とも。」

「あれれっ、きいちごのジュースじゃないか。こりゃ、すげえや、これからは、このぼうしに水をいれさえすりゃ、ほしいだけ、きいちごのジュースが手にはいるぞ。ばんざあい。」

その「ばんざあい」というさけびが、川をこえて、スナフキンのところまでとどきました。こっちは、せきこんでどなりかえしました。

「つかまえたかあ。」

「イエース。」

しっぽでしっかりとぼうしをかかえて、ジャブジャブ水の中へひきかえしながら、ムーミントロールは答えました。

おもたいぼうしをひっぱって、流れをおよぎこえるのは、なかなかやっかいでした。ようやく岸にたどりついたときには、もうすっかりつかれきっていました。

「そら、もってきたよ。」

ムーミントロールは、そっけなく、こういっただけでした。

「ごくろうさん。ところで、こいつをどうしたものかな。」

「うん、ぼくの家におくわけにゃいかないし、庭もだめだね。だれかに見つけられちまうもの。」こう、ムーミントロールはいいました。さいごにふたりは、あるほらあなの中に、しまってお



と、スナフキンはそっちを指さしていいました。

「およいでいけば、じきに足が川底のすなにつくからね。だけど、ぼうしの中に足をつっこまないように、気をつけたまえ。ぼうしのてっぺんをつかむんだよ。」

ムーミントロールは、なまぬるい夏の水の中にすべりこんで、いぬみたいに川のまん中へおよぎだしました。そこは流れがきゅうだったので、いっしゅん、いくらかおじけづきましたけれど。

でも、じきに砂州が見えてきて、なんだか黒いものが、その上にのっかっているのが見えました。そこで、しっぽでかじをとっていくと、まもなく足が川底のすなにさわりました。

「うまくいったか。」

と、むこう岸でスナフキンがどなりました。バシャバシャ砂州のほうへわたっていきながら、ムーミントロールは、

「いったぞ。」

と、元気にさけびかえしました。

ぼうしの中からは、にごった水がうずをまいて川の中へ流れだしていました。――まっかな水です。

ムーミントロールは、前足をその中へいれて、用心ぶかく、その水をなめてみましたが、思わずつぶやきました。

夜中に、こうしてスナフキンと歩いていくのは、ムーミントロールにとって、とてもほこらしい気持ちでした。これまでスナフキンは、いつでもただひとりで、夜のさんぽをしていたのです。

「ここらだったんだがなあ。水の中に、黒い島が見えないかね。」

こうスナフキンにきかれて、

「よく見えないなあ。ぼく、きみみたいに、夜でも見える目はもってないんだもの。」

と、うすくらがりの中でつまずきながら、ムーミントロールはいいました。

「さあ、どうやってとったものかな。きみのパパがボートをもってないのは、まったくばかな話だね。」

こういいながらスナフキンは、水のおもてをすかして見ました。

「およいでいってもいいんだけどなあ。——水があんまりつめたくさえなけりゃ。」

こう、ムーミントロールがいうと、

「きみにおよいでいけるもんか。」

と、スナフキンはいいました。

こういわれると、きゅうに元気がでて、ムーミントロールはきっぱりといいました。

「なに、いけるとも。ぼうしは、いま、どこにあるの。」

「あそこさ。」

「あのぼうしが、川下の小さい島にひっかかってるんだぜ。」

そういいながら、スナフキンのまゆは、

「どうだい。」

というふうに、きゅっとすぼまりました。

ムーミントロールの耳は、大きく、

「わかった。」

とばかりに、うごきました。

つぎのしゅんかんには、ふたりはまるでかげのように、つゆにぬれた庭をぬけて、川のほうへいそいでいたのです。

「いっとくけど、あのぼうしをひきあげるのは、まったくぼくらの義務なんだぜ。なにしろ、あいつの中からでてくる水が、すっかり赤くなってるんだ。あんなおそろしい水を見たら、川下に住んでる人たちは、びっくりぎょうてんしちゃうさ。」

こう、スナフキンはいいました。

「そんなふうなことがおこりゃしないかってことは、とうぜん考えておかなくちゃいけなかったんだ。」

と、ムーミントロールはいいました。

こんな晩には、スナフキンはよく横ぶえをふきながら、ひとりでそこらをぶらつくのです。でも、今夜は歌もきこえてきません。きっとスナフキンは、探検の旅にでたのでしょう。まもなくあの人は、家の中でねむるのをことわって、川のそばにテントをはることでしょう。

ムーミントロールは、なんだかかなしくなって、ためいきをつきました。でも、どうしてかなしくなったのだか、それはわかりませんでした。

ちょうどそのとき、庭のほうから、かすかな口ぶえがきこえてきました。ムーミントロールのむねは、大きくはずみました。そっとつまさきだちして、まどのところまでいって、外をのぞきました。

その口ぶえは、

「ひみつ！」

という意味でした。

スナフキンは、なわばしごの下でまっていました。

ムーミントロールが、なわばしごをつたって草の上におりると、スナフキンはささやきました。

「きみは、ひみつがまもれるかい。」

ムーミントロールは、いきおいこんで、こっくりしました。すると、スナフキンは、ムーミントロールのほうに身をよせて、もういちどささやいたのです。

こうきまって、みんなは、ぼうしをびくびくしながら川岸までころがしていくと、水の中へつきおとしました。

ぼうしが流れていくのを見て、ムーミンママはいいました。

「これで、雲もまほうもかたづきましたよ。」

「でも、あの雲はおもしろかったよ。あれは、とっておきたかったなあ。」

こうムーミントロールは、がっかりしたふうでいいました。

「とっておきたいのは、こうずいも、ことばの虫もでしょ。」

と、ムーミンママは、おこったようにいいました。

「まあ、このベランダをごらんよ。そこらじゅう、ごそごそはいまわる、この小さい虫たちは、いったいどうしたらいいの。どこにでももぐりこんで、家じゅう、よごしてしまってさ。」

「でも、あの雲はおもしろかったよ。」

と、ムーミントロールは、まだふくれっつらをして、いいはりました。

そんなわけで、その晩はムーミントロールは、よくねむれませんでした。外はあかるい六月の晩で、ひそひそしたささやき声や、木の葉のサラサラいう音や、パタパタいう足音でいっぱいでした。空気までが花のにおいで、あまくにおいました。

スナフキンは、まだかえってきませんでした。

かいでから、目をぱちぱちさせました。もうすっかりぬれねずみになって、毛がくっついていました。一秒か二秒のあいだ、しいんと、そこらは死んだようにしずまりました。そのときスナフキンがわらいだしました。じきにみんなは、すばらしくゆかいになって、テーブルの下をころげまわりながら、ほえたり、わらったりしました。

　といっても、ヘムレンさんだけはべつです。おじさんは、そういうどたばたさわぎには、くわわりませんでした。そして、びっくりしたように、わかい友だちをながめているのでした。

「だって、わしらは、ありじごくのすがたがかわるものと思ってたんだろ？　それがじっさいにかわっただけのことじゃないかね。まったくきみたちは、はしがころがってもおもしろいんだねえ。わしにはわからんなあ。」

　そのあいだに、はりねずみはおごそかにゆかの上を横ぎって、戸口のところまでいくと、すこしかなしそうにして、階段をおりていきました。

　水の流れがとまってしまい、ベランダは、もう湖水みたいになりました。そのころには、天じょうは、すみからすみまで、外国のことばの虫でうずまっていました。

　なぜそんなことがおこったか、はじめからおわりまで、ムーミントロールから話をきくと、ムーミンパパとママは、これを重大なことと考えました。そんなおばけぼうしは、すぐにすててしまわないとたいへんです。

しかし、それだけではありませんでした。ぼうしのへりまで水がたまってきたかと思うと、それがだんだんあふれて、じゅうたんの上に流れおちはじめたのです。おかげで、ことばの虫たちは水におぼれないように、かべにはいあがらなくてはなりませんでした。

「ありじごくのやつ、水にかわっただけなのかな。」

と、スナフキンは、がっかりしたようにいいました。

「水にかわったのは、おそらくすなだよ。ありじごくのやつは、きっとじきにでてくるね。」

と、スノークはつぶやきました。

みんなはもういちど、もうまちきれなくなったほど、長くまちました。スノークのおじょうさんは、ムーミントロールのひざに顔をうずめて、うとうとしだしました。スニフはこわがって、しくしくやっていました。

そのとききゅうに、ぼうしのふちから、とんでもなく小さいはりねずみが、顔をだしました。はりねずみはくんくん空気を



すなけむりといっしょに、ありじごくは、ころがりだしました。とたんに、いなびかりよりもはやく、スノークがおもたい外国語の字びきを、ぼうしの上にかぶせました。

それからみんなは、テーブルの下にもぐりこんで、なにがおこるか、まちかまえました。

さいしょのうちは、なにもおこりませんでした。

みんなはだんだんまちくたびれてきて、テーブルかけの下から、のぞいてみました。それでもまだ、なにもかわったことはおこっていません。

「きっと、あいつ、くさっちまったんだよ。」

と、スニフはいいました。

ところが、そのとたんに、大きな字びきがよじれまがってきました。スニフはあんまりおどろいて、思わずヘムレンさんの親指に、ぎゅっとくいついてしまいました。——じぶんの指とまちがえたんですね。

辞書はだんだんめくれあがってきて、中のページがかれ葉みたいにまるまりました。と見るまに、そのページとページのあいだから、ぞろぞろと外国のことばがでてきて、ゆかの上をはいまわりだしたではありませんか。

「あれえ、神さま!」

ムーミントロールは、思わずさけび声をあげました。

「だ、だけど、とんでもないばけものにかわるかもしれないよ。ありじごくより、もっときけんなものにかわって、ぼくたちを、みんなぱっくりとたべちまったら……。」
　こういって、スニフがなきそうな声をだしました。
　みんなはすこしこわくなってきました。そして、おしだまってびんを見つめながら、中からきこえてくるかすかな音に、耳をすましました。
「まあ。」
と、スノークのおじょうさんは心配そうにいって、顔色をかえました。スノークのなかまは、気がどうてんすると、顔色がかわってしまうのです。
　ところがスナフキンが、うまいことを考えつきました。——いよいよ実験をするときには、ぼうしの上におもたい本をのっけておいて、みんなはテーブルの下にかくれていればいいというのです。
「なにかためしてみようってときには、どうしたって、きけんがともなうんだ。かまうもんか、すぐほうりこんでみろよ。」
　元気のいいスナフキンがこういうと、よわ虫のスニフは、あわててテーブルの下にはいこみました。そのあいだに、ムーミントロールとスナフキンとヘムレンさんは、びんを例の黒いぼうしの上にもちあげて、下むけにしました。スノークが用心ぶかく、ふたをとりました。

と、スニフがききました。

「ありじごくなんだ。すばらしくおこってる、ほんもののありじごくを、ぼくらはつかまえたんだぜ。」

と、ムーミントロールはほこらしげにいいました。

「すごいのねえ。」

と、スノークのおじょうさんは、感心したようにいいました。

「これからこいつを、あの黒いぼうしの中へいれようってのさ。」

と、スノークがいいました。

「そしたら、きっと、ぼくのときみたいに、かたちがかわると思うんだ。」

そう、ムーミントロールはいいました。

「これはいったい、どういうことだね。だれか、わしに、説明してくれたまえ。」

と、ヘムレンさんがたのみました。

そこでムーミントロールは、説明をはじめました。

「さっき、ぼくのかたちがかわったのは、たしかにぼくが、あのぼうしの中にかくれたからなんです。そのことをぼくたちは、いろんなことからつきとめたんです。そこでこんどは、ありじごくがやっぱりべつのものにかわるかどうか、それを実験して、たしかめようってわけなんです。」

れは、おこっていたのです。
「いそいでふたをしなくちゃ。」
こういってムーミントロールは、上のほうのすなをはらいのけると、しっかりとふたをしました。
それからふたりは、びんをほりだして、それを家までころがしていきました。中ではありじごくが、わめいたり、のろったり、すなでいきをつまらせたりしていました。
「さぞおこってるだろうな。とびだしてきたら、どんなことがおこるか、考えただけでもぞっとするね。」
と、スノークはいいました。
「いまはでられやしないさ。それに、でてくるときには、きっとなにか、とんでもないものにかわってると思うよ。」
こうムーミントロールは、おちつきはらっていいました。
ムーミン家につくと、ムーミントロールは、三ど長い口ぶえをふいて、みんなをよびあつめました。これは、とてもめずらしいことがおこったよ、というあいずなんです。
みんなは、四方八方からあつまってきて、ふたをしたびんをとりかこみました。
「なにがはいってるの。」

「おまえたちは、おれさまが、わざわざばかな子どもたちのために、おれさまとくいの術を見せてやるほど、ひまだと思ってるのか?」

こうありじごくは、はらをたてたようにいいました。でも、やっぱり、じぶんがどんなにつよくて、またすばしっこいか、あいてに見せてやりたいというゆうわくには、勝つことができなかったのです。そこで、ぷんぷんおこりながらも、ありじごくはあなの中からはいだしてきて、いばりくさってききました。

「おい、どこへあなをほるんだ。」

「ここです。」

こういってムーミントロールは、びんのうずめてある場所を指さしました。

ありじごくは、かたをいからせ、見るもおそろしいふうに、たてがみをさかだててどなりました。

「さあ、どいた、どいた! それではおれは、もぐるからな。そのかわり、もどってきたら、きさまたちをくってしまうぞ。ワン、ツー、スリー!」

たちまちありじごくは、プロペラがまわるみたいに、もうれつに足をぐるぐるまわして、おしりからすなの中にもぐりこみました。——まっすぐに、うずまっていたびんの中へ。

まったく、三秒とかかりませんでした。おそらく、二秒半ぐらいだったでしょう。それほどか

「おれをよわ虫といったのは、きさまか。おれはきっちり三秒で、こんなあなにはいれるんだぞ。」
　ありじごくは、すっかりおこっていたのです。
「そんなすばらしい芸当ができるんだったら、じっさいに見せてもらわなくちゃ。」
　こうムーミントロールは、いかにも、もっともらしくいいました。
「きさまに、すなをぶっかけてくれるぞ。」
と、いよいよおこって、ありじごくはさけびました。
「それからあなの中にひっぱりこんで、くってやるからな。」
「いや、いのちだけはおたすけください。ただ、三秒間でうしろむきにあなへもぐりこむところを、見せてくれませんかね。」
と、スノークはあわれっぽくもちかけました。
「どういうふうにやるんだか、それがよく見えるように、ここでやって見せてくれない?」
　こういってムーミントロールは、びんがうずめてある場所をさしました。



「そいつはぼくにまかしとき。」
こうしてムーミントロールは、びんをとると、すこしはなれたところのすなの中に、口を上にむけて、すっぽりとうずめました。それからわざと大きな声をはりあげると、スノークに目くばせしてから、こんなふうにいったのです。
「このありじごくってやつは、とてもよわ虫なんだぜ。」
それからふたりは、むねをどきどきさせながら、ありじごくのあなの中を見つめました。しかし、すながすこしうごいただけで、なにも見えてきません。
それでもムーミントロールは、くりかえしました。
「あいつは、とてもよわ虫なんだ。だから、すなの中へもぐるには、何時間もかかるのさ。きみだって知ってるだろ。」
「うん、そりゃ知ってるけど——。」
と、スノークはあやしむみたいに、口ごもりました。
「いや、まちがいなし。やつは、何時間もかかるともさ。」
ムーミントロールは、目をぐりぐりうごかしながら、きっぱりといいました。
とたんに、ものすごい顔をした頭が、すなのあなからのぞいて、こっちをにらみつけながら、どなりました。

「にくらしいやつなら、かまわないんじゃないか。」
と、スノークがいいだしました。
「ふむ。」と、ムーミントロールは考えこんでいましたが、やがていいました。
「心あたりがあるの？」
「たとえばぶたさ。」
　ムーミントロールは頭をふりました。
「あいつは大きすぎるよ。」
「じゃあ、ありじごくは？」
と、スノークがいいました。
「そいつはうまい考えだ。あいつは一ど、ぼくのママをあなの中へひきこんで、目の中へすなをはねかけたものな。」
　こういってムーミントロールは、スノークの意見にさんせいしたのです。
　そこでふたりは、大きなびんをもってくると、ありじごくをさがしにかかりました。
　ありじごくのあなは、すな地でさがさなくてはいけません。だから、ふたりは、海岸のほうへおりていきました。まもなくスノークは、大きくムーミントロールにあいずしました。
「あったよ、あったよ。だけどどうやって、びんの中へさそいこんだらいいかな。」

「これはきっと……。」
そしてふたりは、じっと、おたがいの目を見つめあったのです。
それから、スノークがいいました。
「おいでよ。」

ふたりはベランダへあがって、用心ぶかく、そろそろとぼうしに近づきました。
「どう見たって、ふつうのぼうしだよねえ。もちろん、きみがシルクハットってものを、いつでもとくべつのものと考えりゃ、べつだけどさ。」
と、スノークがいいました。
「だけど、これが、あれだってことを、どうしたらたしかめられるかしら。ぼくは、とてももういちど、あの中にはいる元気はないぜ。」
と、ムーミントロールはいいました。
「そうだな、だれかをおだてて、あの中へはいらせることができるかもしれないよ。」
こういう案(あん)を、スノークがだしました。
「だけど、そりゃいやしいペテンだよ。二どともとへもどれるかどうか、わからないものね。」
と、ムーミントロールはいいました。

スノークが、こんなふうにきりだしました。
「うん。でも、きみがなにかへんなことをしたから、それですがたがかわったんだろ。いったいきみは、なにをしたのさ。」
ムーミントロールは、頭をふっていいました。
「ぼくは、なにもへんなことなんか、しなかったんだけどなあ。それから、べつにばつをうけるようなことも、いったおぼえはないし——。」
「それじゃ、たぶんきみは、妖精の輪（月夜などに妖精が草の上にかく輪、その中にはいると妖精にばかされてしまう）の中へはいっちゃったんだ。」
と、スノークはいいました。
「そんなはずはないよ。だって、ぼく、ずっとあのあいだ、くずかごになっている、あの黒いぼうしの下にかくれていたんだもの。」
こう、ムーミントロールはいいました。
「あのぼうしの下にかい。」
と、スノークはいいました。——とても信じられないといった顔をして。
ムーミントロールは、こっくりしました。それからふたりは、長いことおしだまったまま、なにか考えていましたが、だしぬけに同時にさけびました。

「だれも、ぼくを信じてくれるものはないのかなあ。」
と、ムーミントロールはなき声になりました。
「よく見てください。ママ。あなただったら、あなたのムーミントロールが、わかるはずです。」
ムーミンママは、注意ぶかく見つめました。そうやって、とても長いこと、おびえきっているむすこの目の中をのぞきこんでいましたが、さいごにママは、しずかにいいました。
「そうね、おまえはたしかにムーミントロールだわ。」
そのとき、ムーミントロールのすがたが、かわりはじめました。耳と、目と、しっぽは、ちぢみはじめ、鼻とおなかはふくらみだしました。こうしてとうとう、むかしのムーミントロールにもどったのです。
「もうだいじょうぶよ、ぼうや。」
こういってママは、つけくわえました。
「ね、なにがおこったって、わたしにはおまえが見わけられたでしょ。」
それからしばらくして、ムーミントロールとスノークは、いつものひみつのかくれ場所にすわっていました。
そこは、青々した葉っぱのカーテンにかくれた、ジャスミンのしげみの下でした。

わ。それなのにあんたの耳ときたら、おなべのとってそっくりよ。」
ムーミントロールは、あわてて耳に手をやってみましたが、つかんだのは、とんでもなく大きい、しわだらけの耳でした。うろたえてムーミントロールはさけびました。
「そんなことといったって、ぼくはムーミントロールだい。きみたちはそれを信じないのか。」
「ムーミントロールは、かわいいきれいなしっぽをもってたよ。ちょうど手ごろの長さのね。それなのに、きみのしっぽは、えんとつそうじのブラシみたいじゃないか。」
と、こんどはスノークがいいました。
しかも、どうしましょう。ムーミントロールが、ふるえる手でさわってみると、それはたしかにほんとうだったのです。
「それに、きみの目は、まるっきりスープざらじゃないか。ムーミントロールのは、小ちゃくて、とてもやさしかったぜ。」
こういったのはスニフです。
「そうだ、そうだ、たしかにそうだった。」
と、スナフキンもさんせいしました。
「おまえはつまり、にせものなんじゃや。」
と、ヘムレンさんがきめつけました。

「みんなでカリフォルニアの王さまをやっつけてるところなの。あんなやつ、そうされたって、あたりまえよ。」
と、スノークのおじょうさんがいいました。
ムーミントロールは、みんなのかさなりあった手足の下から、やっとはいだしてきましたが、さんざんたたきのめされたので、ふんがいしてさけびました。
「こいつらのほうで、けんかをしかけてきたんですよ、ママ。三人もでひとりにかかってくるなんて、男らしくないねえ。」
「ほんとうにそうだわねえ。」
と、ムーミンママはまじめにいいました。
「だけど、あなたのほうで、みんなをからかったんでしょ。いったいあなたは、どこの子なの、小さいぼうや。」
「あーあ、こんないやなあそびは、もうやめてくれないか。ちっともおもしろくないや。ぼくはムーミントロールで、ママはぼくのおかあさんでしょ。きまってるじゃないか。」
こう、ムーミントロールは、なき声をだしました。
しかし、スノークのおじょうさんは、とがめるようにいうのでした。
「あんたが、ムーミントロール? まさか。ムーミントロールは、きれいなかわいい耳をしてた

て、ムーミントロールをどなりつけました。
「でていけ。でないと、みんなでおまえの頭をふみつぶしちゃうぞ。」
「心配するなよ、心配するなよ。どうせただのあそびじゃないか。そうだろ。きみたちが、そんなにぼくのことを思ってくれてるんなら、ぼくはとってもうれしいさ。」
こう、ムーミントロールは、なぐさめ顔にいいました。
「いや、ぼくたちは、おまえのことなんか、ちっとも思ってやしないぞ。」
と、スニフがきいきい声をはりあげました。
「ぼくらのムーミントロールにけちをつける、こんないやらしいカリフォルニアの王さまは、おっぱらっちまえ。」
そこでみんなは、かわいそうにムーミントロールにとびかかりました。こちらは、あんまりおどろいてしまって、じぶんをふせぐこともわすれていました。そんなわけで、いよいよ本気になっておこりだしたときは、もう手おくれでした。
さわぎをききつけたムーミンママが、台所からでてきたときには、ムーミントロールはもうそこにぶったおれて、前足やしっぽやらで、さんざんになぐりつけられていたのです。
「あれまあ、子どもたち、なにをしてるのよ。けんかはすぐにやめなさい。」
と、ママはさけびました。

「きみはいったい、あの子を知ってるのか。」
と、スナフキンがききました。
「イエース、きまってらあ。」
ムーミントロールは、このあたらしいあそびが、すっかりゆかいになりました。そして、じぶんながらうまくやっていると思いました。
「いつあなたは、あの子と知りあったの。」
と、スノークのおじょうさんがききました。
ムーミントロールは、あはは……と、わらいだしながら答えました。
「ぼくたち、いっしょに生まれたのさ。だけど、あいつはきみも知ってるとおり、しようのない不良でね。家の中をさがしたって、いやしませんよ。」
「どうしてあんたは、ムーミントロールのことを、そんなふうにいうの。あの子は世界一りっぱなムーミンよ。わたしたち、とてもあの子をすいてるのよ。」
こうスノークのおじょうさんは、こわい顔をしていいました。
それはムーミントロールにとって、あんまりうれしすぎることでした。
「ほんとかね？ ぼくにいわせりゃ、あいつはまったく、あくまにみいられたやつさ。」
とたんに、スノークのおじょうさんは、おいおいなきはじめました。兄のスノークはおこっ

いの?」
　こうムーミントロールはさけびましたが、
「まあいいや、外へでようよ。——お天気はよくなるらしいもの。」
　こういってムーミントロールは、おどろいたり、あやしんだりしている友だちの先頭にたって、階段をおりて庭へでました。
「あれはだれだね。」
　家のまえにすわって、ひまわりのおしべをかぞえていたヘムレンさんがききました。
「カリフォルニアの王さまらしいわ。」
と、スノークのおじょうさんがいいました。
「あの男も、ここに住むようになるのかね。」
と、ヘムレンさんはききました。
「それはムーミントロールの考えしだいさ。だけど、あいつ、どこへいっちゃったのかしら。」
と、スニフがいいました。
　ムーミントロールはわらいだしました。
「きみもときにはおもしろいことをいうんだね。そんなら、ムーミントロールをさがしにいこうじゃないか。」

と、スノークがいいました。
「ひどいことをいうじゃないか。」
と、ムーミントロールは、かなしそうにいいました。
「きみたちは、かくれんぼにあきたんだろ。そんならこんどは、なにをしようか。」
　こうきくと、スノークのおじょうさんが、きびしい声でいいました。
「それよりまえに、あなたが名まえを名のらなくちゃ。わたしたち、あなたがだれか知らないんだものね。そうでしょ。」
　ムーミントロールは、あっけにとられて、おじょうさんを見つめました。ところが、そのときふっと思いあたりました。――きっと、これはあたらしい「あそび」なのです。そこでムーミントロールは、ゆかいそうにわらっていいました。
「ぼくは、カリフォルニアの王さまなんだ！」
「わたしはスノーク家のむすめ。それから、こっちはわたしの兄(あに)よ。」
と、スノークのおじょうさんはいいました。
「ぼくはスニフっていうんだ。」
「ぼくはスナフキン。」
「おい、よしてくれ。なんてきみたちはとんちきなんだ。もっと気のきいた名まえを思いつけな

「おにさんこちら！　ぼくはここだよ！」
　ところがスニフは、びっくりしたように、まじまじとこちらを見つめていましたが、そっけなくいいました。
「おまえなんか知らないよ。」
「あいつは、だれだい。」
　スノークが声をひそめていいました。でも、みんなはただ首をふって、いつまでもムーミントロールを見つめているだけでした。
　かわいそうに、ムーミントロールはまもののぼうしの下に長くいたもので、とてもへんなすがたにかわってしまったのでした。ふとっていた部分は、みんなやせてしまい、やせていた部分は、のこらずふとりました。
　しかも、いちばんふしぎだったのは、ムーミントロールのほうでは、じぶんがそんなことになったのに、すこしも気がつかなかったことでした。
「みんな、おどろいたろ。ぼくがどこにかくれていたかわかるかい。」
　長い、はりがねのような足で、ひょろひょろと進みながら、ムーミントロールはいいました。
「そんなことは、関係ないね。だけど、おまえのみにくさにゃ、たしかにだれだって、あきれらあね。」

にもぐっていましたが、気が気ではありませんでした。場所がよくなかったのです。スニフがテーブルかけをもちあげたら、たちまち見つかってしまうでしょう。

あたりを見まわしていると、へやのすみにおいてあった黒いシルクハットが目にとまりました。そうだ、すばらしい思いつきでした。

スニフだって、まさか、ぼうしの下にかくれているとは、思いつかないでしょう。

ムーミントロールは、そっとへやのすみにいくと、いそいでぼうしをさかさまにして、頭からかぶりました。ぼうしはこしまでしかとどきません。でも、小さくなって、かがんで、しっぽをひっこめたら、だれにも見えなくなるはずです。

ほかのなかまは、ひとりまたひとりと、みんな見つかってしまったようです。そんなようすに耳をすましながら、ムーミントロールは、くすくすわらいました。

ヘムレンさんは、きっとまた、ソファーの下にもぐっていたにちがいありません。あの人は、それよりほかのかくれ場所は、思いつけないのですから。

いままではみんなが、ムーミントロールひとりをさがして、あちこちはしりまわっています。

ところが、いつまでたっても、だれもここへはさがしにきません。とうとうムーミントロールは、みんながさがすのにあきてしまったのではないかと、心配になってきました。

そこで、ぼうしの下からはいだして、戸口から頭をだしてよんでみました。

第2章



ムーミントロールがおかしなすがたにかわる。そのかたきに、ありじごくのすがたをかえてやる。それからムーミントロールとスナフキンは、こっそりと夜の探検にでかける。

あるあたたかい夏の日、ムーミン谷にはしずかに雨がふっていました。そこでみんなは、家の中でかくれんぼをすることにしました。

おにになったスニフは、へやのすみにたって、前足を鼻にあてがっていましたが、十までかぞえると同時に、くるりとむきなおって、さがしにかかりました。――はじめは、ふつうのかくれ場所をさがして、それから、とくべつの場所にかかりました。

ムーミントロールは、ベランダのテーブルの下

「だってわたし、そこには、スープをおこうと思ってたんですよ。さあ、みんなそろいましたか。じゃこうねずみはまだねてるの？」
「ばかみたいにさ。」
と、スニフがいいました。
「みなさん、きょうはたのしくすごしましたか。」
ムーミンママは、みんなのおさらにもりつけながらききました。
「すばらしかったですよ。」
家族のぜんぶがさけびました。

あくる朝、ムーミントロールが、雲を外にだそうとして小屋にいってみると、雲はすっかりきえていました。——一つのこらず。
でも、あの雲たちが、ベランダの黒いぼうしの中にまたもやころがっていたたまごのからと、なにか関係があるとは、だれひとり考えつかなかったのです。

さんにぶつかりました。ヘムレンさんの顔は、幸福で光りかがやいていました。
「おや、なにかあつめるものがきまったんですか。」
と、ムーミントロールはきいてみました。
「自然研究さ。わしは植物をしらべるんだ。」
と、ヘムレンさんはさけびました。
「スノークくんが考えてくれたんだ。わしは世界一りっぱな植物のコレクションをするぞ。」
こういって、ヘムレンさんは、スカートをひろげると、――ヘムレンさんは、いつもおばさんから相続した服をきています。わたしの思うに、ヘムルはすべてスカートをつけているのです。男も女もすべてスカートをつけるのは、すこしへんですけれど、それは事実だったのです。――この春の日にさいしょに見つけたものを、ふたりに見せてくれました。土とかれ葉のあいだから、とてもかわいいにらが顔をのぞかせていました。
「学名でいえば、ガゲア＝ルテア。コレクションの第一号。完全な標本だね。」
ヘムレンさんはほこらしそうにいって、食堂にはいっていくと、ドスンとそれをテーブルのまん中におきました。
「すみにおいてよ、ヘムレンさん。」
と、ムーミンママがさけびました。



の、茶色のちょうだのは、問題になりません。そんなちょうはかなしすぎます。

　ところが、いま見たちょうは、すっかり金色でした。

「あれには、どういう意味があるんだろ。金色のちょうなんて、ぼく、いままで見たことがないな。」

　こう、ムーミントロールがいうと、

「金色なら、黄色よりももっとすばらしいわよ。いまにわかるわ。」

と、スノークのおじょうさんはいいました。

　やがて、お昼に家へかえったとき、ふたりは、階段のところで、ヘムレン

「あいつはいうんだ。――そんなにはやくおきたって、しようがないじゃあないかって。わしもそう思うね。」

そういってヘムレンさんは、さびしそうにさんぽをつづけました。

そこで、ムーミントロールとスノークのおじょうさんは、木のてっぺんまで雲をとばしていって、ひと休みしました。――お日さまの光をあびて、しずかに風にゆられながら。

そうやりながら、ヘムレンさんのあたらしいコレクションについて、いろいろと考えてみたのです。

「貝がらはどうかしら。」

と、スノークのおじょうさんが口をきりました。

「でなけりゃ、めずらしいボタンはどうだろう。」

と、ムーミントロールがいいました。

でも、ぽかぽかするようなあたたかさで、ふたりはねむくなってきました。そこでふたりは、雲の上にあおむけにねそべって、春の空を見あげました。空には、ひばりがさえずっていました。

と、だしぬけにふたりは、春のさいしょのちょうを目にしたのです。

だれでも知っているとおり、その年、はじめて見たちょうが黄色なら、その夏はすばらしい夏になるし、はじめて見たのが白いちょうなら、その年の夏はおだやかなんです。黒いちょうだ

「ちょうは、わしのいとこのひとりがあつめている。いまからあつめても、とてもあいつにはかなわん。」
「映画のスターのブロマイドは？」
と、スノークのおじょうさんがいいました。
ヘムレンさんは、ただ、「ふん。」といっただけでした。
「ゆびわとか、くんしょうなんかの装飾品は？　あれなら、いくらあつめてもきりがないし――。」
こう、ムーミントロールは、さも有望そうにいいました。
しかし、ヘムレンさんは、やっぱりあいてにしません。
「それじゃあ、わたしには、もうわからないわ。」
と、スノークのおじょうさんはいいました。
「いや、ぼくたちでなにか考えてあげますよ。きっとぼくのママは、いいちえをもってると思うんだ。」
こうムーミントロールは、なぐさめ顔にいいました。
「ところで、ヘムレンさん、じゃこうねずみさんを見かけましたか。」
「あいつは、まだねてるよ。」
と、ヘムレンさんは、なさけなさそうにいいました。

「ねえ、ヘムレンさん、こうでしょ。——あなたはもう切手をあつめる人じゃなくて、コレクションの持ち主にすぎません。ところが、それはあんまりたのしいことじゃない——。」
「うん、たのしくないんじゃ。」
がっかりしたようにヘムレンさんはいって、そこにたちどまると、しわだらけの顔をこちらにむけました。
スノークのおじょうさんは、やさしくその手をとっていいました。
「ねえ、ヘムレンさん、わたし、いいこと思いついたわ。なにか、ほかのものをおあつめになったら。——なにか、まるきりべつのものを。」
「そいつは一つの考えだ。」
こうヘムレンさんはいいましたが、うかない顔つきをしていることは、かわりませんでした。なにしろこれほど大きなかなしみのあとでは、幸福そうな顔をしていられるわけがないと、こう考えてたからなんです。
「たとえば、ちょうをあつめてごらんになったら?」
と、ムーミントロールはいってみました。
「だめ、だめ。」
と、ヘムレンさんはいって、またもやくらい顔をしました。

ヘムレンさんは、のろのろと歩いていきます。ふたりは、おじさんが心の重荷をおろすときまで、尊敬の気持ちをこめて、そっとしておくことにしました。

やがて、ヘムレンさんはどなりました。

「なんてくだらないことばかりなんだ！」

それからまたしばらくして、こう、つけくわえました。

「あんなものがなんになる。このつぎの交換会には、きみたちはたぶん、わしの切手のコレクションを手にいれられるだろうよ。」

「でも、ヘムレンさん。」

と、おどろいたスノークのおじょうさんが、口をはさみました。

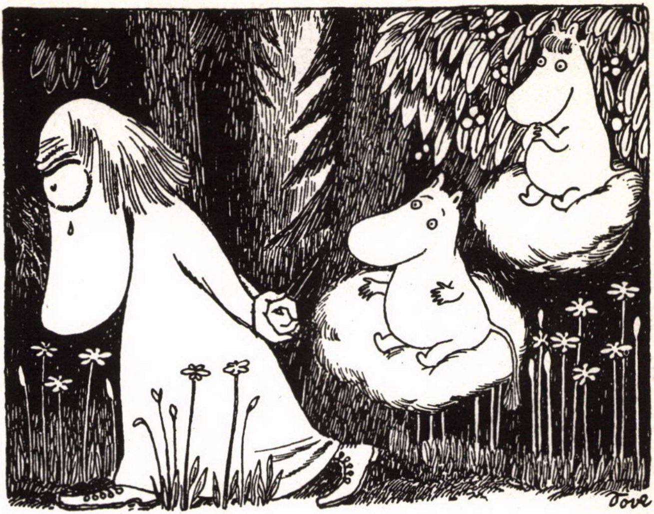
「それは、とんでもないことよ。あなたの切手のコレクションは、世界一りっぱなものですもの。」

しかし、ヘムレンさんはいかにも絶望したようすで、いいつづけました。

「それはそうだ。あれはたしかに完成している。わしの手にはいらなかった切手は一まいもない。にせ切手なんか、一まいもはいっておらん。ところが、これからわしは、いったいなにをしたらいいんだ？」

「どうやら、事情がわかってきたぞ。」

ムーミントロールは、こうつぶやいて、それからゆっくりと、ヘムレンさんにいいました。



と、ムーミントロールはいいました。

「ばかな。」

と、ヘムレンさんは、しずんだ声で答えました。

「切手はみんなそろってる。一まいもかけちゃいない。わしの切手のコレクションは、完全なんだ。かけた切手なんか、一まいもないよ。」

「そうよ、すばらしいものよねえ。」

と、スノークのおじょうさんも、元気づけるようにいいました。

「きみたちにはわからないことだって、さっき、いったじゃないか。」

　こういってヘムレンさんは、うめきました。

　ムーミントロールは、心配そうに、スノークのおじょうさんを見ました。それからふたりは、ヘムレンさんのかなしみを考えて、すこしばかり、ふたりの雲をあとずさりさせました。

ムーミントロールとスノークのおじょうさんは、みごとな三段とびで、ヘムレンさんの左がわに着陸して、ほがらかに声をかけました。

「おはよう！」

「おう、おう！　びっくりさせるじゃないか。そんなにしてわしにとびついてきちゃ、こまるねえ。」

こうヘムレンさんは、あえぎながらいいました。

「あら、すみませんでした。でもねえ、わたしたちののりものはいかが。」

と、スノークのおじょうさんがいいました。

「こりゃあ、すごい。でも、きみたちがとっぴょうしもないことをやるのは、見つけてるから、いまさらおどろきゃしないさ。それに、わしはいま、とても気がしずんでいるんじゃ。」

と、ヘムレンさんはいいました。

「どうなさったの。こんなにいいお天気だっていうのに。」

スノークのおじょうさんは、さも同情したようにいいました。

「きみたちにゃ、いずれにせよ、わからないことさ。」

こういって、ヘムレンさんは頭をふりました。

「あててみましょうか。こんども、めずらしい切手をなくしたんじゃない？」

「だけど、あれはもう、半年まえのことだろ？」
と、ムーミントロールはいいました。
「あら、そうだったわ。あれからわたしたち、ずうっと、ねむってすごしたんですものね。」
と、スノークのおじょうさんもいいました。
「それで、よくねむれた、きみは？」
こういってムーミントロールがきくと、スノークのおじょうさんは、上品にふわふわと木のてっぺんまでとんでいって、しばらく考えてから答えました。
「わたし、とってもこわいゆめを見たの。まっ黒なシルクハットをかぶったいやな男が、わたしに、いーいをしたのよ。」
「そいつはゆかいだ。ぼくもそっくりおなじゆめを見たんだよ。で、その男は、やっぱり白い手ぶくろをしていた？」
と、ムーミントロールはききました。
スノークのおじょうさんはこっくりしました。それからふたりは、森の中をゆっくりぬけていきながら、このことをしばらく考えてみました。そのとき、きゅうに、ヘムレンさんのすがたが目につきました。ヘムレンさんは、手をうしろでくみながら、目を地面におとして、のろのろと森の中を歩いていました。

スナフキンの雲はひっくりかえり、スナフキンは頭から花壇の上についらくしたので、ぼうしが目の上までかぶさりました。
レフェリー（審判者）として、すこしほかのものより上のほうをとんでいたスニフが声をはりあげました。
「三回戦なんだ。これで二たい一。さあつぎは、用意、ドン！」
「ぼくたちはすこし遠くまで、いっしょにでかけてみないか。」
と、ムーミントロールは、スノークのおじょうさんにきいてみました。
「いいわ。」
こういってスノークのおじょうさんは、ムーミントロールとならんで、上のほうにかじをとりました。
「どっちへいきましょう。」
「ヘムレンさんのとこへいって、おどろかしてやろうよ。」
ふたりは、ヘムレンさんのいそうな場所をさがして、庭をまわってみました。でも、ヘムレンさんのすがたはどこにも見えませんでした。
「遠くへいったわけはないわ。あの人、こないだあったときには、切手をよりわけていたもの。」
と、スノークのおじょうさんはいいました。

とどなりました。とてもこうふんしていたため、それよりうまいことばは思いつかなかったのです。

ムーミンパパは、思わず手にしていたペンをおとすと、まどのところへとんできて、さけびました。

「こりゃいったい、どうしたんだ！　いったい、これからどういうことになるんだ！」

「パパの本に、書きこんだらいいでしょ。」

こういってムーミントロールは、こんどはかじを台所のまどのほうへとっていき、ママによびかけました。しかしムーミンママは、大いそぎでさかなのフライをこしらえていたところだったので、こういっただけでした。

「ぼうや、こんどはいったいなにを見つけだしたのよ。ただ、おっこちないようにしてね。」

しかし、庭のほうへおりていくと、スノークのおじょうさんとスナフキンが、あたらしいあそびを思いつきました。おたがいに雲を全速力でとばしていって、ボインとしょうとつさせるのです。それで、はじめにおっこちたほうが負けになるのでした。

「さあ、こい！」

こういってスナフキンは、雲を突進させました。しかし、おじょうさんはたくみに身をかわして、下からスナフキンを攻撃しました。

こういってスニフは、べつの雲にとびのると、玉のりでもする気になって、
「とうざい、とうざい！」
とさけびました。ところが、そうやって「とうざい」をいいかけたときに、雲はふわりとうごいて、しずかに地の上からまいあがったのです。
「やあ、うごいたぞ！」
と、スニフはとんきょうな声をあげました。
たちまちみんなは、雲の上にとびのって、
「とうざい、とうざい！」
とさけびました。
はじめのうち、雲はやたらとはねていましたが、とうとうスノークのおじょうさんが、かじのとりかたを発見しました。かたっぽの足でぎゅっとおしつけると、雲はむきをかえるし、両足でおしつけると、まえへ進み、しずかにからだを左右にふると、雲のうごきはのろくなるのでした。
みんなはとてもおもしろくなってしまって、木のてっぺんや、ムーミン家の屋根のところまで、雲をとばしてみました。
ムーミントロールは、パパのいるまどの外のところまであがっていって、
「コケコッコー。」

ほかのものたちも、そばによってきて、めいめい前足でさわってみました。

「ちっちゃい羽まくらそっくりだねえ。」

と、スニフはいいました。

スナフキンがそっとおしてみると、雲はふわりとすこしばかりうごいて、またとまりました。

「だれがこんなものをもってきたんだろ。どうして、ベランダにのっかっていたんだろ。」

と、ふしぎそうにスニフがいいました。

ムーミントロールは、首をふっていいました。

「こんなふしぎなことって、はじめてだぞ。台所へいって、ママをつれてきてみるよ。」

「だめよ、だめよ。わたしたち、じぶんでしらべてみましょうよ。」

こういって、スノークのおじょうさんは、一つの雲を地面にひっぱりおろして、前足でなでてみました。

「とってもやわらかいわ。」

こういったかと思うと、つぎのしゅんかんには、おじょうさんは雲の上にとびのって、ゆらりゆらりとからだをゆすりながら、くすくすわらっていいました。

「ぼくものってみようっと。」

たからです。そんなわけで、パパはほんのわずか頭がいたくなっただけですみました。――その頭痛も、お昼をたべたら、なおってしまいましたけれどね。

　そのあいだにたまごのからは、あいかわらず白い色はしていましたけれど、どんどんふくらんで、わたのようにやわらかくなっていき、みるみるうちに、くずかごいっぱいになりました。と思うまに、小さい雲が五つ、ぼうしの中からとびだして、ふわりふわりと、ベランダの上をただよっていき、そろそろと階段をおりていったと思うと、地面のすぐ上にうかんだではありませんか。

　ぼうしのほうは、いつか、からっぽになっていました。

「こりゃいったい、どうしたんだ。」

と、ムーミントロールは、おどろきのさけびをあげました。

「おうちが火事になったんじゃない？」

と、そこへやってきたスノークのおじょうさんは、心配そうにいいました。

　雲たちは、まるでなにごとかをまちうけているみたいに、かたちもかえず、うごきもしないで、みんなのまえにふわふわとうかんでいます。

　スノークのおじょうさんは、こわごわ手をだして、いちばん近くにあった雲にさわってみたかと思うと、おどろいていいました。

なさないただ一つの持ちものといえば、横ぶえ一本だけだったのです。

「朝ごはんがすんだら、スノークがどうしてるか、みんなで見にいかないか。」

と、ムーミントロールはいいました。

ところで、庭へでていくまえにムーミントロールは、じぶんのたべたたまごのからを、あたらしいくずかごになげこみました。なにしろ、そだちのよいムーミンでしたもの。

食堂は、いまやからっぽになりました。

たまごのからをいれた黒いぼうしは、テーブルと台所のドアの中ほどのすみっこに、しずかにたっていました。

とそのとき、まったくふしぎなことがおこったのです。たまごのからのかたちが、かわりはじめたのでした。

このぼうしのふしぎな性質といえば、もしなにかが、しばらくその中にはいっていると、すっかりべつのものにかわってしまうことでした。あなたの見たこともないような、とんでもないものにかわってしまうのですよ。ムーミンパパにこのぼうしがにあわなかったのは、さいわいでした。それというのも、「あらゆる小さいいきもののまもり神」である神さまが、もしパパが、もうすこし長くあのぼうしをかぶっていたら、どんなことになったか、ちゃんと知っていらっしゃっ

「さ、子どもたち、たまごをおあがり。冬じゅう、まつの葉だけたべていたんだもの、栄養をとらなくちゃね。」
こういってママは、また台所にきえていきました。
「だけど、あのぼうしはどうしたらいいだろうね。すばらしいぼうしだけどなあ。」
と、スニフがいいました。
「紙くずかごにしたらいい。」
こういったのは、ムーミンパパでした。それからパパは、じぶんのわかい日の思い出を書くために、二階へあがっていきました。それは、なやみにみちたじぶんのわかい日についての長い長い物語でした。
スナフキンは、ぼうしを、テーブルと台所のとびらの中間の、ゆかの上において、にやにやわらいながらいいました。
「そら、こうやってくずいれにしたらどう。これでまた、財産が一つ、ふえるわけだものね。」
こんなひにくをいったのは、スナフキンにとっては、どうしてみんなが持ちものをやたらにほしがるのか、わけがわからなかったからです。スナフキンときたら、生まれたときからきている古シャツ一まいで、すみからすみまで幸福だったのです。といっても、この男がいつどこで生まれたのか、だれひとり知りませんでしたがね。そうして、いつなんどきでも、スナフキンの手ば

と、ムーミントロールはさけびました。
台所の戸をあけてでてきたムーミンママは、びっくりして、夫を見つめました。
「どんなふうに見えるね？」
と、ムーミンパパがききました。
「とてもすてきよ。そうね、それをかぶったところは、とてもハンサムだわ。でも、すこしあなたには、大きすぎないかしら。」
と、ムーミンママはいいました。
「こうやったほうがにあうかな。」
こういってパパは、ぼうしをすこしばかりあみだにかぶりなおしました。
「ふむ、そうやったところも、なかなかスマートね。でも、どうもわたし、あなたはぼうしをかぶらないほうが、おもみがあると思うのよ。」
ムーミンパパは、じぶんのすがたを、まえから見、うしろから見、また横からながめました。
それから、ふうっとためいきをついて、ぼうしをテーブルの上においていいました。
「おまえのいうとおりだ。人によっちゃ、ぼうしをかぶらんほうが、にあうんだな。」
「もちろんですわ、あなた。」
と、ムーミンママはやさしくいってから、

このかっこうのニュースは、よいしるしでした。もっとも、かっこうが西へとんでいったのなら、なおさらよかったでしょうがね。

「パパ、見てごらん。ぼくたち、いいものを見つけてきたんだよ。」

ムーミントロールは、意気ようようと口をはさみました。

「あたらしいきれいなシルクハット――きっとパパに、にあいますよ。」

ムーミンパパは、新聞をわきにおいて、ぼうしをとてもていねいにしらべました。それからパパは、大きなかがみのまえにいって、それをかぶってみました。ぼうしはいくらか大きすぎました。――しょうじきにいって、まるで目の上までかぶさってしまい、とてもおかしなかっこうでした。

「ママ、きて。パパを見てごらん。」



けど、もう家にかえらないか。ぼく、死ぬほどおなかがすいちゃったんだ。きみたちは、どう?」
と、スニフがいいました。
「ぼくも、いま、そういおうと思ってたところさ。」
こう、スナフキンもいいました。
そんなわけで、ムーミンたちは、そのふしぎなぼうしを家にもちかえったのです。それが飛行おにのぼうしで、やがてムーミン谷にまほうをかけるようになろうとは、思いもかけませんでした。ところが、まもなくみんなは、とてもふしぎなできごとにぶつかってしまったのです……。

ムーミントロールと、スナフキンとスニフが、朝ごはんをたべるためにベランダにでていったときには、ほかのものはもうみんな食事をすませて、そこらにでかけていました。ベランダでは、ムーミンパパが、新聞を読んでいるだけでした。
「よし、よし、おまえたちももう目がさめたんだね。」
と、パパはいいました。
「ところで、きょうの新聞には、まるで記事がないのさ。小川のダムがくずれて、ありがどっさり流されたが、みんなすくわれたというのと、夜あけの四時に、この谷間にさいしょのかっこうがきて、それから東へとんでいった、という記事だけなんだ。」



ムーミントロールは、そのぼうしをひろって、つくづくながめていましたが、やがていいました。
「こりゃ、すばらしいぼうしだ。きっと、きみににあうよ、スナフキン。」
でも、じぶんのみどり色のぼうしが気にいっていたスナフキンは、答えました。
「いや、これじゃあ、あたらしすぎるよ。」
「きっと、うちのパパの、気にいるかもしれないな。」
と、ムーミントロールはいいました。
「とにかく、もっていこうよ。だ

と、スナフキンがいいました。

「あの山のてっぺんにのぼって、ぼくらがさいしょにのぼったしるしに、石をつみあげたらどうだろ。」

「うん、そりゃおもしろいぞ。いこうよ。」

と、スニフがいいました。

そこで三人は、だれよりもはやく山のてっぺんまでいこうと、さっそくのぼりにかかりました。頂上につくと、三月の風が、みんなのまわりをおどりはねました。足の下には、青々したながめが、遠く遠くひろがりました。

西のほうには、海が見えました。東のほうには、川が「おさびし山」をとりまいて、うねりまがっています。北のほうには、大きな森がみどりのじゅうたんをひろげているし、南を見ると、ムーミントロールの家のえんとつから、青いけむりがたちのぼっていました。ムーミンママが、朝ごはんのしたくをしているのでしょう。

ところが、スニフときたら、そんなものには、目もくれませんでした。なにしろ、山のてっぺんに、ぼうしが一つころがっていたからです。――まっ黒いシルクハットでした。

「もうだれか、さきにきたらしいぞ！」

と、スニフはさけびました。

「けっこうな春になりましたね。冬のあいだはどうでした？」
と、年とったみみずが、声をかけました。
「ありがとう。とてもいいぐあいでしたよ。おじさんはよくねむれましたか。」
と、ムーミントロールはいいました。
「よくねむりましたよ。おとうさん、おかあさんに、よろしくいっておくれ。」
と、みみずはいいました。
こんなふうに歩いていきながら、ムーミンたちは、いろんな人たちと話しあいました。
でも、山をのぼっていくにつれて、であう人は、だんだんすくなくなりました。しまいには、たった一ぴきか二ひきのおかあさんねずみが、そこらをくんくんかぎまわして、春の大そうじをしているのが、目にはいっただけでした。
どこもかしこも、どろんこでした。
「うふっ！　なんてひどい道なんだ。こんな雪があっちゃ、ムーミンにとってはよくないんだって、おかあさんがいったよ。」
ムーミントロールは、用心ぶかくとけかけた雪の中のかわいたところをひろって歩きながら、こんなふうにいいました。それから「ハクション！」と、くしゃみをしました。
「ねえ、ムーミントロール、ぼく、いいことを思いついたんだ。」

「ぼく、まだねむいんだぞ。」
と、おこったような声がしました。
「おこってなんかいないで、おりてこいよ。ぼくたち、とってもおもしろいことをはじめるんだぜ。」
と、スナフキンがいいました。

　するとスニフは、ねむりでちぢかんだ耳をなでながら、なわばしごをおりてきました。ふつうの階段はとてもまわり道になるので、どのまどの下にも、なわばしごがぶらさげてあるのです。

たしかにきょうは、すばらしいお天気になりそうでした。どこにもかしこにも、長い冬のねむりからさめた小さいいきものたちが、よっぱらったような顔つきをして、ぶらついていました。去年あそんだ場所をさがしてるのや、きものに風をあてているのや、口ひげにブラシをかけているのや、せっせと春のすまいの用意をしているのや。

　あたらしい家をたてているものも、おおぜいありました。どうやら、けんかをしているものもあったのじゃないかしら。こんなに長いことねむったあとでは、目がさめたって、とかくきげんがわるいものですからね。

　木にすみついている妖精は、そこにすわって、長い髪の毛をすいていました。そうかと思うと、木の根もとの北がわでは、赤ちゃんのねずみが、雪の中にせっせとトンネルをほっていました。

「スニフは、もう目がさめたかしら。」
「まだだろ。あいつはいつでも、みんなより一週間は長くねむるんだもの。」
と、ムーミントロールは答えました。
「そんなら、ひとつ、あいつをおこしてやらなくちゃ。」
　こういってスナフキンは、ぴょいと手すりからとびおりました。
「きょうはいいお天気になるらしいから、なにかおもしろいことをしなくちゃね。」
　そこで、ムーミントロールは、スニフのねているまどの下にいって、ひみつのあいずをしました。――まず、三回ふつうの口ぶえをふいてから、指をくわえてピューッと高くふき鳴らすのです。これが、
「これから、なにかはじめるぞ！」
という、あそびなかまのあいずなのです。
　たちまち、スニフのいびきの音がやみました。けれども、二階のへやでスニフがおきあがったけしきは、すこしもありません。
「もう一回！」
と、スナフキンがいいました。そこでふたりは、もっと高く、ピューッとやりました。
　たちまち、いきおいよくまどがあいて、

「ヘロー。」
スナフキンは答えて、あいかわらず歌をつづけました。
お日さまがもう顔をだして、まっ正面からふたりをてらしました。あまりのまぶしさに、ふたりは目をぱちぱちやりました。そうやって、流れていく水の上で足をぶらんぶらんさせているのは、とてもたのしい、のんびりした気持ちでした。
この川では、ふたりはいろんなおもしろい冒険をしたものです。いろんなあたらしい友だちをつかまえて、家へもちかえったこともあります。
ムーミントロールのおかあさんとおとうさんは、いつでもちっともおこらないで、そんなあたらしい友だちを、むかえてくれました。そうして、寝室にあたらしいねどこをこしらえ、食堂のテーブルには、あたらしい葉っぱをだしてくれるのでした。
そんなわけで、ムーミンやしきは、いつでも満員でした。そこでは、だれでもすきなことをやって、あしたのことなんか、ちっとも気にかけません。ちょいちょい、思いがけないこまったことがおこりましたが、だれもそんなことは、気にしないのです。これは、いつだって、いいことですよね。
スナフキンは、「春がきた」の歌をふいてしまうと、横ぶえをポケットにつっこんで、いいました。

ました。

「あいつ、とてもたのしい気持ちでいるらしいな。きっとここで、でんぐりがえりをやったんだ。――もうまちがいなし。」

こんなことを考えていたときです。だしぬけにムーミントロールは、鼻をもちあげて、耳をぴんとおったてました。ずっと遠くのほうから、なにかの歌がきこえてきたのです。それは、スナフキンが、いちばんきげんのいいときにうたう歌だったではありませんか――。

すべてちっちゃな動物は
しっぽにリボンをつけなくちゃ……

ムーミントロールは、いそいでそちらにかけだしました。

川のほうへくだっていくと、すぐにスナフキンのすがたが見えました。スナフキンは、例の古ぼうしを耳の上までまぶかにかぶって、橋の手すりにこしかけていました。両足を水の上にたらして、ぶらんぶらんさせながら。

「ヘロー。」

こういって声をかけて、ムーミントロールは、そのそばにこしをかけました。

たいどこにいるのか、なかなかわかりませんでした。なにしろ、百日百晩も、ねむりとおしていたのです。頭の中では、まだゆめがおしくらまんじゅうをして、ムーミンぼうやを、もういちどゆめのほうへ、おしもどそうとしていました。

ところが、ムーミントロールがねどこの中でもそもそやって、もういちどねごこちよくまるまりこもうとしていたときです。なにかが目にとまって、ぱっちりと目をひらかされてしまいました。——友だちのスナフキンのねどこが、からっぽになっているではありませんか。

ムーミントロールは、いそいではねおきました。そうなのです。スナフキンのぼうしも、なくなっていました。

「しまった!」

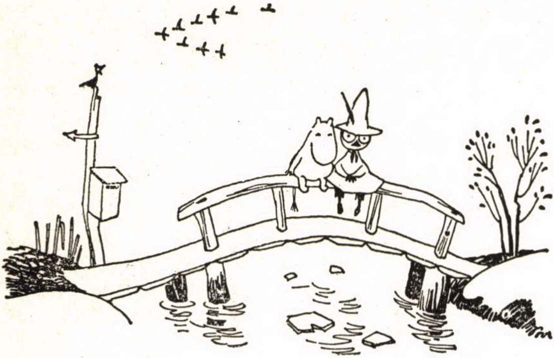
すぐにおきあがると、つまさきだちで、まどのところへいって、あけてみました。

「ははあん。スナフキンのやつ、なわばしごをつたって、外へでたな。」

ムーミントロールは、こうつぶやくと、じぶんもまどじきいの上によじのぼって、用心ぶかく、みじかい足をうごかしながら、なわばしごをおりていきました。

しめった土の上には、スナフキンの足あとが、はっきりとついていました。その足あとは、あっちへまがり、そっちへよろけしていて、あとをたどっていくのが、なかなかやっかいでした。ときには、きゅうにぴょんぴょんはねでもしたらしく、足あとがやたらとかさなりあってい

第1章



ムーミントロールと、スナフキンと、スニフがまもののぼうしを見つける。あらわれた五つの小さな雲。ヘムレンさんが、あたらしいたのしみを発見する。

ある春の朝のかっきり四時に、さいしょのかっこうが、ムーミン家の青い屋根にとまって、

「カッコー、カッコー。」

と、八回鳴きました。なんだかその声は、まだいくらか、しゃがれていました。なにしろ、まだ春はすこしはやすぎましたから。

それからかっこうは、東のほうをさして、とんでいきました。

ムーミントロールは目をさましたまま、長いこと天じょうを見つめていましたが、じぶんがいっ

ムーミントロールは、ねむたそうになにかつぶやきましたが、そのときにはもう、うっとりとゆめの世界にはこばれていったのです。

外では、しきりに雪が、やわらかく、あつく、ふりつもっていきました。もう、げんかんの階段をうずめ、屋根や、のきからは、おもたくたれさがっていました。

まもなくムーミンたちの家は、一つの大きな雪だるまみたいなものになってしまうことでしょう。

とけいも一つまた一つ、チクタクいうのをやめていきました。冬がきたのです。

まつ葉では、あんまりおいしくはなかったろうと思うのだけれど、夕飯はたのしくおわりました。それからみんなは、おたがいにいつもよりすこしていねいに、
「では、おやすみなさい。」
といいあいました。
「みんな、よく歯をみがかなくちゃだめよ。」
と、ムーミンママは、みんなにいいきかせました。
それから、ムーミンパパは、家じゅうを見まわって、戸やまどをしめ、シャンデリアの上には、かやをかけました。――ほこりがたまらないようにね。
それからみんなは、めいめいのベッドにもぐりこんで、ぐあいよくまるまると、耳の上まで毛布をひっぱりあげて、心の中で、なにかたのしいことを考えるのでした。
ところが、ムーミントロールは、ほっとためいきをついていいました。
「いやだなあ。ぼくたち、時間をうんとむだにしちまうんじゃない？」
「心配するなよ。きっとぼくたち、すばらしいゆめを見るぜ。そうして、こんど目がさめたときには、もう春になっているんだからね。」
と、スナフキンは答えました。
「むにゃむにゃ……。」

あさんのところへいくと、いいました。

「雪がふってきましたよ、おかあさん。」

「知っていますよ。」

と、ムーミンママはいいました。

「わたしはもう、おまえのねどこを、とてもあったかい毛布で、用意しておきましたよ。おまえは、スニフといっしょに、屋根うらの小さなへやでねむるのよ。」

「でも、スニフはとてもひどいいびきをかくんだもの、いやだなあ。スナフキンといっしょにねてはいけないの。」

と、ムーミントロールはいいました。

「おまえのすきにしていいよ、ぼうや。そんならスニフは、東のへやでねればいいもの。」

こう、ムーミンママはいいました。

それから、ムーミン一家は、なかよしのお友だちや、知りあいをまねいて、長い冬をむかえるための、さかんな宴会をひらきました。

ムーミンママは、みんなのために、ベランダにテーブルをならべました。でも、テーブルにだすものといっては、もうまつ葉しかありませんでした。冬じゅうゆっくりとねむろうと思ったら、おなかにどっさりまつ葉をつめこんでおくことが、なによりもたいせつなんです。

はじめに



ある灰色にくもった日のことです。ムーミンたちの住む谷間に、その冬での初雪がふってきました。

雪はしずかにふりつもって、みるみるうちに、なにもかも、まっ白にうずめてしまいました。

ムーミントロールは、戸口にたって、谷間がまっ白い冬の毛布でおおわれていくのを、じっと見ていました。ムーミントロールは、心の中で思いました。

「いよいよ今夜は、きっとぼくたち、長い冬のねむりにつくんだぞ。」

ムーミントロールたちは、だいたい十一月には、冬眠にはいります。冬のさむさと、くらい長い夜をすかない人たちには、これはうまいやりかたではないでしょうか。

そっと戸をしめて、ムーミントロールは、おか


N.W.
N.E.
W
E
S.W.
S
S.E.
ニョロニョロの
おさびし山
ほらあな
砂洲
ライラック
のしげみ
たきぎ小屋
ジャスミンのしげみ
ムーミンやしき
たばこばたけ
MAP OF MOOMIN VALLEY
ムーミン谷の地図
Tove

もくじ



●トフスランとビフスラン

へんなことばをしゃべる。ふたりいつもいっしょ。





●ありじごく

飛行(ひこう)おにのぼうしにいれられて、おかしなものにかえられてしまう。

●じゃこうねずみ

「すべてがむだであることについて」という本を読む哲学者(てつがくしゃ)。



●モラン

女のまもの。

●飛行(ひこう)おに

「ルビーの王さま」をさがしもとめて、月にまでいく。



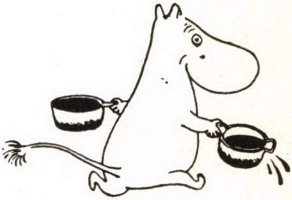
●ムーミンママ

ムーミントロールのおかあさん。お客をむかえるのがすき。



●ヘムレンさん

しずかに歩きまわる。世界じゅうの切手をあつめてしまった。



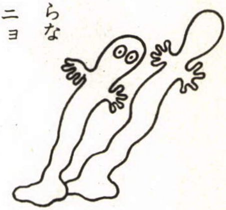
●スノーク

スノークのおじょうさんの兄。いばりや。



●ニョロニョロ

ひとこともしゃべらない。一年に一回、ニョロニョロの島にいく。



●スニフ

ムーミントロールの友だち。おくびょうで、すぐなき声をだす。



おもな登場人物

●ムーミントロール

ムーミン家のひとりむすこ。



●スノークのおじょうさん

ムーミントロールの友だち。かわいらしい前髪をもっている。



●スナフキン

ムーミントロールと友だち。孤独と自由を愛する。



●ムーミンパパ

ムーミントロールのおとうさん。苦しい青春時代の思い出を書いている。



TROLLKARLENS HATT

Written and Illustrated

by

TOVE JANSSON

たのしいムーミン一家

トーベ=ヤンソン／作・絵
山室　静／訳

講談社 青い鳥文庫

講談社 青い鳥文庫

たのしい
ムーミン一家

トーベ＝ヤンソン/作・絵
山室　静/訳